

ISSN 1342-2405

D.H.ロレンス研究

第28号

2018

日本ロレンス協会

目 次

論文

D. H. ロレンスの詩「ピアノ」の改稿をめぐって

..... 倉持 三郎 3

特集 1 D・H・ロレンスと労働（者階級）

『虹』における階級と歴史——モビリティと世代／生成の美学

..... 近藤 康裕 19

英国のゼネラル・ストライキ文学

——D・H・ロレンスとエレン・ウィルキンソンの労働者階級小説

..... 井上 麻未 37

特集 2 情動・共感・D. H. Lawrence とその周辺

情動，モダニティ，不気味なもの——D・H・ロレンスの反心理学をめぐる覚書——

..... 遠藤 不比人 59

書評

Takeo Iida, *D. H. Lawrence as Anti-rationalist: Mysticism,*

Animism and Cosmic Life in His Works 新井 英永 65

John Beer, *D. H. Lawrence: Nature, Narrative, Art, Identity*

..... 青木 晴男 72

Andrew Harrison, *The Life of D. H. Lawrence*

..... 木下 誠 77

David Ellis, *Love and Sex in D. H. Lawrence*

..... 中林 正身 80

遠藤不比人『情動とモダニティ——英米文学／精神分析／批評理論』

..... 秦 邦生 90

ロレンス研究文献	97
事務局からのお知らせとお願い	101
大会研究発表のための助成金制度	103
和田静雄海外研究発表助成制度	106
大会報告	108
会計報告	114
投稿論文講評	118
『D. H. ロレンス研究』第 29 号原稿募集要項	119
会則	121
役員一覧	124
編集後記	126

D. H. ロレンスの詩「ピアノ」の改稿をめぐる

倉持 三郎

1

本論はロレンス (D. H. Lawrence) の詩「ピアノ」(“Piano”) の初稿 “The Piano” がどのように改稿されて定稿になったかを考察することを目的とする。その際、改稿に付随して起こる次の3点に注意する。(1)「追憶の想いが強すぎる」のは初稿か定稿か。(2) 定稿が存在する現在では初稿は不必要になったか。(3) 定稿ができたのは、『虹』が発売禁止になってからまもない時期であり、改稿にその影響がなかったか。

定稿の「ピアノ」はリチャーズ (I. A. Richards) の『実践批評・文学的判断の研究』(*Practical Criticism: A Study of Literary Judgment*, 1929) で取りあげられた13編の詩のひとつであり、かなり広く知られている。よくできた作品であることは間違いないので、ロレンスの詩の代表作のひとつになった。『新詩集』(*The New Poems*, 1918) に収録されたあと、ロレンス自身が選んだ『自選詩集』(*The Collected Poems*, 1928) に、そのまま収録されて定稿となり、それ以後のハイネマン版『全詩集』(1964)、ケンブリッジ版『全詩集』(2013) にもそのまま収録されてある(本論での定稿からの引用は、ケンブリッジ版『全詩集』第1巻108頁による。訳は倉持)。

他方、「ピアノ」には初稿 “The Piano” がある。ロレンスの大学時代に主に使用したノートに清書原稿がある。ハイネマン版『全詩集』第2巻940頁に「付録」として収録されている(本論での初稿の引用はこれによる。訳は倉持)。初稿が5連あったのに、そのうちの2連が削除されて定稿では3連になってしまった。他の場合と比較すると「ピアノ」の改稿はかなり大規模である。初稿の研究も定稿の研究もあるが、比較となると意外にすくない。¹そして納

得できる論がない。

2

次に初稿と決定稿の相違を検討するが、本論ではまず第1点として初稿と定稿では、どちらが「追憶の想いが強すぎる (nostalgic)」かという点を考察する。その理由はハイネマン版『全詩集』の編者のひとりピントー (Vivian de Sola Pinto) が序文の中で、定稿よりも初稿の方が「追憶の想いが強い」と述べているが、筆者は納得できないからである。

ピントーは次のようにいう。「『ピアノ』と呼ばれる初稿は現在、ノッティンガム大学図書館に原稿が保存されてある。この初期の版は散漫で、追憶の想いが強すぎ、細かなことが多すぎる」(*Poems* 7)。

ピントーの初稿批判は「散漫で」、「追憶の想いが強すぎ」、「細かなことが多すぎる」の3点であるが、本論ではそのうちの「追憶の想いが強すぎる」の点を中心に見る。以下、各連ごとに具体的に見て、納得できない理由を述べたい。

まず、ピントーが初稿の方が「追憶の想いが強すぎる」と考えたのは、詩の一部を誤読しているからであることを指摘したい。ピントーは次のように書く。

それ(初稿)は定稿が3連からなっているのにたいして5連ある。そしてコンサートの歌手を描写している。その歌は「朗朗たる声の女性がうたい……腕と胸を魂のすべてをあらわにして……荒々しいハンガリアの曲をうたっている」という形でロレンスに子供時代を思い出させている。
(*Poems* 7-8)

しかし、「私」に子供時代を思い出させたのは、「朗朗たる声の女性」でもなく、「ハンガリアの曲をうたう胸をあらわにした女性」でもなく、第2連1行目の「女性」である。ピントーは、この「女性」を第3連、第5連の歌手と混同している。ここに誤りがある。以下、具体的に見たい。

初稿が大学ノートに清書された時期は1907年頃と推定されている。² ロレン

スが21歳の頃である。まず、タイトルのピアノについて確認したい。作品中で言及されているピアノのひとつは母親のピアノである。ロレンス家にピアノが入った時期は、ウォーカー通りの家に住んでからのようである。「客間に……コテージピアノがあった」(Neville 55) このピアノはアップライトピアノではなくてスクエアピアノであったろう。³

次に初稿を見る(引用はハイネ版『全詩集』第2巻940頁からである)。第1連では執筆している時点での母のピアノと黒いグランドピアノが比較される。

あのピアノのすばらしい、つやつやした黒の輝きの下のどこかに
母の小さくて茶色のピアノが隠されているに違いない。その背は
壁にくっつきそうで前面の色あせた絹は、左右ともやぶけている、
鍵盤は母の指が叩いたためにすこしへこみがある。

ひとつは「つやつやした黒」のピアノである。第5連で「大きな」とあるのでグランドピアノであろう。この当時、ロレンスは、ノッティンガムのどこかで黒いグランドピアノを見た。それが直接的には、この作品を書くきっかけになったろう。そのピアノから母が持っていた小さい茶色のピアノを連想する。

真新しいピアノにくらべると母の小さな茶色のピアノは、古ぼけている。正面についている装飾用の絹の緑色はあせて、さらに破けている。鍵盤はへこんでいる。どう見ても母のピアノは見劣りする。黒いピアノの下に母のピアノが「隠されている」という表現は何気ないようだが重要である。同じ場所に2つのピアノがあることで、場所の占有の争いが生じる。この占有は「私の心」をどちらが占有するかということである。このテーマは次の連に引き継がれる。

次の第2連では過去にもどる。そして母とそのピアノを弁護することになる。

暗がりの中で、静かに女性は私に向かって歌をうたっている、
声を抑えて。年月をさかのぼって昔にもどると、ふるえる弦の響きに包

まれて

子供がピアノの下に座っているのがみえる、
微笑しながらうたう母の小さな落ち着いた足を押しながら、

この連はピントーが言うように、まさしくピアノを弾く母の追憶である。ある女性がうたってくれた歌から10年くらい前の子供時代を思い出す。そして子供の自分がピアノの下に座り、ピアノを弾く母の足を押している姿を想像する。第1行目の「女性」が昔を思い出させる歌をうたっているので、ピントーは、次の第3連、第5連の歌手も同種の歌をうたっていると考えた。これが誤解である。

3

第3連では若々しい女性が歌手として登場する。母親に対抗するような女性である。

朗朗たる声の女性は魅力的な、いきいきした歌をえらんだ。
それなのに、たしかに私の中にある心は
昔の日曜日の晩にもどるに違いない、家の外で闇がさまよう時、
母の指が滑るのを見ながらうたう私たちのあたたかい唇の上に
賛美歌が輝いた時に、

この「魅力的な、いきいきした歌」は昔を思い出させるのではなくて男性の心をとらえる種類の歌である。「魅力的な、いきいきした」という形容詞からも、それがわかる。ピントーは、この女性が「私」に昔を思い出させると解釈しているが、それは誤解である。その誤解の理由のひとつは、「それなのに(And)」という接続詞を「だから」(Therefore)と解釈しているからである。この“And”は「だから」ではなくて「それなのに」という意味になる、「対照」の用法である。⁴この女性は「黒いピアノ」の伴奏でうたう歌手であり、「小さな茶色のピアノ」を弾く母と対照される女性である。広いコンテキストから言えば、この女性は『息子と恋人』でエディプスコンプレックスに苦しむ青

年ポールが母の愛の束縛から逃れようとして求める女性である。したがって「私」から見れば「母」の代わりに選ぶべき「女性」である。この女性は第5連の女性歌手と同種の人物と考えられる。

ところが、第2行目から「追憶」にもどってしまう。「私の中にある心」は昔にもどってしまい、日曜日に母のピアノ伴奏で賛美歌をうたった頃を思い出す。これはピントーのいう「追憶の想い」である。

4

第4連は引用は省略するが、過去の回想である。多分、9歳年上の姉エミリー(Emily)がモデルになっているだろう。ただ母の追憶ではなくて、姉の愛の歌である点では「朗朗たる声の女性」と結びつく。

第5連はこれまで続いていた「私の心」の占有をめぐる母親と女性歌手の争いの結論を示している。

ひとりの女性が荒々しいハンガリアの曲を私にうたっている。

両腕と胸を魂のすべてをむき出しにして。

黒い大きなピアノは母のピアノが出したことがないような

大きな音を出している。母の曲はこの音楽の破壊的な魅力に飲み込まれる。

第3連の「朗朗たる声の女性」はここでは「荒々しいハンガリアの曲」をうたっている。「ハンガリア」とは何か。『ヨーロッパ史の諸運動』のなかで、ロレンスは十字軍時代のことではあるが、ハンガリアは「キリスト教化されてまもないので、異教の血が残っていた」(MEH 121)と述べている。上記の著書の基になったギボンの『ローマ帝国衰亡史』とは違って、ロレンスは「フン族」(The Huns)を独立した1章にして強調している。フン族は「ハンガリア」つまり「フン族の国」をつくりキリスト教ローマと対抗していたことを強調する。さらに詩集『三色すみれ』にはフン族の王をタイトルにした「アッティラ」("Attila")という詩がある。これは、「小さな馬に乗ったアッティラを / 平和の人と呼ぼう / なぜなら昔のローマ人の嘘を / あのラヴェンナのこ

そこそした宮殿の嘘、裏切り、信頼できぬ、洗練された卑劣さを粉碎するのを助けたから……」と書き、キリスト教徒やローマ人の偽善と対比させてフン族の王は乱暴だが率直であると評価している。ロレンスは「ハンガリア」を異教的であるが、肯定すべき面がある国と考えている。

「荒々しい」の原語は“wild”だが、これは“Of feelings or their expression: Highly excited or agitated; passionately vehement or impetuous” (OED) 「熱情的な」の意味で、定稿の第3連の「熱情的に」(appassionato) と同じ意味と考える。ここでは愛情の強い表現であり、過去の追憶ではない。

第2行ではその女性が両腕と胸をむき出しにしているとある。強い表現である。賛美歌を演奏する敬虔な母とは対照的である。伴奏するグランドピアノは大きくなり響く。母のピアノはそんな大きな音を出したことは一度もなかった。最後に母の曲はその音楽に負けてしまう。

ピントーは初稿は「追憶の想いが強すぎる」というが、この最終連には「追憶」はない。母の曲は黒いピアノの音楽に飲み込まれてしまったのだ。母親の「追憶」ではなくて、「女性」の愛情の勝利がうたわれている。

以上見たように、この詩には母親とある女性が交互に現れており、「私の心」を捉えようと相争っている。すなわち、「追憶」ではなくて、「私の心」をとらえようとする、ひとつの「ドラマ」を構成している。ピントーが「追憶の想いが強い」とするのは、第3連と第5連の歌手を昔を思い出させる歌をうたっていると誤解しているからである。

5

では次に「追憶」がすくないとピントーがいう定稿をみてみよう（引用はケンブリッジ版『全詩集』第1巻108頁からである）。

夕間の中で女が私に向かって静かにうたっている。

それを聞いて来し方を振りかえると、ふるえる弦の響きに包まれて

ピアノの下に子供が座っているのが見える、

頬笑みながらうたう母の小さな落ち着いた足を押しながら。

上は初稿の第2連とほぼ同じである。ピアノを弾いた母親のことを追想しているのは明らかである。第2連も同じく追想である。

そうなるまいと思いつつも、隙のないほどまい歌に
思わず昔に引きもどされて、家でのかつての日曜日の夕べにもどり、外
は冬景色の時、
気持ちのよい客間でピアノの響きに合わせて
賛美歌をうたったことを思い出し、私の心は泣く。

初稿の第3連第1行の「朗朗たる声の女性は魅力的な、いきいきした歌をえらんだ」は消えた。昔にもどり、母のピアノに合わせて賛美歌をうたったという追憶だけになった。

最終連の第3連はどうだろうか。

だから、今、「熱情的に」弾く大きな黒のピアノに合わせて
歌手は大きな声をあげても無駄だ。
私の心は子供時代の魔力にとりつかれた。大人らしさは
追憶の波間に投げ込まれてしまい、昔を思い子供のように泣く。

この連は、現在うたう歌手を描くのため「追憶」ではない。初稿の第5連で「荒々しいハンガリアの曲」をうたった歌手は否定される。「大きな声をあげても無駄だ」となる。「私」の心は子供時代の魔力にとりつかれている。「昔を思い子供のように泣く」で終わる。ピントーの意見は間違っている。「追憶の想いが強い」のはこの定稿の方である。

6

「追憶」の詩を書いてはならないということはない。それなりの理由があったろう。母は8年前に死去しフリーダとの結婚によって母の愛の束縛からロレンスは自由になったといえる。1907年頃あった母親を取るか女性を取るかというテーマはすでに意味がなくなって、母親への追憶のみが強くなったの

であろう。これが改稿の大きな要因だと思う。

この時期、母親以外でも追憶の気持ちをロレンスが持ったのではないか。1919年、『ポエトリ』(Poetry)に発表した、文字通り「追憶」(“Nostalgia”)という作品もある。1918年春の執筆である。⁵この追憶は兵士が帰宅して死んだ父を思うものである。この家は自分の生まれた家だが、父が死去し、すでに人手に渡っている。中に入ることはできず、家屋のそばに立ち、壁の石にキスし、塀の苔にキスするという内容である。1918年4月、ダービシャに転居する話が始まり追憶の気持ちが強くなったのであろう。「ピアノ」の定稿が収録された『新詩集』の原稿が用意されたのはダービシャ滞在中であった。

初稿は「ドラマ」性を持つことを指摘したが、それと比べれば定稿は「抒情詩」である。しかし「抒情詩」だから劣るということはない。定稿は、「歌」や「曲」を媒介にした「追憶」の巧みな表現である。

7

定稿は相応に評価されているが、他方、初稿はハイネマン版『全詩集』では「付録」扱いになっており、批評でも軽視されている感がある。これは遺憾であり、定稿がある現在でも初稿は評価する必要がある。そのひとつの理由として若い女性が登場し、語り手の愛を得ようと母親と争い、ひとつの「ドラマ」をつくっているからである。すでに述べたように改稿をめぐる第1点は「追憶の想いが強すぎる」のは初稿ではなくて定稿であるが、第2点として、この若い女性が存在するが故に、定稿があっても初稿を無視できないことを主張したい(改稿をめぐるこの「女性」は「歌手」と限定して考えてはならない。女性一般が、「ピアノ」というテーマ上、「歌手」として表現されたにすぎない)。

この「女性」を評価している意見を2つあげる。セイガー (Keith Sagar) は次のように言う。

2つのピアノと二人の女性（一人は小柄で静かで母親らしく、微笑する。他は朗朗たる声で、胸をむき出し、荒々しく、大きな声を出す）が語り手の注意を引こうと争っている。現にいる女性は、家庭でうたう讚美歌

と姉が一人だと思ってうたう内気な愛の歌と対照的に、魅力的な、いきいきした歌をえらんだ。(103)

「二人の女性」が「語り手の注意を引こうと争っている」という見方に筆者は賛同する。これが「ドラマ」を作っている。この点をピントーは見落としている。

井上義夫は次のように言う。

にもかかわらず、二人〔ロレンスとフリーダ〕の邂逅時期が問題になるのは、大学時代の創作ノートに記された九番目の詩「ピアノ」がロレンスの文学のなかに占める特殊な重要性による。すなわちこの詩の作者は「私に、荒々しいハンガリアの歌」を歌う女性とその「堂々たるつややかな黒い」ピアノを、「小さい茶色い」母親のピアノと、彼女が昔「私」に歌い聞かせた「讃美歌」或は妹の愛の歌に比べる。追憶の世界に属する後者は、古いピアノが大きなピアノに圧倒されるように「両腕と胸、その魂の全てがむき出しになった」女性の「^{ウィニング}魅惑的な生ける歌に」押しのけられる、と書く。(288-89)

井上の「特殊な重要性」という指摘に賛成する。井上の関心は主にこの女性のモデルは誰であるかという問題である。井上も初稿の第3連と第5連の女性が同じように母親と対照的な存在だと想定しているのは明らかである。フリーダがモデルになっている作品中の人物を探して、この女性たちに注目したのは首肯できる。ロレンスがフリーダに会うのは4年後であるが、

筆者は現実のモデルの問題よりも、初稿の「女性」はその後のロレンスの小説における女性像の原型を示すものと考えたい。この女性像は、交際していたジェシー・チェンバーズとは異なるタイプだ。現実には存在しなかったが、あたかも夢のなかの女性のように存在した。たとえば、その女性渴望は『白孔雀』のなかのカルメンへの憧憬に現われていると思う。「派手で屈託のない南国の生活は二人〔シジルとジョージ〕をびっくりさせた。カルメンの大胆で自由奔放な生きざまに、二人は自由とはあれかと眼を丸くした。そして呆

然として舞台を見詰めた」(248)。

この女性には「私」をめぐって母親と争うだけではなくて、小説の女性像の原型になっているのではないだろうか。「両腕と胸を魂の全てをむき出しにして」(And her arms, and her bosom, and the whole of her soul is bare,)と述べられていることは重要だ。ロレンスは裸体の女性にひかれていたと友人のネヴィルは語る。10代の終わり頃、ロレンスがスケッチで女性の裸体を描いた。その意図を聞くと「生命と若さと希望にあふれ、がむしゃらで生きていて呼吸する女性だ」(Neville 81)とロレンスは答えた。こういう気持ちが「胸を……むき出しに」した女性の表現につながる。『虹』のなかで妊娠した後、「衣服を脱いで踊り」(170)夫をびっくりさせるアナヤ、水浴の場面で裸になって、やはり裸の「担任教師にじっと抱かれている」(316)アーシュラの原型であると考えたい。また、この女性像は最後には『チャタレー卿夫人の恋人』第15章で全裸になって雨の中に駆け出し、リトミックダンスを踊るコニー・チャタレーにつながると考えられる。

8

ではなぜ『新詩集』に収録する時に「胸を……むき出しにして」が消されたか。筆者はその表現を削除せざるを得なかった特殊な事情があったと考える。これが改稿をめぐって注意すべき第3の点である。改稿は当時の出版状況を考慮に入れるべきだと主張したい。具体的に言えば、出版者が検閲して削除する状況があった。それを察知してロレンス自身が自己検閲してこの表現を削除したのではないか。原因は1915年11月の『虹』の発売禁止である。1857年のわいせつ文書取締まり法(わいせつ性の判断基準を大人ではなくて青少年にしている)に基づきメシュイン社は微罪裁判所の出頭命令を受けて出頭して、当時の出版者の慣習に従って裁判で争わず、わいせつ文書であることを認めて『虹』を破棄し販売をやめた。

どの箇所が問題なのか不明であるが、このあとアメリカの出版者ヒューブシュ(Benjamin Huebsch)が削除版を出した。これが市販されたから、これから削除された部分がわいせつ箇所ということが想像できる。ヒューブシュは5箇所を削除した。この箇所を見るとレズビアン、性交あるいはそれをほ

のめかす描写、全裸の描写がある。ケンブリッジ版で該当箇所を示せば、219 頁 23-26 行、298 頁 40 行、316 頁 1-4 行、421 頁 21-40 行、442 頁 13-32 行である。

これより先、「ピアノ」の初稿を清書した頃書き進めていた『白孔雀』が 1910 年ハイネマン社から出版されるとき、ロレンスは原稿の訂正を命令された。アナブルをモデルにして前妻のクリスベルが絵を描く場面で出版社による修正要求があった。「彼女は私をモデルにギリシャの彫像を描いた」(“she drew Greek statues of me”)を「彼女は私を美的な角度から見ることを選んだ」(“she chose to view me in an aesthetic light”) (Moore 104)に修正させられた。モデルが裸体であることがばかされている。この経験でロレンスは出版者の検閲の実体を知ったろう。

『虹』の発売禁止後、出版業界では、ロレンスは要注意人物になった。例えば、『恋する女たち』は 1916 年の末までにほぼ完成していたが出版者がつかなかった。1917 年 3 月 3 日の知人宛書簡には次のようにある。「私は小説を書きましたが、それを印刷してくれる人が誰もいません。『虹』事件があったからです。出版者を一回りしました。皆から断われました」(3L 100)。

9

詩集を出版する場合もロレンスは細心の注意を払わざるを得なかった。そうしないと出版してもらえないのである。

次はロレンスの低姿勢が表れている『新詩集』の出版者をさがす時の書簡である。1918 年 6 月 18 日の出版代理人ピンカー (J. B. Pinker) に対して次のように書く。「不愉快を感じさせる (offend) ものはありません。もしあれば知らせてください。削除した方がよい所があれば、知らせてください」(3L 255)。「不愉快を感じさせるもの」とは発売禁止になる危険がある箇所ということである。それは削除してくれという意味である。ロレンスが細心の注意を払っていることが分かる。

このあと、セッカー (Secker) 社が出版を引き受けた。校正紙を送ってきたが、それには「晩年に」(“Late in Life”)の削除が指示されていた。ロレンスは不満であったが、削除に同意した。「セッカーは詩は削除してもよい。だが彼の文学批評は聞きたくない」(3L 278)と不満を述べる。しかし一切抵抗

はしない。

『虹』が発売禁止となり『恋する女たち』の出版を引き受ける者がなく、経済的に追い詰められていたロレンスがしなければならないことは、『新詩集』の出版者を不愉快にするおそれのある原稿を改稿することである。

10

このような状況のなかで、「ピアノ」の初稿を見ると第5連の第2行の「胸を……むき出しにして」は問題になる。すでに見たように裸体を示唆する表現は当時あっては御法度であった。危ないと思えば削除するのが賢明である。1918年4月18日のシンシア・アスキス (Cynthia Asquith) あて書簡で「非の打ちどころがない詩 (Impeccable Poems) からなる詩集をさらにもう1冊出しました」(3L 234)と書く。これはアスキスに献呈しようとしている『入江』(Bay)のことを指している。「もう1冊」とあるから『入江』の前に用意した『新詩集』も「非の打ちどころがない詩」からなっているはずである。“Impeccable Poems”と大文字ではじめていることかも想像できるように、「非の打ちどころがない詩」を皮肉っている。しかし問題がすこしでもあると出版者は出してくれない。この書簡で“impeccable”と対照して“too doubtful little pills”(うさんくさい小粒の丸薬)が使われている。初稿の「ピアノ」は「うさんくさい」ものにはいる。

「胸を……むき出しに」した女性を削除したことは、裸体のアーシュラを削除することと同じ意味を持っている。初稿の改稿は「追憶」を強調する目的であるということは否定できないが、それと同時に出版者の検閲をパスしようとして修正、削除した語句があったと思う。1959年にわいせつ文書取り締まり新法ができて『チャタレー卿夫人の恋人』の無削除版を出版したペンギン社が無罪になった現在の時点からはナンセンスと思われるが、『虹』が発売禁止となり、『恋する女たち』の出版者が見つからなかった当時の状況を考えると、こういう見方は不自然ではない。

11

以上、本論の結論をまとめてみれば、次の3点である。(1) ピントーの主張とは違って「追憶の想いが強い」のは初稿ではなくて定稿である。(2) 初稿は母と「女性」が対抗するドラマであり「女性」は小説の女性像の原型と考えられる。その意味で、初稿はそれなりの価値を有する。(3) 「胸を……むき出しに」した女性は当時にとっては、発売禁止の危険につながる表現であり、削除は出版を拒否されないためのロレンスの自己検閲であると考えられる。

本論文は2017年7月22日、日本ロレンス協会全国大会で口頭発表したものを加筆修正した論文である。

注

- 1 セイガーは「定冠詞のつかない「ピアノ」はもはや楽器を指す必要はない」(105)として定稿は、ピアノそのものを指す初稿「ピアノ」とは異なると説く。しかし初稿にも“Softly”はあるから2つの差は明確ではない。ギルバート(Sandra Gilbert)は「「ピアノ」もまた、一見、小説家の経歴の副産物のように見える」(47)として初稿と『白孔雀』とのつながりに着目する。しかし初稿と定稿の関係は明確ではない。マーシャル(Tom Marshall)はピントーにならって「定稿は抑制された想像力の初期の例である」(56)とする。
- 2 ケンブリッジ版『全詩集』第2巻892頁。
- 3 本文のピアノの描写は『浜松楽器博物館所蔵楽器図録2015年』のイギリスのブロードウッド社製のスクエアピアノそっくりである(写真参照)。正面に小さな窓が2つあり、そこに一種のカーテン(写真では灰色の部分)が下がっている。ピアノの本体の色彩も「茶色」である。スクエアピアノはテーブルの形だから「ピアノの下に座っている」を文字通りに解釈することができる。リチャーズの合評ではケンブリッジの学生のひとりが“under the piano”ではなくて“under the keyboard”ではないかと書いている。セイガーも「鍵盤の下」(103)と解釈して子供を縮こまった「胎児」のイメージと取る。しかし、スクエアピアノだと前述の疑問や解釈は不要になるか、誤りになる。なお、



スクエアピアノ ブロードウッド社（ロンドン）
1795～1800年（浜松市楽器博物館所蔵）

この詩だけではなくて、『白孔雀』で「折り目を指で突いて伸ばすと、胸の部分の絹は青銅色でなかったことがわかる」(6) という説明も、この写真を見ることでよく理解できる。写真で灰色に見える、キーボードの上の2枚の小型のカーテンは元は緑色であったということである。

- 4 “And” について *OED* は “adversative” の意味を記載し、*Webster* (1971) も “contrary action” を示す用法を記載している。ロレンスの詩での例をあげれば、次がある。 “He is worthless, but sultry and vast/And I can’t deplore him.” (“Virgin Youth”, 強調引用者)
- 5 ケンブリッジ版『全詩集』第2巻909頁参照。

引用文献

- Gilbert, Sandra M. *Acts of Attention: The Poems of D. H. Lawrence*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1972.
- Lawrence, D. H. *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, Vols. I and II. Ed. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts. London: Heinemann, 1964.

- . *The White Peacock*. Ed. Andrew Robertson. Cambridge: Cambridge UP, 1983.
- . *Movements in European History*. Ed. Philip Crumpton. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- . *The Rainbow*. Ed. Mark Kinkead-Weekes. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- . *The Poems*, Vols. I and II. Ed. Christopher Pollnitz. Cambridge: Cambridge UP, 2013.
- Marshall, Tom. *The Psychic Mariner: A Reading of the Poems of D. H. Lawrence*. London: Heinemann, 1970.
- Moore, Harry T. *The Intelligent Heart: The Story of D. H. Lawrence*. London: Heinemann, 1955.
- Neville, G. H. *A Memoir of D. H. Lawrence*. Cambridge: Cambridge UP, 1981.
- Sagar, Keith. *D. H. Lawrence: Poet*. Penrith: Humanities-Ebooks LLP, 2007.
- 井上義夫『ロレンス遊歴』みすず書房, 2013 年.

The Revision of D. H. Lawrence's Poem, "The Piano"

Saburo Kuramochi

This essay aims to clarify how "The Piano," the first version of "Piano," a rhyming poem, was revised to develop into its definitive version. The poem was written around the year 1907 in Lawrence's notebook, which he primarily used for his university lectures around 1907. The poem initially consisted of five stanzas. It was then rewritten to be included in a book of poems in 1918. Two of the five stanzas were omitted, some words and phrases were changed, and it was published under the name "Piano" in *The New Poems*. Thus, it attained its definitive version.

On comparing the different aspects of the two versions and issues within them, the author concludes the essay by pointing out three things. First: The definitive version is more nostalgic than the first version, although Vivian de Sola Pinto argued to the contrary. Second: Because the first version has its own merit, it still deserves reading and is worth referring to even after the definitive version was published. It is a dramatic poem in which the mother and the woman singer compete with each other for the narrator's attention. This woman singer could possibly be an important precursor of the heroines of Lawrence's novels. Third: Lawrence deletes the description of the woman as "bare bosomed," because Lawrence fears the poem would be rejected by the publisher of *The New Poems*. Censorship was so strict in those days as was seen from the fact that *The Rainbow* was banned because it contained sexual scenes.

特集 1

D・H・ロレンスと労働（者階級）

『虹』における階級と歴史
—— モビリティと世代／生成の美学

近藤 康裕

1. 序

D・H・ロレンスの代表的長篇小説『虹』（*The Rainbow*, 1915）を論じて「社会史家」（151）としての面目躍如と称賛したF・R・リーヴィス（F. R. Leavis）の批評が、ロレンスを英文学の所謂キャノンに定着させたことを考えれば、ブラングウィン家三代の物語をイングランドはミッドランズ地方の工業化にともなう社会の変容の文脈において語ったこの小説が、精緻な『虹』論を複数書いているマーク・キンキード＝ウィークス（Mark Kinkead-Weekes）の「『虹』は歴史小説だ」（121）との主張に代表されるように、歴史を創作に取り込んで成功した作品であるとの評価は当を得ているだろう。他方、グレアム・ホルダネス（Graham Holderness）は、『虹』の「展開してゆく世代の構造」はリアリズム的内容も歴史的内容も持ち合わせていない」（186）として、ロレンスが歴史を描いて他に譲らぬとするリーヴィスの見方とは完全に異なる評価を下した。¹ こうした正反対の評価がなされるのは、近代化にともなう歴史的現実をこの小説が正当に描き得ているかどうかという点で議論が分かれているからである。この点に関して本稿は、ブラングウィン家の人物たちが経験する社会的、地理的な移動（モビリティ）とロレンスの独特な形而上学の表象に着目しつつ、『虹』における階級と歴史という問題を再考する。

2. 『虹』における階級とモビリティ

『虹』が、例えばレイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) の高く評価する『恋しい息子たち』 (*Sons and Lovers*, 1913) が労働者階級を描いた作品であるという意味での労働者階級小説でないのは、² 労働者階級が物語の中心を占めていないからである。マルクス主義批評家アーノルド・ケトル (Arnold Kettle) は、『虹』が「現実にしかりと根差した」小説であり、「その最良のところでは、20世紀のイングランドにおける個人の諸関係の性質を比類なき力と洞察で明るみに出している。ロレンスのブルジョア社会についてのヴィジョンは事実非常に強力で、その常軌を逸した恐怖はあまりに破壊的だから、法と秩序の擁護者たちを憤慨させずにはすまなかった」(124) と述べた。発禁処分も含め、『虹』に対するブルジョア社会からの風当たりが強かったことは、かえってこの小説がブルジョア社会の「現実」を過たず抉り出していたことを証している。

これに対してホルダネスは、「ロレンスの「社会」概念は機械的で謎めいた死せる全体性」なので「居場所を奪われた個々の生が、完全に機械化され非人間化された否定的な全体性のまわりを周っている」かのようであり、『虹』の「社会的悲劇の言葉は避けがたく形而上学の言葉に転化する」と述べ、「ロレンスは「生の道徳性そのもの」に形と表現を与えようと奮闘しつつ、同じ社会的な矛盾を形而上学的形式に投影することによってしかこれをなし得えない」のだと論じた (163)。「生の道徳性そのもの」とは、『虹』の完成の頃とほぼ同時期に書かれた『トマス・ハーディ研究』 (*Study of Thomas Hardy*, 1914) で、人間のちっぽけな意識を超える生命そのもののモラルを表した言葉だが (29)、ホルダネスは、ロレンスが道徳性を表現しようとして形而上学的な形式に矛盾を投影した事態を「形而上学的袋小路」(165)と呼んで、『虹』執筆期のロレンスがこの「袋小路」に陥ったと指摘する。矛盾を形而上学において解消するとき「袋小路」に『虹』が行き詰っているのかどうか、以下での本稿の検討課題である。

ロレンスは労働者階級の家に生れたが、高等教育を受けて作家デビューし、ミドルクラスやそれ以上の階級の人びととの交際を経て着々とキャリアを積み上げていった。この階級的モビリティにあわせて、ミッドランズからロン

ドンへ、イギリスから大陸へという地理的モビリティも経験する。こうしたモビリティの軌跡に沿って小説に描かれる対象は変化し、ブルジョア社会を描く割合が増えていった。³ブルジョア社会を描くにあたり、ロレンスは労働者階級出身であるがゆえにそこから距離を取って観察することができたし、モビリティによって離れた自分の出身階級に批判的な眼を向けることも可能だった。このことは、しかし、いずれかに自己同一化して安住することができなかったということであり、アイデンティティにおけるこの不安定さは矛盾となってテキストに現れた。

テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) は、ロレンスがこの矛盾を「解決する」ために「現実を「男性」原理と「女性」原理に二元化し、それらを弁証法的緊張において捉えようとする形而上学に訴えた」(159)と指摘しつつ、「支配的なイデオロギーに対するロレンス独特の関係のとり方は何よりもプロレタリア的要素とプチブル的要素との矛盾した結合にあった」と述べ、その結合はロレンスの「形而上学に表されることになるオルタナティブなイデオロギー的言説の間での激しい衝突を特徴とする」(160)と論じている。『恋しい息子たち』のリアリズムと較べれば明らかに『虹』で度合いを増したロレンスの抽象的観念がホルダネスの言う「形而上学的袋小路」に陥っているように見えたとしても、重要なことはこれを「支配的なイデオロギーに対するロレンス独特の関係のとり方」において見ることであり、そのとき「オルタナティブなイデオロギー的言説の間での激しい衝突」にロレンスの「歴史的重要性」(158)を読むことが可能になる。ここで「オルタナティブ」と「衝突」という語が示すのは、「プロレタリア的要素」から「プチブル的要素」へという価値の一方方向的な移行のみならず、その逆の移行にも価値が置かれるということだ。労働者階級が作品の中心を占めていた初期から『虹』以降のブルジョア的要素が支配的となる時期を経て、晩年の『チャタレー夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*, 1928)では労働者階級への回帰が見られるように、⁴『虹』の結びにもブルジョアの視点から労働者たちに希望が見出されるという二要素間の関係の逆転が書き込まれている。重要なのは、ロレンスのキャリアの表面上は一方方向的に見えるモビリティとは逆行するような階級観を作品が表していることであり、この矛盾に作家とその文学の「歴史的重要性」がある

ということである。

3. 不可能な完成とリアリズム

『虹』における形而上学は、タイトルと関係した「虹」「弧」や「アーチ」のモチーフとともに現れることが多い。以下のリンカン大聖堂の場面はその典型例である。

Containing birth and death, potential with all the noise and transitation of life, the cathedral remained hushed, a great, involved seed whereof the flower would be radiant life inconceivable, but whose beginning and whose end were the circle of silence. Spanned round with the rainbow, the jewelled gloom folded music upon silence, light upon darkness, fecundity upon death, as a seed folds leaf upon leaf and silence upon the root and the flower, hushing up the secret of all between its parts, the death out of which it fell, the life into which it has dropped, the immortality it involves, and the death it will embrace again. (187)

ここでは生ないし豊穡と死、喧騒と静寂、光りと闇のような二項対立をレトリックの核としながら、大聖堂は生と死を包含する種子であり、その始まりと終わりが円環をなすと書かれている。種子に花や根が畳み込まれているごとく、大聖堂の静寂には音楽が、闇には光りが、死には豊穡が織り込まれ、種子がそこから落下する死と落下することでつながる命とが折り重なる。この場面の背景には、教会建築の美に没頭するウィルと左程乗り気ではないアナとの対立が描かれているから、男女という対立もこの二元論的形而上学の重要な一部をなす。対立するものが畳重し循環する場としての大聖堂にステンドグラスから差し込むのであろう光りが宝石のようなきらめきで虹を作っているという描写は、小説全体の解釈の鍵を蔵するに相応しい精緻なイメージの組み合わせで構成されている。

種子と花の喩えで生と死の対立が表されていることから明らかなように、対立は命を生む運動であり、生から死へという一方向の動きではなく、循環

するものとして書かれている。他の二元論的要素についても同様に、男から女へ、女から男へ、労働者階級から中流階級へ、あるいは逆にブルジョアからプロレタリアートへという、一方向的ではない推移が読み取られる。小説の冒頭で、女性は外の世界を求めるのに対し男性は土地に根を下ろした存在であるとブラングウィン家の男女の違いが述べられるが、実際の物語は、外国人の愛人のいる女性と青年時代のトムが行きずりの関係を持ち、その外国人男性に魅せられたトムが外国的で異質なものを希求するようになるなか、外国人であるリディアと出会って動き出した。第二世代でトム自身の子ではなくリディアの連れ子アナを中心に据えて土着のブラングウィン家直系ではない系譜に道筋を付け、第三世代のアーシュラにはアントン・スクレベンスキーを宛がうことで、小説冒頭に書かれた外なるものを求める女性の系譜へと循環させる。しかし、アーシュラは外へと向かう帝国主義に同調せずスクレベンスキーとの婚約を破談にし、学位取得も諦めてミッドランズの家引きこもった挙句に虹を見るという結末へ至るのだが、一方向的な動きをとらない物語の意義とはどういうものなのだろうか。

教会建築の美に没頭しているように見えるウィルがゴシック建築を好むのは、その様式が「先の尖ったアーチで人間の頓挫した欲望を主張しており、円形アーチの淀みない絶対的な美を逃れているから」(220)だと説明されていることは注目に値する。リンカン大聖堂の描写はきわめて観念的な形而上学の表現とも思えるが、大聖堂のゴシック様式にウィルが惹かれるのは、その「アーチ」が絶対性を免れているからなのである。虹の形象に連なる「アーチ」の語を繰り返しつつその完成を留保することは、形而上学の図式的な完成が不可能であることを示す。アン・ファーニハウ (Anne Fernihough) がロレンスはゴシック式大聖堂の細部に「建築の全体性という「一元論」の無化」(Introduction, xxx)を見ていたと指摘するとおり、作中「大聖堂が絶対でないこと」をガーゴイルや小鬼は「実によく知っていた」(189)と述べられ、アナがそれらに関心を寄せることで美的なものへのウィルの没頭に歯止めをかけるという対立構図が示される。さまざまな二項対立が書き連ねられるところに虹の形象が挿し挟まれ、虹という小説の中心的シンボルの完成と大聖堂の絶対性とが示唆されているように読めるこの章は、全体性を切り崩しつ

つ、絶対や完成の不可能を書き込んでいるのである。

「広がりゆく円環」(“The Widening Circle”)と題されたふたつ目の章の、アーシュラが小学校の同僚マギー・スコフィールドの兄アントニーの求婚を断る場面で、アントニーが自己に充足して生きている人物であるのに対し、アーシュラは「旅する人間、地球の表面をゆく旅行者だった。[……] 彼女には自分が円環の周りを旅しているのだということがわかっていて、この円環の完成には弧の一部を残すのみだった」(387)と書かれているのは、モビリティの観点から重要である。ここで完成を待つ「円環」とは、小学校教員としての最終学期を勤め上げ、大学に進学するというモビリティを意味するが、もし円環が完成すれば始めと終りがつながってしまうから、上昇のモビリティにならなくなる。社会進出を目指す女性としてアーシュラが小説で帯びる役割は必然的に、モビリティを無に帰するような円環を完成には導かない。残された「弧」とは小学校の最終学期のことだが、この「弧」を何とか描き切って進学したアーシュラが大学に「幻滅」を覚え、「次の移動もまた同じということになるのだろうか？ 輝ける門戸がいつも目の前にあり、近づいて行くとその門戸はもうひとつの醜く、汚く、せわしない、死せる庭への入口なのだった」(404)と書かれるのも、円環の完成に至ってしまったのはモビリティが意味をなさなくなるテキストの要請なのである。これは、完成されることのない円環や不可能な全体性を表すものとして、「弧」のような虹に関連する形象がモビリティの文脈で書き込まれた例である。

形而上学的な抽象性が目立つ『虹』のテキストだが、描写の手法はリアリズムを基本としている。リアリズムとモビリティの関係についてジョゼフィーヌ・マクドナ (Josephine McDonagh) は、「小説の批評家は登場人物のモビリティがリアリズムの中心的構成要素だと認識してきたが、通例これは社会的ないし経済的なモビリティの隠喩、あるいは道徳的成長の隠喩だと理解される」(62)と言う。アーシュラが小学校での仕事の最終学期を迎えた頃、父ウィルはノッティンガム市の美術工芸インストラクターのポストを得て「社会的にひとかどの人物」(388)となり、家族は市街地により近い郊外へと引っ越すことになる。アーシュラが教師としてキャリアの第一歩を踏み出し、進学によって更にキャリアを前へと進めようとする時期の転居は、ブラングウィ

ン家が「ベルドーヴァーのエリートの一員」となって「文化を代表する」(391) になることであり、まさに彼らにとっての「社会的ないし経済的なモビリティの隠喩」である。しかし、地理的移動が単なる「隠喩」ととどまらないのは、一家のベルドーヴァーへの移動が「世界へと飛び出していくことは、外の世界へ入っていくこと」(390) だと説明されるように、実際にアーシュラが経験し、反応するのは、逃れようもなく続く現実から現実への移動に他ならないからである。小説の全体を考えても、トムとリディアの住まいであったマーシュ・ファームからアナとウィルが暮らしたコテッジへ、そしてベルドーヴァーの新居へと、世代の変わり目に対応するように転居が書き込まれているし、第一世代のカップルの物語を始動させたりディアのポーランドからの移住やアントンの出征、植民地行きなどもすべて、物語の進行の土台をなす現実としての移動である。それゆえ、地理的なモビリティを他のモビリティと切り分けて、より重要なモビリティの比喩とのみ解することはリアリズムの本義に悖ることになる。

マクドナは、ロレンスにおいて「人と場所との関係は、追放を疎外と帰属のみならず魅惑にも結び付け、これらはともに織り込まれて表現の均一ではない生地をなしている」と述べ、モビリティがもたらす「効果は移動する者の身体に現れる一連の症状として、腹のもっと奥底からの身体的〔visceral〕な表現が与えられ、それは風景に投影される」(65) と指摘している。マクドナの議論は特に植民地への移動についてのものだが、社会階層のモビリティに付随した国内における地理的移動にも妥当する。モビリティは、自発的なものであれ外的要因によるものであれ、それまで「帰属」していた場所からの「追放」を少なからず含意するが、その要因には「疎外」のみならず「魅惑」もある。こうした矛盾する感覚がモビリティを経験する人物を引き裂き、「腹のもっと奥底からの身体的」反応をもたらすのである。アーシュラは新居のある「ウィリー・グリーンに住みたかった。〔……〕とてもすばらしく、ロマンチックだった」(390) と書かれた直後に、「アーシュラはとても悲しかった。名誉ある地位に到達したのではなく、汚らしく狭い町の赤レンガづくりの新興の郊外へ出たに過ぎないのだ」(391) というような記述が現れるのも、矛盾した反応に駆動されると同時に矛盾した反応を招来するモビリティのリア

ルな表現であり、そうした反応の「投影」なのである。同様の最も典型的な反応は、小説の最後でアーシュラが窓の外の人びとを眺める場面にも見出される。『虹』のリアリズムは、風景に投影された主人公の「身体的」な反応を表す言葉で、モビリティの痕跡をテキストに刻んでいるのである。

4. モビリティへの身体的反応と inert(ia)

アーシュラのこうした「身体的〔visceral〕」な反応は、モビリティの可能性の極点を描いた「恍惚の苦しみ」(“Bitterness of Ecstasy”)の章の終わりで、次の最終章における劇的な体験の布石となるように描き出される。アントンのインド行きと結婚の日は決まったものの、学位試験に失敗して将来の見通しに確信が持てないアーシュラは、月光のもとアントンと浜辺へ出かけて衝動的な性の恍惚を貪るが、双方にとってそれは「苦しみ」以外の何物でもなかった。

Gradually, she lifted her dead body from the sands, and rose at last. There was now no moon for her, no sea. All had passed away. She trailed her dead body to the house, to her room, where she lay down, *inert*.

Morning brought her a new access of superficial life. But all within her was cold, dead, *inert*. (445, emphases added)

衝動的な快楽の後「死んだ〔dead〕」ようになり、月も海も感じられなくなって部屋に戻ったアーシュラの身体的反応を表す“inert”という語に着目したが、アンドルー・カレイジアン(Andrew Kalaidjian)である。⁵ カレイジアンは『虹』が「静止の状態とそれに続く再生の瞬間を希求することでポジティブなつながりを求める闘いに再び赴く世代／生成〔generations〕の連続体として」書かれたと述べ、ロレンスの「窮極の目標は世代／生成それ自体の慣性的エネルギー〔the inertial energy of generation itself〕をつかむこと」(48)であったと論じている。一読すると“inert”という語はネガティブな状態を、すなわち、モビリティの途上で挫折し、結婚の不可能を予感するアーシュラ

の身体が完全に脱力した不活性状態にあることを表しているように見えるが、カレイジアンはこの語が「生成」と「世代」の継続につながる状態を示すと主張する。⁶ ロレンスの形而上学の根本をなす生と死あるいは男と女の二元論を踏まえれば、対立的に捉えられるこれら二項間の弁証法的な運動がもたらす“generation”（生成）を“generation”（世代）の物語へと具現化する力が“inert”な状態には秘められていることになる。カレイジアンも言及している次の『トマス・ハーディ研究』（*Study of Thomas Hardy*）の一節は重要である。

The very adherence to rhyme and regular rhythm is a concession to the Law, a concession to the body, to the being and requirements of the body. They are an admission of the living, *positive inertia* which is the other half of life, other than the pure will-to-motion. [. . .] It is the novelists and dramatists who have the hardest task in reconciling their metaphysic, their theory of being and knowing, with their living sense of being. (91, emphases added)

シェリーの詩について語るこの文章は、詩が鳥の動きを表すに際して押韻とリズムに依拠することは身体の要請であり、運動への純粹意志に対するものとしての「ポジティブ」な“inertia”の承認だと捉える。上の引用箇所の前でロレンスは、「運動への意志」と「不活性／慣性〔Inertia〕への意志」のふたつが「下げ潮と上げ潮から宇宙全体の安定した均衡に至るまでの生の全体をもたらす」と述べて、「この不活性／慣性への意志はネガティブではないし、もうひとつがポジティブだということもない。考えによってはむしろ運動がネガティブで、不活性／慣性あるいは静止した幾何学的概念がポジティブである。これは見方次第なのだ」(59)と書いていた。押韻やリズムは言語に特有の物質性とその使用に係る習慣を基礎とするが、そうした物質性と習慣ないし慣性すなわち“inertia”が詩とその運動を生成する。運動と不活性／慣性、ポジティブとネガティブというロレンスに典型的な二元論にもとづく抽象的な形而上学のように読める文章だが、言語の習慣は生きられた時間の集積によるものであり、恣意的で非歴史的な抽象化に抵抗するので、ロレンスは言

業による創作の物質性と歴史性あるいは現実性を裏書きするものとして、カレイジアンが言う「世代／生成それ自体の慣性的エネルギー」を“inertia”に見出した。ロレンスにとって「形而上学」を「存在の生きた感覚」と調和させることが作家の「使命」であったから、『虹』における“inert”な状態は作品の「形而上学」と登場人物たちの「存在の生きた感覚」とのまさに結節点として書かれたと考えられる。

カレイジアンは、全体性に回収されないロレンスの美学を論じたアン・ファーニハウによる「ロレンスの美学は物質的世界にしっかりと結び付いている」(Kalaidjian 47; Fernihough, *D. H. Lawrence: Aesthetic and Ideology* 189)との指摘を引いているが、ファーニハウは「自然の世界それ自体が美学の試金石として」ロレンスの作品に刻み込まれていると述べ、「この結果、ロレンスの視点からすれば、現実を美学化すること（つまり、自然の世界を芸術作品として見ることは、その逆の、美学を現実化するとか真・善・美といった観念を実行に移すとかいったやり方、また、こうした観念に合わせるために世界を捻じ曲げるというやり方に較べればはるかに破壊的でないように思われる」(189, 強調原文)と論じている。物質的世界に固く結び付いたロレンスの美学とは、押韻とリズムを「ポジティブ」な「慣性」とする詩論であり、自然に規定された言語の物質性と慣習をその試金石とする美学である。この意味で、アーシュラがモビリティと「恍惚の苦しみ」の果てに陥る“inert”な状態とは、彼女が直面した現実の、虹に連なるレトリックによる「美学化」を試し、判じる試金石である。これは、『トマス・ハーディ研究』でロレンスみずから書いたように、形而上学と現実とを融和させる契機でもある。

5. 虹の美学と歴史

虹の美学が完成へ向かおうとする「虹」と題された最終章で、この“inert”な状態はどのように美学と現実とを結び付けているのか。馬に襲われるというアーシュラの経験は、剥き出しの自然との対峙を通して彼女の「身体的」な反応を導き出す決定的な役割を果たしているが、その後に寝込んでしまったアーシュラは帰属の感覚を喪失する。

Repeatedly, in an ache of utter weariness she repeated: "I have no father nor mother nor lover, I have no allocated place in the world of things, I do not belong to Beldover nor to Nottingham nor to England nor to this world, they none of them exist, I am trammelled and entangled in them, but they are all unreal. I must break out of it, like a nut from its shell which is an unreality." (456)

ミッドランズの土地に根差してきたブランクウィン家のモビリティを描く物語が、その結末部で、軍人の妻としてアーシュラが植民地へ赴く道を断ち、再び土地へ回帰させるかと想像させながらも、このように主人公からアイデンティティの拠り所を奪うのには理由がある。ノッティンガムやイングランド、肉親に束縛されていると感じるものの、これらを実体が欠落したものとしてしか認識できない状態は、一見すると観念的なようだが、むしろ剥き出しの「身体的」な反応である。ミッドランズの農場から外へと向かったモビリティが単純にその土地や肉親のもとに回帰してしまえばただの循環であり、全体化の完成、円環の閉止となってしまうから、テキストは敢えて剥き出しの身体的反応としての“inert”な状態にアーシュラを置き、それ自体の美学の完成をいわば宙づりにした。アーシュラはしだいに体調を回復し、最後の虹の場面へと導かれる。

As she grew better, she sat to watch a new creation. As she sat at her window, she saw the people go by in the street below, colliers, women, children, walking each in the husk of an old fruition, but visible through the husk, the swelling and the heaving contour of the new germination. In the still, silenced forms of colliers she saw a sort of suspense, a waiting in pain for the new liberation: she saw the same in the false hard confidence of the women. The confidence of the women was brittle. It would break quickly to reveal the strength and patient effort of the new germination. (457-58)

アントンとの関係の破綻とモビリティの挫折から“inert”な状態に陥ったアーシュラの身体的反応がこの場面の道行く人びとに投影されていることは、ひとつ前の引用部で帰属の非現実性を打ち破らなければならないと思ったときに使われたイメージ——殻とその内部の実——が繰り返されていることからわかる。ここで注目すべきは、アーシュラがそれまでどちらかと言えば否定的に見ていた炭坑労働者や女性たちに新たな芽生えと解放を見出していることである。ブルジョア的な立場にいる主人公の眼で眺められた炭坑夫たちは、例えばウィギストンの炭坑に向かう人びとが「生きている人間であるとは見え、幽霊みたいだ」(320)と表現されていたように、工業化によって生気を抜かれた存在である。また、「偽りの硬直した自信」を持っている女性たちの中には、アーシュラが付き合い、初めは親密になるも疎遠になってゆかざるを得なかったウィニフレッド・インガー、マギー・スコフィールド、ドロシー・ラッセルらも含まれるだろう。⁷こうした人びとは「かつて結んだ実(“old fruition”)」の「殻」に包まれて「不活性／慣性」つまり“inert”な状態にあると言えるが、これは新たな「芽生え(“germination”)」の条件なのである。それまでのアーシュラの態度からすると、これらの人びとはアーシュラによって乗り越えられるかに思える。しかし、当のアーシュラがみずからのブルジョアとしてのアイデンティティを喪った“inert”な視座から見ると、それまで否定的に捉えていたものが解放と再生の可能性を孕んでいると感じられるのだから、ロレンスはアーシュラをいったんモビリティへの身体的反応としての“inert”な状態に追いやることでブルジョア社会における彼女の安定的アイデンティティを掘り崩し、彼女の反応の道行く人びとへの投影を通してオルタナティブなモビリティの可能性を捉えさせようとしたのだと考えられる。この投影は、女性たちの「自信」が「壊れやすい(“brittle”)」と形容されるのと同様、アーシュラがそれまで築き上げてきたキャリアとアイデンティティも「壊れやすい」ものであることを彼女に認識させた。そして、「壊れやすい」自信が砕け散ると、「すぐに新たな芽生えへの力と辛抱強い努力が顕現する。」

小説の鍵となる「虹」の形象についてアーノルド・ケトルは「テーマ」と「約束」という言葉を巧みな対句として用い、『『虹』のテーマはブルジョア社会

が個人の関係に何をなすかということで、『虹』の約束は男女が完全に生き、生命にあふれた創造的な関係に到達可能な新しい社会が現れるということだ」と述べながら、「テーマと約束との関係、すなわち大地と虹との関係は、しかし、言葉数の多さと神秘主義に包まれてしまっている」と批判して、「問題の根源はロレンスが[……]社会をブルジョア社会と同一視したことにある」(129)と、「大地」と「虹」の乖離を指摘した。しかし、これまで検討してきたように、「言葉数の多」い『虹』の観念的表現は、美学の試金石である自然としての身体的反応を描くことで、身体を超越した“meta-physic”ではなく「大地」に根を下ろした「虹」となっているのである。ブルジョア社会を描きながらロレンスが決して社会をそれだけに同一視していたのでないことは、モビリティのオルタナティブを絶えざる弁証法的緊張の中から導き出し、主人公がブルジョア的なアイデンティティに安住することを許さなかったことから明らかである。モビリティゆえに「かつて結んだ実」であるブルジョア社会との同一化をそのままにして「虹」の形象を完成へ導いたならば、ケトルの言う「神秘主義」にとどまっていたかもしれないが、この小説は「虹」を「現実化」するのではなく、現実である「大地」を、そこに架かる「虹」の生成過程において見た、ファーニハウの言葉を使えば「現実の美学化」であり、再生の可能性を内包する未完成によって特徴づけられたテキストなのであった。

ブラングウィン家のモビリティを三世代にわたって描き、中空に浮かぶ「虹」ではなく、社会と個人との関係が現実となって繰り広げられる「大地」に根差した「虹」をモチーフとして示すこの小説は、半世紀以上にわたる人物たちの経験と歴史とをどう扱ったと言えるのか。本論劈頭で触れたこの問いに立ち返るため、経験に重きをおいて労働者階級の歴史を研究した第一人者 E・P・トムスン (E. P. Thompson) による以下の文章を参照したい。

[P]eople do not only experience their own experience as ideas, within thought and its procedures, or (as some theoretical practitioners suppose) as proletarian instinct, etc. They also experience their own experience as *feeling*. [. . .] This is, exactly, *not* to argue that “morality” is some “autonomous region” of human choice and will, arising

independently of the historical process. Such a view of morality has never been materialist enough, and hence it has often reduced that formidable inertia—and sometimes formidable revolutionary force—into a wishful idealist fiction. (171, *emphases original*)

歴史は観念としてだけでなく「感情」としても経験されるというのは、モビリティを身体的反応に見るリアリズムと通底しており、トムスンが“inertia”と呼ぶものは、理論としての歴史と「生きた感覚」とを結節する力を持つ点で、『トマス・ハーディ研究』にロレンスが書いた“living, positive inertia”とも相通ずる。ホルダネスはロレンスの「生の道徳性そのもの」の表現が「矛盾を形而上学的形式に投影すること」でのみ可能になったと指摘して「形而上学的袋小路」を批判したが、「ときに恐るべき革命的な力」を持つ“inertia”との関連において「道徳性」を位置づけるべきとのトムスンの主張に従えば、「道徳性」や形而上学を「歴史的プロセスから自律した領域」と見なすことは「願望充足的で理想主義的なフィクションに還元」することである。「虹」に連なる形象に体现されたロレンスの美学を、それ自体で完成に至る「自律的な領域」としてのみ捉えるならば、「袋小路」で行き詰まるものと解釈されざるを得なくなるだろう。しかし、ロレンスの美学が物語の結びに架けた「虹」は、社会の変化とモビリティの「歴史的プロセス」から遊離して現れたものではなかった。性や階級の矛盾を孕んだ緊張の中でモビリティを駆動する対立関係という「大地」に根差すものとして「虹」は架かり、束の間で消えてはまた生成するというその性質ゆえに、絶えざる歴史の変容と継続を表す形象として小説全体の表題となった。

リーヴィスは「社会史家」ロレンスが『虹』に描いたのは「同じ生であり、同じ問題を違うように生きる異なった生——違うけれども同じもの——である〔……〕こうするなかに形式〔form〕が感じられる」(151)と書いていた。数世代にわたって「違うけれども同じ」生とは「慣性」としての“inert”な生であり、そうした生を通して「感じられる」「形式」こそ、『トマス・ハーディ研究』で「活性の力が“inertia”に出会い、それを凌駕しようとするものの、まだ超えていない。形式を作るのはそれらふたつの結合なのだ」(90)とロレ

ンスが書いた「形式」に他ならない。リーヴィスが『虹』に見出したのは、「ときに恐るべき革命的な力」を持つ「世代」と「生成」の美学を、小説という「形式」において「生成」した「社会史家」ロレンスなのである。

注

- 1 『虹』は歴史を描き得ておらず、そこにリーヴィスが読み込んだものは「神話」に過ぎないとする批判を出発点に『虹』の批評史を「神話対歴史」の図式で整理したのが、花尻えりか『「神話」と『歴史』——*The Rainbow* 批評をめぐる——』『藝文研究』第68号、1995年、111-29頁、である。また、同著者による以下の論文は「神話対歴史」の図式に触れながら『虹』の歴史的読解の可能性を探っている。麻生えりか『『虹』批評と現代社会——石炭とダイヤと工兵と』『D. H. ロレンス研究』第26号、2016年、33-58頁。
- 2 ウィリアムズは『ディケンズからロレンスまでの英国小説』（*The English Novel from Dickens to Lawrence*）の中で、『恋しい息子たち』を含む初期作品は労働者階級コミュニティを描いて「一種の言語の奇跡」（139）たり得ていると述べたが、そこからのロレンスの変容をたどって1914年を「危機の年」（144）と見なし、『虹』における「危機」の現れを分析している。表現が初期の「コミュニティの言語」から「観念の言語」（145）へと変化したことが指摘されている。
- 3 『虹』の完成に至る時期と重なって改稿が進められた『プロシア士官とその他の短篇』（*The Prussian Officer and Other Stories*, 1914）所収の諸短篇を分析するキース・クシュマン（Keith Cushman）は、「牧師の娘たち」（“Daughters of the Vicar”）と1911年の版（“Two Marriages”）とを比較し、初期の版においては「社会批判にしっかりした基盤を持つ」筆致で「炭坑と村の牧師館の世界という社会的な世界の説得力ある描写」がなされていたのに対し、1914年に改稿された版では男女の愛の関係が前景化してきたことを指摘している（114）。これと同様のことは『恋しい息子たち』から『虹』への変化についても言うことができる。
- 4 ホルダネスは *The First Lady Chatterley* と最終版とを比較しつつ、前者には

リアリズムで描かれていた炭坑労働者の姿が改稿を経ると後景に退がって非人間化している点や、前者では明確であった猟番の労働者階級の特徴がメラーズになると形骸化し、コニーとの階級差が曖昧化されたことで彼らの関係が可能になっている点などを指摘しているが（223-27）、ロレンスの作風の変化を大きな流れで捉えたとき、1926年のイギリスへの一時帰国以降に労働者階級的な価値への傾斜が読み取れることを本稿は指している。

- 5 カレイジアンその他に『虹』を“inert”に着目して論じているのはメアリ・アン・メルフィ（Mary Ann Melfi）であるが、小説冒頭におけるブラングウィン家の男性たちの“inert”な状態と女性たちの「異質で未知なるものへの希求」とを対比させ、「意識の覚醒とその“inertia”に対する勝利」（355）に結び付けるメルフィの解釈は、“inert”な状態が再生につながるとするカレイジアンの議論とは異なっている。
- 6 小説冒頭の、一日の労働の後で炉辺に寛ぐブラングウィン家の男性が“inert”と形容されている（“the men sat by the fire and their brains were inert, as their blood flowed heavy with the accumulation from the living day”（10））のは、女性たちとの対比においてであって否定的な意味合いはないが、家庭的な母親に反撥して社会に出ることを求めていたアーシュラが「恍惚の苦しみ」の果てに、土地に根差したブラングウィン家の男性たちと同じ“inert”な属性を帯びるというのは興味深く、一方向ではないモビリティを読み取ることができる。また、『虹』と同時期の短篇“The Thorn in the Flesh”で主人公が“He lay against the wall inert as if dead, inert, at peace, save for one deep core of anxiety, which knew that it was *not* all over”（25, emphasis original）と描写された直後に覚えず軍曹を突き飛ばすという物語の中心的な出来事を起こすことや、“She [Emilie] saw him lying there inert, and terribly still, and she was afraid. His shirt was unfastened at the throat. She saw his pure white flesh, very clean and beautiful. And he slept inert.”（30）のように“inert”と形容された主人公がこののちエミリーと肉体的に結ばれて“he was restored and completed”（34）と書かれる状態になることを考えれば、カレイジアンの言う「動きを止めた状態とそれに続く再生」の契機として“inert”な状態が描かれていると読める。

- 7 ヒラリー・シンプソン (Hilary Simpson) は、「フェミニズム運動に関わる女性たちとのアーシュラの友情は小説が進むにつれて重要性が薄らいでゆく」と指摘し、アーシュラを「有機的なもの」の側に据え、フェミニストの友人たちを「自動的ないしは機械的なもの」の側に置く「よく知られた」図式を読み取ることができると述べたが (42)、小説最後の場面のアーシュラの実験を本稿のように考察すれば、単純にフェミニストたちが否定されてアーシュラの態度が肯定されているとは言えなくなる。

引用文献

- Cushman, Keith. *D. H. Lawrence at Work: The Emergence of the Prussian Officer Stories*. Brighton: Harvester, 1978.
- Eagleton, Terry. *Criticism and Ideology: A Study in Marxist Literary Theory*. London: Verso, 1978.
- Fernihough, Anne. *D. H. Lawrence: Aesthetic and Ideology*. Oxford: Clarendon, 1993.
- . Introduction. D. H. Lawrence. *The Rainbow*. xiii-xxxiv.
- Holderness, Graham. *D. H. Lawrence: History, Ideology and Fiction*. Dublin: Gill, 1982.
- Kalaidjian, Andrew. “Positive Inertia: D. H. Lawrence and the Aesthetics of Generation.” *Journal of Modern Literature* 38. 1 (2014): 38-55.
- Kettle, Arnold. *An Introduction to the English Novel*. Vol. 2. London: Hutchinson's, 1953.
- Kincaid-Weekes, Mark. “The Sense of History in *The Rainbow*.” *D. H. Lawrence in the Modern World*. Ed. Peter Preston and Peter Hoare. London: Macmillan, 1989. 121-38.
- Lawrence, D. H. *The Rainbow*. Ed. Mark Kincaid-Weekes. Harmondsworth: Penguin, 1989.
- . *Study of Thomas Hardy and Other Essays*. Ed. Bruce Steele. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

- . "The Thorn in the Flesh." *The Prussian Officer and Other Stories*. Ed. John Worthen. Cambridge: Cambridge UP, 1983. 22-39.
- Leavis, F. R. *D. H. Lawrence: Novelist*. Harmondsworth: Peregrine, 1964.
- McDonagh, Josephine. "Space, Mobility, and the Novel: 'The Spirit of Place Is a Great Reality.'" *A Concise Companion to Realism*. Ed. Matthew Beaumont. Oxford: Blackwell, 2010. 50-67.
- Melfi, Mary Ann. "'The Shake of the Kaleidoscope': Memory, Entropy, and Progress in Lawrence's *The Rainbow*." *The Journal of English and Germanic Philology* 100. 3 (2001): 355-76.
- Simpson, Hilary. *D. H. Lawrence and Feminism*. Beckenham: Helm, 1982.
- Thompson, E. P. "The Poverty of Theory or an Orrery of Errors." *The Poverty of Theory and Other Essays*. London: Merlin, 2008. 1-210.
- Williams, Raymond. *The English Novel from Dickens to Lawrence*. Frogmore: Paladin, 1974.

英国のゼネラル・ストライキ文学

—— D・H・ロレンスとエレン・ウィルキンソンの労働者階級小説

井上 麻未

1. 序

レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) は『チャタレー夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*) と 1926 年の英国のゼネラル・ストライキの間には「最も切実で重要な結びつき」があるといっている (Williams 186)。ゼネラル・ストライキは 20 世紀の英国において最大の労働争議であったが、第一次世界大戦と 1929 年の大恐慌の間に起き、結果的に敗北に終わったことから、現在では人々の記憶にわずかに残るのみであろう。

しかしながら、2015 年にチャールズ・フェラル (Charles Ferrall) とドゥガル・マクニール (Dougal McNeill) が *Writing the 1926: Literature, Culture, Politics* を刊行し、「ゼネラル・ストライキ文学 (The General Strike's literature)」について初めて論じた。この新たな研究の背景としては次のような流れがある。労働争議が頻発した 1970 年代を経てサッチャー政権下の 1980 年代には炭鉱ストライキは敗北に終わる。しかし、1990 年代後半から従来の研究とは異なる視座からの労働争議の歴史研究が進み、2000 年代にはゼネラル・ストライキの包括的な研究が展開された。その中で、スー・ブルーリー (Sue Bruley) は、ジェンダーやコミュニティの視座を取り込んだ歴史研究、*The Women and Men of 1926* の中で、文学には同様の視座を持つ作品があるとして、エレン・ウィルキンソン (Ellen Wilkinson) の小説『クラッシュ』(*Clash*) を取り上げている。

Despite the advent of gender history from the late 1980s, there have been no major studies of the social and gender impact of the 1926

dispute, although recently both Ian Haywood and Maroula Joannou have addressed gender aspects of the General Strike through the literature of the period. Ellen Wilkinson's novel *Clash* is perhaps unique in that it develops a socialist-feminist perspective through her heroine, labour activist Joan Craig, who is committed to preserving her independence within marriage. (Bruley 5)

その後、新たにウィルキンソンの伝記が2014年、2016年に出版された。¹ウィルキンソンはD・H・ロレンスと同時代の作家であり、女性初の文部大臣を務めた政治家であった。マンチェスターのメソディストの信仰厚い労働者階級の家庭に生まれ、幸せな子供時代を送った。奨学金でグラマースクールに進み、小学校で教鞭をとりながら週の半分をマンチェスターの教員養成学校に通い、1910年にマンチェスター大学に奨学金を得て入学。1913年に歴史学で学士号を取得し卒業した。ウィルキンソンは労働者階級の女性が高等教育を目指すことができた最初の世代であった。大学卒業後、労働組合のオルガナイザーとなり、1924年に唯一の女性の労働党の国会議員に選出される。1940年に内務政務次官、1945年には文部大臣に就任し、中等教育の無償化、全ての学童を対象とする医療など教育政策の改革を進める。社会主義者であり、生涯、労働者の待遇改善のために尽力し、社会（人種、階級、ジェンダー）の平等と平和を求め、政治に身をささげた。卓越したスピーチの能力と行動力を備え、世界を飛び回り、レーニン、トロツキー、ガンジー、アインシュタインと会うなど、小柄な体でありながらエネルギーにあふれた正義感の強い人物であった。トレードマークであった赤毛から「レッド・エレン」と親しみを込め呼ばれていた。

ウィルキンソンはゼネラル・ストライキの中、労働組合会議の代表として国内をまわり、精力的にスピーチを行い、彼女が各地で得た情報は*A Workers' History of the Great Strike* (1927) にまとめられた。ウィルキンソンはゼネラル・ストライキ後も続いた炭鉱ストライキに際し、自ら渡米し、寄付を集め、疲弊する炭鉱夫の妻や子供達を支援し続けた。ウィルキンソンはゼネラル・ストライキを主題に据え、政務の傍ら小説『クラッシュ』を書き、

1929年に出版した、『クラッシュ』はゼネラル・ストライキの中で、労働者とその家族の支援に奔走する労働者階級出身の若く聡明な女性の労働組合員と、彼女を愛する中流階級の男性二人の三人をめぐるラブロマンスである。

ロレンスとウィルキンソンには直接的な接点はない。しかし、興味深いことに両者はほぼ同時期に、ゼネラル・ストライキで揺れる英国社会を舞台に階級が異なる男女三人をめぐる愛の物語を書いていた。ロレンスとウィルキンソンの『チャタレー夫人の恋人』と『クラッシュ』は「ゼネラル・ストライキ文学」の主要な小説としてフェラルとマクニールによりそれぞれの作品が論じられているが、この2つの作品は異なるカテゴリーに分類されている。2つのカテゴリーとは、1) ストライキを外側から見ている“Outside In”, 主に中流階級作家たち、2) ストライキを内側から見て外の世界に伝えようとする“Inside Out”, 主に労働者階級出身の作家たちである。² フェラルとマクニールによれば、ウィルキンソンは“Inside Out”の作家であるが、ロレンスは外の世界から故郷に戻り、内側からストライキを見ていたため、これらの2つの分類のどちらにも当てはまらない作家としている。

敗北に終わったゼネラル・ストライキでありながら、二つの作品がいまだに読み継がれているのはなぜなのであろうか。本稿では、異なる読者を対象に、異なる目的・立場から書かれたロレンスとウィルキンソンの作品を読み直すことで、「ゼネラル・ストライキ文学」として、二人の小説はラブロマンスという形式をとりつつ、従来の中流階級中心とする小説のゼネラル・ストライキ理解とは異なる、ゼネラル・ストライキの本質を描き出す作品であること、そして、共に“working-class fiction”³として、ある役割を担っていることを明らかにしたい。

2. 『クラッシュ』——内側から描かれる労働争議

労働党の国会議員としてゼネラル・ストライキの間、車で国内を駆け回り、精力的に各地でスピーチをしていたウィルキンソンは、ほかの誰よりもゼネラル・ストライキを自分自身の目でよく見て体験したと言っている。

I SUPPOSE I saw as much of the General Strike as anyone—as a

Member of the House of Commons; as a trade union official whose union was concerned in the Strike. ... I traveled by motor about two thousand miles; —through the West of England, back to London, and then to the North, addressing forty-seven mass meetings, both in counter towns and in the big industrial areas, attending strike committees in sessions, and meeting every kind of person on the job.... (Wilkinson, Introduction xi)

ウィルキンソンは、労働者は闘う用意ができていたにもかかわらず、組合のリーダーにはできていなかったことがゼネラル・ストライキの敗因であったこと、しかしながら、「全ての困難にもかかわらず、ストライキは大きな成功 (a magnificent success) であった」(Wilkinson, Introduction xvi) と断言している。ウィルキンソンにとってゼネラル・ストライキは労働者の団結を示すもので、その中に将来的にさらに大きな革命的な動きにつながる可能性を見出していた。彼女は、労働者たちが敗北にもかかわらず、プライドをもっていること、そしてストは起こるべくして起きたものであり、各地に新しいリーダーシップを生み出す力が働いていると言う。

『クラッシュ』は、労働者階級出身のヒロインであるジョーン・クレイグがゼネラル・ストライキのユニオンの仕事と恋愛を通して、社会主義的なリーダーシップを獲得してゆく教養小説である。ジョーンは労働組合員であり、ゼネラル・ストライキの状況下での仕事を通して、中流階級のトニー・ダクレと、同じく中流階級の退役軍人、ジェラルド・ブレンと知り合い、妻のあるトニーと恋に落ちる。トニーはブルームズベリーを象徴する人物であり、若いジョーンを愛し、彼女と一緒にになりたいと願うが、ジョーンにキャリアを捨て彼のために生きることを求める。一方ジェラルドもジョーンを愛すが、ジョーンはトニーに感じるような強い男性的な魅力をジェラルドには感じない。しかし、ジョーンはゼネラル・ストライキで行動を共にしたジェラルドの、労働者に寄り添う姿勢と闘志に次第に惹かれてゆき、彼女が強い恋愛感情を抱くトニーとのブルームズベリーでの安楽な生活を選ばず、ジェラルドと結婚し労働者と共に歩む人生を選ぶ。

多くの社会主義者たちは、労働者階級の人々にはラブロマンスは有害だと

批判的であったが、大戦間に労働者階級の女性や少女に人気があり広く読まれていたことから、ウィルキンソンは社会主義の政治的で難解な思想を伝えていくにはロマンスが最適であると考えた。実際、ウィルキンソンは、社会主義文化を創造していくにあたり、ハイ・アートとロウ・アートを区別することはその発展の妨げになると嘆いていた。⁴

従来、ゼネラル・ストライキ文学が注目されてこなかった理由の一つが、それらの多くがマイナーな労働者階級の作家の手によるものだったことである。『クラッシュ』の当時の人気と世界的な受容にもかかわらず、⁵モダニズム文学の中で注目されなかった背景には、労働者階級の女性の作者による大衆向けのラブロマンスであったことが大きく影響していると言えよう。

しかしながら、デイヴィッド・エアズ (David Ayers) は著書 *English Literature of the 1920s* の中で、「1920年代の階級間のダイナミクスをウィルキンソンの小説ほど真剣に、真実をありのままに描いた小説をブルームズベリーのハイブラウな作品の中に見つけることは難しい」(Ayers 128) と言っている。実際に『クラッシュ』は、階級への忠誠、キャリア、愛をめぐる選択を迫られるヒロインの葛藤を描き、クラスとジェンダーが複雑に絡み合う物語となっている。

『クラッシュ』はワーキングクラス・フィクションの一つとしてもジョン・フォードム (John Fordham) の “Working-class fiction across the century” の中で論じられている。フォードムは “working-class fiction” の定義について次のように述べている。

Working-class fiction will be defined here by the way that it responds, in a peculiarly local and vital way, to a lived experience that middle-class novels have only been able to observe. Working-class fiction thus sees beyond the limited horizon of bourgeois knowledge to articulate the actual experience and the felt consequences of industrialization. (Fordham 131)

この引用の通り、中流階級の作家による作品が外側から見ることしかでき

ない、労働者階級の人々の“a lived experience”というものがあり、特にゼネラル・ストライキにおけるそれらを描くことが、ゼネラル・ストライキ文学の特徴の一つである。フェラルとマクニールが指摘するように、英国では中流階級のゼネラル・ストライキのイメージがゼネラル・ストライキのイメージとして人々の間に定着していた。つまりロシア革命のような深刻な事態に英国が陥らないよう、「ユーモアとイングリッシュネス」を持つ人々が一致団結して助け合い、事なきを得たというイメージである。ストライキ下で飢えに直面していた労働者の家族の現実とイギリス的なユーモアとはかけ離れているが、上述の中流階級のゼネラル・ストライキのイメージは強力であり、敗北という現実の中で、レフトウィングの作家達が中流階級の人々が抱いていたゼネラル・ストライキに対する固定化したイメージを否定することは難しかったといえよう。しかし、ゼネラル・ストライキ文学の読み直しが、当時の社会をあらゆる角度から照射し、ゼネラル・ストライキを新たな視点から見直し、「復元（restoration）」することにつながってゆくのである。⁶

『クラッシュ』ではヒロインのジョーンはロンドンから炭鉱町ケアリーズ・メインに救援委員会のメンバーとして派遣される。この地での体験は労働者階級出身のジョーンの視点から描かれ、荒廃した炭鉱町から、彼女の視点は家庭の中に深く入ってゆく。ジョーンは産後間もない女性を定期的に訪問する役割を担う。そこで、彼女はお湯も、ミルクも赤ん坊の衣服すらない現状を目の当たりにする。彼女は驚き、動揺し、すぐにロンドンのブルームズベリーの友人に援助を求める。皮肉にもその友人は炭鉱主であるが、ジョーンはこの時点では、女性や子供の惨状に動転するばかりであった。

しかし、ジョーンは同時に、この地で初めて労働者階級の女性達的能力に気がつく。恋人トニーから、結婚か仕事かとせまられていたジョーンにとって、働く彼女達と活動を共にすることで、その行動力に驚き、感嘆し、トニーの中上流階級的な考えの視野の狭さや滑稽さを感じるようになる。

“You say I can't be your wife and love and do my job. Look at the work these women have to do. Take Mrs Cocks—she is on the Country Council and the Education Committee, and does every scrap of her own

mending, washing, and backing,” She laughed to herself, imagine Tony’s face. Would he accept that, or would he seek to prove the William and Mary Cocks had not achieved the perfect union he dreamt of ? (148)

さらに、食べるものに事欠く炭鉱町で、女性たちは「スープキッチン」⁷でコミュニティー、そして家族を守ろうと必死に働いている。彼女達は、チャリティーのためロンドンに向かうジョーンのために駅に集まり、用意した精一杯の食べ物を持たせ彼女を暖かく送り出す。

一方のトニーは決して、ジョーンをこの地に訪ねることはない。炭鉱町の醜悪さ単調さを綴ったジョーンの手紙への彼からの返信として、ロンドンからの美しい品々をつめたギフトを送るのみであった。定期的に届くトニーからの贈り物は、労働者家庭で間借りするジョーンにはロンドンのブルームズベリーとこの町が別世界であり、「イングランドほど階級間の壁が高い国は他にあるだろうか」(185)というジョーンの言葉通り、階級間の越えられない壁を痛感させるものだったと言えよう。トニーには労働者の生活がいかなるものか見当もつかず、場違いな品々をジョーンに贈り続け、それが彼女にどのような葛藤を引き起こしているか想像もつかない。質素極まりない部屋と、輝く見事なファブリックのコントラストがゼネラル・ストライキ下のブルームズベリーと炭鉱町ケアリーズ・メインの、強烈な対比を映し出している。

Tony’s answer was to send her still more beautiful things for her own personal use, a Batik cover for her bed that Joan was half afraid to show her hostess for fear she might be offended. But that dear woman just stroked gently the beautiful dyed silk— “Oh, lovely thing, the lovely thing, isn’t it a joy to see!”... Almost reverently she took all her own ornaments and pictures from the little room, and against the bare, clean walls the Batik cover glowed like a jewel. ... Mrs Cocks was greatly elated and allowed a few very carefully selected friends to see the presents from “Joan’s rich man,” but Joan felt it was all wrong. (151)

最終的にジョーンが夫として選ぶジェラルドがトニーについて述べているように、トニーはジョーンの活動を支援しながらもあくまでも「傍観者(spectator)」であり、決して労働者のために自らが闘うことはない。トニーとジョーンの関係は、家庭に入り自分だけのために生きてほしいという中流階級の家父長的な価値をジョーンに押し付けるトニーと、社会主義の理想にむけて自ら決断をし、労働者やその家族のために行動をするジョーンの価値観がぶつかり合うものであるが、同時に互いに強くひかれあう。トニーにとってジョーンのように魅力的でありながら、身なりにかまわず男性的で恐れを知らず情熱的な若い女性に出会うことは初めてであり、40歳を過ぎての自分の恋心に戸惑う。一方、ジョーンは年上でエレガントなトニーに純粹にときめき、彼との結婚に憧れる。しかし、自身の社会的な立場を守ろうと、世の中に公にしないジョーンとの再婚、あるいは愛人としてのジョーンとの暮らしを望むトニーの要求は、ワーキングクラスの男性や女性のためにリーダーシップをとって政治的な仕事を続けたいと望むジョーンの願いと全く相いれない。ジョーンは彼女を慕うもう一人の男性、退役軍人のジェラルドと恋人トニーとの間で揺れるが、やがてトニーとの結婚生活という考えを受け入れがたく思うようになる。最終的に、ジョーンは自分が本当に望むものはブルームズベリーでの優雅な暮らしではなく、“the thrill of the leadership” (183) であると気が付き、父親の遺産を労働者の教育のために使い労働者と共に歩もうとするジェラルドと結婚し、自らもリーダーとなって生きる道を選択する。

小説の最後の場面として、ジョーンはチャリティーのためにロンドンに行く。トニーの妻ヘレンが主催してくれたパーティーにおいて、中上流階級の人々の労働者階級への理解のなさ、思慮に欠けた言動に堪忍袋の緒が切れ、自らのブルームズベリーとの決別といえるスピーチをし、ジェラルドとパーティーを去る。ジョーンのスピーチとスピーチの後の二人の様子から、ジョーンの迷いのなさ、自らの選択への確信が明らかにされ、小説は希望に向かう二人の姿でハッピーエンディングを迎える。

“I have always earned my own living and I have come to beg you

from women like you—you who are kept in luxury by the efforts of other people. I humbled myself to beg you for your charity for the miners, the men without whom the workers of this country could not have won your war, the war that kept you dividends safe and your homes unscathed. ...What I am saying now will close your purses, but I believe that if the men I know in the coalfields had heard what has been said here to-day, they would be grateful to me for sparing them the final humiliation of your grudging almsgiving.” (188)

ゼネラル・ストライキの炭鉱夫と家族の日常生活を同じ階級の女性の視点から描いたこの作品は、当時明らかにされることのなかったゼネスト下で困窮する人々を、同じ英国でありながら別世界に生きる中上流階級の人々の生活と対比において鮮明に描き出している。

ジョーンは階級間、地理的に離れたロンドン炭鉱地域を自由に行き来できるヒロインであり、移動のスピードと同じ早さでめまぐるしく成長する彼女と共に読者はゼネラル・ストライキを追体験することとなる。⁸ エレンの作品は敗北に終わったゼネラル・ストライキを描きつつも小説の最後に暗さはなく、社会主義的な社会到来という未来への希望がヒロイン、ジョーンに託されている。

『クラッシュ』は、中上流階級の人々には広く知られていなかったゼネラル・ストライキの実際の状況を描き出すと同時に、ジョーンが身をもって体験した労働者階級の文化、特に人々の連帯と女性の逞しさを誇り、称賛する小説であり、社会主義的な思想や価値観を労働者階級の人々に伝えるという教育的な目的を持った小説であった。

3. The *Lady Chatterley* Novels——複眼的、多声的に描かれる階級闘争

ロレンスが1926年の夏に祖国を訪れた後、10月に初稿を書き始めるが、この時点ではまだ炭鉱夫達は戦い続けていた。しかし、ストライキの敗北が明らかになってからロレンスが執筆した二稿と *Lady Chatterley's Lover*（以下最終稿と記す）では、共産黨員パーキンは姿を消す。

ロレンスがゼネラル・ストライキのニュースをイタリアで聞いた時点では階級闘争を恐れつつも、自分の立場ははっきりとは示していなかった。彼は妹のエイダ宛の手紙にこのように書いている。

'I had your letter today—and the coal-strike is on, and a general strike threatened, and altogether it feels like the end of the world. But let's hope something new and good will happen, so things can get clear again.' (5L 448)

やがて、1926年8月にイーストミッドランズに戻った段階でストライキの実際を見聞きし、炭鉱夫やその家族への思いを深めることとなる。その後、ロレンスは炭鉱夫達のストライキの決着がつかない段階でイタリアに戻り *The Lady Chatterley novels* の執筆を開始するが、二稿と最終稿の執筆の間に正式にストライキが敗北に終わる。フェラルとマクニールは、この炭鉱ストライキの敗北という結果がロレンスの階級闘争と労働争議への考え方に影響を及ぼしたと指摘する。

While Lawrence's visit to England during the lockout provoked his interest in class politics, his apocalyptic combination of this despair and radicalism was, at least in part, the consequence of the miners' defeat. It intensified as Lawrence brooded on the hopeless condition of the working class and industrial civilisation. (Ferrall and McNeill, 85)

「ゼネラル・ストライキ文学」として *The Lady Chatterley novels* を読むと、共産党員であるパーキンとチャタレー卿の夫人であるコニーの住むそれぞれの社会や価値観が相容れず、激しく対立する様を描く初稿は、ウィルキンソンの『クラッシュ』同様に階級闘争を内側から見て外の世界に伝えようとする“Inside Out”の作品に近い。最終稿は、作品を通して、階級闘争が労働者階級の内と外の両方の視点から、複眼的、多声的に描かれているため、“Inside Out”, “Outside In” という分類には収まりきらず、どちらの要素も持つ小説

となっている。いずれの作品においてもゼネラル・ストライキが全面には出てこないが、小説の背景にあるのはゼネラル・ストライキでピークに達した階級闘争である。

初稿では『クラッシュ』と同様に労働者階級の人々の日常が描かれる。ロレンスの小説の中では、階級の価値観を体現するものとして、しばしば食事の場面が重要な意味を持つ。⁹ シェフィールドにパーキンを訪ねたコニーはチューソン夫人にお茶に招かれる。精一杯のもてなしがあり、労働者階級の家族特有の親密さや賑やかさのある食卓だが、コニーの階級からの視点から描かれることで、読者は彼女が抱く違和感や息苦しさ、決まりの悪さを覚える。単なる「ティー」という英国的な日常の一コマであるが、パーキンとコニーの階級間の溝がいかに深く、埋めがたいものであるかを如実に示している場面と言えよう。

The tea-cups were handed round.

"I can see my husband lookin' at these small cups—he's use to a big one. And so is Oliver—Mr. Parkin—they both like plenty an' swilerin'. But you've got to drink it up slow today, my lad!" she added to her husband.

"Yo'n made it that sweet, looks like I shan't be able to drink it o' nohow," said Bill.

"Well drink a drop up, an' I'll fill it up. —What shall yer have now?"

Constance felt breathless. On the table was tinned salmon and boiled ham, tinned peaches and tinned strawberries, thought it was fruit season: brown bread and butter, and white and currant loaf,—besides various home-made cakes and pastries.

"Have a few strawberries! Oliver—serve a few strawberries, if your hands'll let yer."

Oliver very awkwardly served a few strawberries. (163)

初稿ではパーキンがコニーの友人である画家のダンカンに自分が共産黨員

であると打ち明ける。コニーにその事実は明かさずに、ダンカンもコニーと
 コミュニズムについて話す機会を持つ。ダンカンもコニーも社会主義者だっ
 た頃の話から二人の会話はスタートする。しかし、もはや政治には興味はなく、
 コミュニズムを恐れるというコニーにダンカンは次のように話す。読者はダン
 カンを通してパーキンの考えを聞くこととなる。

“... Do you know what I think the English *really* want?”

“What?”

“Contact! Some sort of passionate human contact among themselves.
 And perhaps if the Communist *did* smash the famous “system” there
 might emerge a new relationship between men: *really* caring about
 money, *really* caring for life, and the life-flow with one another.” (211)

初稿にはウィルキンソンの社会主義小説『クラッシュ』と同様に、コミュニ
 ズムによって社会が変わるかもしれないという希望が書き込まれ、実際に小
 説はコニーがパーキン夫人となって生きていく未来を幸せに思い描く語りで
 幕を閉じる。

But now, to get away from it, to get away from the whole leprous
 contamination of it: to be just Mrs Parkin, if she could. ... She breathed
 deeply and clenched her fists. Ah, she felt happy! To be going, to be
 going forever! To be going away from this! How she hated Wragby, the
 great dead-house that it was. (220)

しかし、最終稿のコニーのテヴァシャル村への訪問においては、労働者階級
 の人々との直接の交流はなく、村の人々は「醜悪」で「人間以下」の存在と
 して「不気味な」集団として描かれ、テヴァシャル村でコニーは「恐怖の波」
 の中で「全面的な絶望」を感じる。

ゼネラル・ストライキで疲弊する町をウィルキンソンも描き、ヒロインの
 ジョーンがトニーへの手紙の中で、町が醜悪であり、貧しさより醜悪ほど酷

いものはないと語るが、『チャタレー夫人の恋人』の最終稿のテヴァシヤル村では、自由間接話法によるコニーの声は恐怖と絶望に満ち、やがて個人や村を越え、英国の歴史の一場面として、ゼネラル・ストライキが社会全体にもらした、「不気味さ (uncanniness)」が響いてくる。

Tevershall! That was Tevershall! Merrie England! Shakespeare's England! No, but the England of today. ... Half-corpses, all of them: but with a terrible insistent consciousness in the other half. There was something uncanny and underground about it all. ... They have reduced them to less than humanness, and now there can be no fellowship any more! It is just a nightmare.

She felt again: in a wave of terror the grey, gritty hopelessness of it all. With such creatures for the industrial masses, and the upper classes as she knew them, there was no hope, no hope anymore. (153, 下線は引用者による)

このゼネラル・ストライキの不気味さはロンドンをも覆っており、ちょうどゼネラル・ストライキの最中に『灯台へ』(*To the Lighthouse*)を執筆中であったヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) も、夫レナード (Leonard Woolf) がケインズ (John Maynard Keynes) と共に炭鉱夫達のサイドに立とうと興奮気味に奔走している傍らで、夫同様に一種の政治的な興奮を覚えながらも、同時に、言い知れぬ不安や恐怖を感じていた。

Her apprehension may not go so far as that of Arnold Bennett, ...who recorded angrily in his own journal that the Strike was 'revolutionary', its calling 'a political crime that must be paid for'. But it has a parallel in the fear which Osbert Sitwell recalls in *Laughter in the Next Room* (1949) that 'our long civil peace, the greatest asset of the British race, stood in jeopardy'. The roots of Woolf's disquiet lie both in her dislike of disturbance, and, I believe, in an anxiety, even an uncontrollable physical

repulsion which she could feel when confronted with the working class *en masse*. (Flint 323, 下線は引用者による)

このような不安に襲われていたからこそ、中流階級の人々は、英国人ならではの陽気さやユーモアで平静を装う必要を感じ、過剰な人員と体制で危機的状況に対処したと言えよう。

さらに、最終稿では外からの視点だけでなく内側から、つまり労働者階級の視点からも階級闘争を描いている。初稿ではコニーの姉のヒルダとパーキンには出会いの機会がなく、二稿では短い出会いの場のみ用意される。しかし最終稿では、コニー、メラーズ、ヒルダの3人が一緒に食事を取り、会話をする。

ジェレミー・ホーソン (Jeremy Hawthorn) が述べる通り、ロレンスの小説においては、語り手が単に「異なる階級間の価値観が衝突した」と語るのではなく、階級が異なる登場人物がそれぞれのことばで話し、それぞれの生活様式で行動をし、互いに対峙し、その価値観がクラッシュするさまが見事な技法で描かれてゆく。

Such concern is found again and again in working-class fiction, but where many other working-class writers *state* their interest in such a clash of values, Lawrence *enacts* this clash through the language and behavior of the characters and without. ... romanticizing working-class life. (70)

この技法が顕著に見られるのが、最終稿においても再び、食事の場面である。三人の食事の場面では、ヒルダとメラーズがそれぞれの言葉とマナーを通して、闘いを繰り広げる。前述の初稿でのぎこちないマナーのパーキンとは対照的である。メラーズはフランネルのシャツを着たままりラックスして食事をとっている。

“Why do you speak Yorkshire?” she said softly.

“That! That’s non Yorkshire, that’s Derby.”

He looked back at her with that faint, distant grin.

“Derby, then! Why do you speak Derby? You spoke natural English at first.”

“Did Ah though? An’ canna Ah change if Ah’n a mind to ’t? Nay nay, let me talk

Derby if it suits me. If yo’n nowt against it.”

“It sounds a little affected,” said Hilda.

“Ay, ’appen so! An’ up i’ Tevershall yo’d sound affected.”—He looked again at her, with a queer calculating distance, along his cheek-bones: as if to say: Yi, an’ who are you? (243)

メラーズは、「おれが話しているのは、ヨークシャーではなくて、ダービシャーの方言だ」と自分の方言に誇りを持っている。ヒルダは、リラックスした中にも、メラーズのマナーが洗練されていることを見てとり、また彼が自分との力関係において、会話の中で方言と標準語を巧みに話しわけ、常に自分より優位に立てる能力をもった人物であることを悟る。メラーズに、“Yi, an’ who are you?”と聞かれている気持ちさえするヒルダは、一体何が「普通」で、何が「普通」でないのか、労働者階級の文化に直接触れたことで、自らのアイデンティティに揺さぶりをかけられていると言えよう。実際、最終稿において、言語と階級の問題は非常に重要なテーマである。¹⁰

初稿と最終稿の間に、ゼネラル・ストライキの後も粘り強く戦い続けた炭鉱夫達のストライキが敗北に終わった。初稿では『クラッシュ』同様に、労働者や生活が内側から書かれ、ゼネラル・ストライキがある種の希望をもたらすものとして描かれている。しかし、最終稿では初稿の希望は消え、ゼネラル・ストライキとそれに伴う階級闘争により、社会全体に絶望や不安が広がる歴史的な瞬間が書かれてゆく。しかし、労働争議は敗北に終わっても、メラーズを通して、階級闘争により労働者階級の文化まで破壊されることはないこと、そして人間同士の親密な結びつきや、自らのアイデンティティが織り込まれた土地の言葉など、労働者階級が誇り、守るべき階級独自の価値

があることをロレンスは描き、最終稿はメラーズから彼の子を宿すコニーへの手紙で結ばれる。

4. 結語

“Working-Class Fiction Across the Century” の中でフォーダムは、“working-class writing” とは、その語りが、コミュニティの中の労働者同士の内的な関係だけではなく、外の世界との個人的あるいは共同的な関係によって形成されてゆくため、永続性と変化が弁証法的に作用し合うという特徴を持つものだと定義している。そして、E・P・トムスン (E. P. Thompson) の言葉を借り、このような特徴を持つ、“working-class writing” は自ら文化を形成し、さらに新たな文化を形成してゆくのだと述べている。

A dialectical interplay of permanence and change is central to the nature of working-class writing, since its narratives are constituted not only by an internal relationship of worker to community, but by individual and communal relationships to the outside world. ... Working-class writing, therefore, embodies a consciousness of process in which, ... to borrow a phrase from E. P. Thompson, the working-class is “present at its own making,” and at its continual remaking. (Fordham 132)

エレン・ウィルキンソンは、労働者階級出身の労働党の唯一の女性の国会議員として、ストライキ下でありとあらゆることを実際に見聞きした彼女しか書くことができなかった小説を書いた。ウィルキンソンは、人種、階級、ジェンダー間の不平等な権力関係は、資本主義的な社会を革命的に変えない限りは決して覆すことはできないと信じていた。ウィルキンソンは政治と平行して、労働者自身が理解できるように、ラブロマンスというかたちで、内側から階級間の不平等を描き、同時に、ストライキに立ち上がった労働者達の革命的な力に希望を見だし、「階級意識」を社会主義小説として「結晶化」したのである。¹¹

ウィルキンソンは小説家というより、むしろ常に人びとと共にあった政治

家、「レッド・エレン」として今なお人びとの記憶に残っている。¹²しかし、彼女の『クラッシュ』は労働者の視点、特に女性の視点から労働者階級家庭の暮らしや労働争議を描いた稀有な小説であり、彼女の偉大な業績の一つであることは間違いない。

一方、ロレンスは故郷ミッドランズに戻り、いずれの階級からも一定の距離を置いた外の視点を持ちながら労働者階級を内側から描くという、特異な立ち位置から、英国社会全体を俯瞰し、初稿、二稿と書き進め、最後の長編小説を執筆した。そして、小説の舞台として選んだのは故郷ミッドランズである。

ピーター・プレストン (Peter Preston) が指摘する通り、ロレンスは長く祖国を離れていたが、「多くの意味において、ローカル・ライター¹³であった」(Preston 287)。英国の階級闘争という現在にまで続くテーマについて、コスモポリタンの視点を持つロレンスが、炭鉱の地を舞台に、小説の主な読者層であった中流階級のみならず、英国人の半数以上を占める、働く「ふつうの人びと」、つまり労働者階級の内側からも描いている作品ゆえに、『チャタレー夫人の恋人』は今なお広く読み継がれていると言えるだろう。

ゼネラル・ストライキという 20 世紀の英国最大の労働争議に直面し、ウィルキンソンもロレンスも、ペンを執らずにはいられなかった。同時代を生きた、労働者階級出身の二人は共に労働者階級の価値に重きを置き、小説を通して、それぞれ独自のかたちで労働者階級の文化形成に大きな貢献を果たしたと言える。

注

- 1 マット・ペリー ‘Red Ellen’ Wilkinson: Her ideas, movements and world とローラ・ビアーズの Red Ellen: The Life of Ellen Wilkinson, Socialist, Feminist, Internationalist がエレン・ウィルキンソンの伝記として 2014 年、2016 年にそれぞれ出版された。
- 2 Ferrall and McNeill の Part I を参照されたい。
- 3 Johan Fordham の “Working-class fiction across the century” および Jeremy

Hawthorn の “Lawrence and working-class fiction” を参照されたい。

- 4 Haywood and Maroula に詳しい。
- 5 『クラッシュ』の受容については、Haywood and Maroula の Introduction に詳しい。高級紙からラディカルな新聞まで数十紙に概ね好意的な書評が載り、スコットランド、アイルランド、アメリカ、そしてオーストラリアにおいても同様に好意的な書評が書かれた。
- 6 Ferrall and McNeill, p. 13 “Working-Class Modernisms” を参照されたい。
- 7 スー・ブルーリーが *The Women and Men of 1926* の中で、南ウェールズでのゼネラル・ストライキにおける「スープキッチン」の重要な役割について述べている。当時、食糧難を乗り切るために南ウェールズの炭鉱地域に多くの「スープキッチン」が設営された。家族の食に責任を負っていたのは女性たちであり、家族のために「スープキッチン」で女性たちが働くようになった。このような女性たちにとって、「スープキッチン」が自らの役割と新たなアイデンティティを見出すことができる公共の場となったことをブルーリーは明らかにしている。ゼネラル・ストライキ後の数か月間にわたるロックアウトを支えたのは、この “communal eating” に拠るところが大きいと言えよう。奇しくも、ゼネラル・ストライキによりこの地域の女性たちは自分たちが持つ力を認識し、変化の機会を得ることとなる。英国の炭鉱コミュニティは地域によってそれぞれ異なり、独自の特徴を持つ。従って、南ウェールズで「スープキッチン」が果たした役割を他の炭鉱地域にそのまま当てはめることはできない。しかしながら、「スープキッチン」はどの炭鉱地域でも女性達の力に支えられていたことは確かであり、『クラッシュ』はまさに、ストライキによる困窮を連帯により乗り越えようとした労働者階級の女性達の生き様を「内側から」描いた稀有な小説である。
- 8 ウェンディ・パーキンスは “Women on the Streets: Gender and Mobility in *The Convert and Clash*” で、ジョーンの “mobility” に焦点を当てている。パーキンスは、国内を縦横無尽に絶え間なく駆け回るジョーンの “mobility” は、『クラッシュ』のような政治的な小説において、ヒロインがその政治的目的を達成するために必要なものであると指摘する。そして、この “mobility”こそが、“class, gender, politics and region” が互いに交錯し衝突する空間を、完璧でな

いにせよ、互いに結び付け、繋ぐものであると論じている。

- 9 ジェレミー・ホーソンは“Lawrence and working-class fiction”で、特にロレンスの小説で描かれる労働者階級の食事について次のように述べている——“Throughout Lawrence’s fiction, certain sorts of food, particular eating rituals, serve as tokens of the peculiar collective intimacy of the working-class meal.” (72, 下線は引用者による)
- 10 武藤を参照されたい。拙論“Narrative Technique in Three Versions of D. H. Lawrence’s Chatterley Novels” (*The Tsuda Review*, 45, 2000: 23-70) においては、*Lady Chatterley* novels の3つのヴァージョンにおいて、イデオロギーと語りがどのように絡んでいるのかを分析した。この分析から、改変を重ねるにつれ、階級問題がより複雑になっていくことが明らかになった。
- 11 *The Rise of Socialist Fiction 1880-1914* の“The strike novel in the 1890s”において、グスタフ・クラウスは社会主義小説の系譜について次のように述べている——“Thus it is in the 1890s that the treatment of the strike is final wrenched from the hands of middle-class novelist, whose domain it had been since early Victorian times, and given a distinct social slant. Strikes and lock-outs, while remaining ‘exceptional moments’ of working-class life, would henceforth be depicted not only as occasions of distress and tragedy (and no longer as acts of destruction and self-destruction), but also as ways of crystallizing class consciousness and testing the values of humanity and solidarity, and thereby furthering the working-class cause. As such the strike issue has entered twentieth-century socialist fiction as a recurring theme and a central concern.” (94, 下線は引用者による)。
- 12 ウィルキンソンが失業者 200 人を率いて共にイングランド北東部のジャロウからロンドンまでの 300 マイルをデモ行進した 1936 年の「ジャロウの飢餓行進 (The Jarrow Crusade)」から 80 年以上の時間が過ぎたが、2017 年に出版された *Long Road from Jarrow: A journey through Britain then and now* において、著者のスチュワート・マッコニーは、1930 年代と現在の英国には類似点があり、ウィルキンソンの政治家としての問題意識は現代に通じると指摘している。同書について、レイチェル・リーヴスはその書評の中で、

“Maconie’s book is not only a heartfelt tribute to Wilkinson and the marchers, but a reaffirmation of the role of the personal within the political, and a rallying call for anyone stirred by the story of Jarrow” と述べている。
(*The Guardian*. <https://www.theguardian.com/books/2017/jul/24/stuart-maconie-long-road-from-jarrow-journey-britain-then-now-review>)

- 13 ローカル・ライターとしてのロレンスが作品を通してその形成に貢献した労働者階級の文化は次世代に、例えば、一つの例としてノッティンガム出身のアラン・シリトーに引き継がれた。ロレンスという大きな存在から、自分も身近なミッドランズと労働者の日常をテーマとして小説が書けると確信を得たシリトーは (Preston 281), 『土曜の夜と日曜の朝』(1958)などを執筆した。1960年代には彼の作品が映画化され、ほかの「労働者階級もの」小説などと共に労働者階級のイメージを大きく変えていったことは周知の通りである。1950年代の終わりから1960年代のはじめにかけてイギリスで起きた「文化の革命」についてはセリーナ・トッドの『ザ・ピープル——イギリス労働者階級の盛衰』第11章を参照されたい。

引用文献

- Ayers, David. *English Literature of the 1920s*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1999. Print.
- Beers, Laura. *Red Ellen: The Life of Ellen Wilkinson, Socialist, Feminist, Internationalist*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 2016. Print.
- Bruley, Sue. *The Women and Men of 1926: A Gender and Social History of the General Strike and Miners’ Lockout in South Wales*. Cardiff: U of Wales P, 2010. Print.
- Ferrall, Charles and Dougal McNeill. *Writing the 1926 General Strike: Literature, Culture, Politics*. Cambridge UP, 2015. Print.
- Flint, Tate. “Virginia Woolf and the General Strike.” *Essay in Criticism*, 36, 1986: 319-334. Web. 15 September 2012.
- Fordham, John. “Working-Class Fiction Across the Century.” *The Cambridge*

- Companion to the Twentieth English Novel* Ed. Robert L. Caserio. Cambridge: Cambridge UP, 2009. Print.
- Haywood, Ian and Maroula Joannou. Introduction. *Clash*, by Elle Wilkinson, Nottingham: Trent Editions, 2004. vii-xxv. Print.
- Hawthorn, Jeremy, ed. *The British Working Class Novel in the Twentieth Century*. London: Edward Arnold, 1984. Print.
- . ‘D. H. Lawrence and Working-class Fiction.’ *Rethinking Lawrence*. Ed. Keith Brown. Milton Keynes: Open UP, 1990. Print.
- . ‘Miners and the Novel: From Bourgeois to Proletarian Fiction.’ *The British Working Class Novel in the Twentieth Century*. Ed. Jeremy Hawthorn. London: Edward Arnold, 1984. Print.
- Klaus, H. Gustav. *The Rise of Socialist Fiction 1880-1914*. Brighton: Harvester Press, 1982. Print.
- Lawrence, D. H. *Lady Chatterley’s Lover*. 1928. Ed. Michael Squire. Cambridge: Cambridge UP, 1993. Print.
- . *The First and Second Lady Chatterley Novels*. Ed. Dieter Mehl and Christa Jansohn. Cambridge: Cambridge UP, 2001. Print.
- . *The Letters of D. H. Lawrence: Volume V: March 1924-March 1927*. Ed. James T. Boulton and Lindeth Vasey. Cambridge: Cambridge UP, 1989. Print.
- Maconie, Stuart. *Long Road from Jarrow: A Journey through Britain Then and Now*. London: Ebury Press, 2017. Print.
- Nearing, Scott and Ellen Wilkinson. *The British General Strike: An Economic Interrelation of Its Background and Its Significance*. New York: Vanguard Press, 1926. Print.
- Parkins, Wendy. “Women on the Streets: Gender and Mobility in *The Convert* and *Clash*.” *AUMLA: Journal of the Australasian Universities Modern Language Association*. 108, Nov. 2007: 65-9. Web. 20 November 2017.
- Perry, Matt. ‘*Red Ellen*’ *Wilkinson: Her Ideas, Movements and World*. Manchester UP, 2014. Print.
- Preston, Peter. *Working with Lawrence: Texts, Places, Contexts*. Nottingham:

- Critical, Cultural and Communications Press in association with the D. H. Lawrence Research Centre, U of Nottingham, 2011. Print.
- R. W. Postgate, Ellen Wilkinson and J. F. Horrabin. *A workers' history of the Great Strike*. London: The Plebs League, 1927. Print.
- Shiach, Morag. *Modernism, Labour and Selfhood in British Literature and Culture 1890-1930*. Cambridge UP, 2004. Print.
- Wilkinson, Ellen. *Clash*. 1929. Nottingham: Trent Editions, 2004. Print.
- . Introduction. *The British General Strike: An Economic Interpretation of Its Background and Its Significance*. New York: Vanguard Press, 1926. Print.
- Williams, Raymond. *The English Novel from Dickens to Lawrence*. London: Chatto & Windus, 1970. Print.
- トッド, セリーナ. 『ザ・ピープル——イギリス労働者階級の盛衰』 近藤康裕訳, みすず書房, 2016.
- 武藤浩史. 「『チャタリー卿夫人の恋人』と二つのオーラリティー——ロレンスと現代メディアとモダニズム」 日本ロレンス協会編『D. H. ロレンスと現代』 国書刊行会, 1995, 45-55.
- . 「『チャタリー卿夫人の恋人』の中の声たち——ラジオ, 方言, フィロロジー」 荒木正純, 倉持三郎, 立石弘道編『D. H. ロレンスと新理論』 国書刊行会, 1999, 235-251.

特集 2

情動・共感・D. H. Lawrence とその周辺

情動，モダニティ，不気味なもの
—— D・H・ロレンスの反心理学をめぐる覚書 ——

遠藤 不比人

I

D・H・ロレンスの『虹』第15章「恍惚の苦味 (The Bitterness of Ecstasy)」においてアーシュラが大学の研究室で顕微鏡を覗きこむとき，そこに広がる世界には名状し難い或る情動的強度が漲る．これを「情動的」と呼ぶことに本稿の議論が凝縮されている．以下，それについて論じてみたい．

たとえば，顕微鏡が映し出すこの映像を称して「科学の神秘」などと口走ってしまえば，それはもはや文学を語るべき語彙ではあるまい．だが一方で，名状し難いという同様に安易な表現を使わざるを得ないのは，それを感嘆，感動，驚愕と形容しても所詮は「科学の神秘」と同断の知的かつ感性の貧困を露わにするばかりであるからだ．ロレンスの読者であれば承知のように，この場面の背景にはアーシュラと大学の物理学者たるフランクストウン博士との論争じみた意見の相違があった．顕微鏡の光学的装置によって拡大されたその世界にあって，アーシュラが焦点を定める対象は「限らない光の中で影のようにぼんやりとたゆたう植虫類」であるが，それを凝視する彼女が想起するのは，博士の科学者たる断言，つまりは「生命ゆえになにか特別な神秘があるなんて，意味がわからない」といった科学者にしばしば帰せられる唯物論的世界観である（ちなみにこの博士があえて女性と設定されていること，その名前が日本語の語感であえて直訳すれば「率直なる石頭」とでもいう含意を帯びていることは別途解釈の余地があるかもしれない）．

博士の冷笑じみた陳述が，顕微鏡に見入るアーシュラの脳裏に再現される．

それを電気のように理解しているわけではないけど、といってそれがなか特別なもの、宇宙のほかのあらゆるものとは種類が違うと言うことはできないわ。あなたはそう思うの？ 生命は、物理学的かつ化学的作用の複合物、すでに科学において周知の作用と同じ類の複雑な作用であるのかもしれないのではないかしら、生命という特別な秩序があると想像すべきだなんて、私にはわけがわからない、生命だけ特別だなんて。(491頁)

アーシュラと博士との対話は「あやふやで、不確かで、物足りない感じ」で終わったのであるが、その余韻を意識に残したアーシュラにはあるモダニズムのエピファニーと呼んでも差し支えない啓示が訪れるかのようである。それは「突如として、この世界がこれまでと違った輝きを見せて、そこには強烈な光が宿り、それはまるで顕微鏡のなかの細胞核のようであった」(491頁)といった仕儀となる。この箇所はテキスト全体にあって異色の光景を示しながらも、ある重要な意味において、作品の主題にとって本質的かつ典型的な要素を包含している。というのは、この『虹』に限らずその連作となっている『恋する女たち』にしても、登場人物の心理や、それが強烈に投影ないし反映した風景に宿る強度が、近代文学を語る際に通常採用される語彙に還元できないということ、むしろその非還元性にこそロレンスの文学言語の特異性がある、という点がここで問題となるからである。といいながらも、ここで留意すべきは、彼の作品が近代文学の言語からはるかに逸脱した異様で異質な光景と心理を描くことに腐心しているわけでもないという点である(ここでロレンスの原始主義、生命主義を無造作に持ち出して彼の「反近代主義」という紋切り型を繰り返すとすれば、先ほどの「科学の神秘」と類似した知的水準と見なされる覚悟が必要だろう)。むしろ、ここで見るべきことは、凡庸でごく日常的なものの中にこそロレンス(=アーシュラ)の視線が集中し、そこにおいてアーシュラが遭遇するような名状し難いものが視界を満たすことになる、という点である。それはどういうことなのだろうか。

ここであらためて確認すべきは、アーシュラの視線の先にあるのが光学という近代的技術が可能にする光景であるという事実であろう。それを前提に

引用箇所を修辞学的に分析すれば、この光学的な宇宙は定義上「光」で満ち溢れているのだが、そこに揺曳する「影」が同様に重要な意味を帯びている、ということが分かる。言ってみるのならば、この光景あるいはそこに満ちる「光」は近代啓蒙科学(enlightenment)の隠喩と読みことができ、その啓蒙的な光が初めて見出すものが(逆説的な言い方になるが)それが見出すことができない「影」と化す、という論点をここで獲得できるのではないか。博士と学生たるアーシュラの関心の対象を、単純かつ純粹に科学の用語でいえば「食虫類」になるのだが、それは近代光学が操作、拡大、増幅する「限らない光の中で影のように」映し出されることで、名状し難い「情動性」を湛えることになる。では、なぜそれを「情動」と呼ぶのか？

II

本協会編集の論集『21世紀のD・H・ロレンス』に寄稿した拙稿「情動化／攪乱される有機体論——D・H・ロレンスの無意識と反心理学」にしても、それを改稿したテキストが第1章として収録された拙著『情動とモダニティ——英米文学／精神分析／批評理論』においても、ロレンスの「反心理学」とは単なる近代心理学の否定ではなく、それよりもはるかに精密かつ過激な言語的な介入と呼ぶべきテキスト性のことであった。ロレンスがその心理学的な言説において採用する鍵語たる「無意識(the unconscious)」とは、ドイツ・ロマン主義からフロイトの精神分析に至る思想的な内容を包含しながらも、その内部からの過剰な逸脱と表すべきある力を指し示している。近代心理学史にあって(ドイツ語圏においてはその淵源はドイツ・ロマン主義にある)最も過激な批判(批評)的な理論と通常見なされるフロイトの理論においても時に制度化され凡庸化されもする「無意識」なる概念の根源的な可能性を露出するのが、ロレンスの反心理学であった。その営為にあってロレンスはthe unconsciousと銜学的な英語に翻訳され必然的に英語圏の心理学によっても脱色されてしまったその根源に遡行すべく彼は、あえてドイツ語の原義を喚起しているかのようである。もちろん、その原語はdas Unbewussteつまりは「知り得ぬもの(the unknowable)」ということこそを、ロレンスは問題にする。近代心理学という知がそれを分析、理論化、言説化する過程において、そこ

に逆説的に、分析不可能、理論化不可能、言説化不能なものとして露わになるものこそが、ロレンスの言う「無意識＝知り得ぬもの」にはかならない。これを前提にロレンスの反心理学は、以下のような逆説の論理、目眩く超越論的なパラドクスと化していた。知り得ぬものにこそ「命」は宿る、それを知ることはその生命の殺害を意味する、心理学に力動的な命が宿るとすれば、それを知り得ぬという否定性にのみそれは躍動する、しかもその知り得ぬものを経験するという不可能性にのみ「無意識」の強度は賭けられている。これがロレンスの反心理学の否定性の力であり、彼自身それを「情動＝affect」の強度と呼んでいた。

ロレンスにおけるこの情動的な無意識の力動的な生命を、素朴な水準で「原始主義（primitivism）」などに見なしてはしてはいけない。それはむしろ近代心理学がその理論の只中に宿してしまう否定性をめぐる不可能な経験論（経験主義それ自体が近代的言説であることは言うまでもない）と呼ぶべき言語的な強度の謂であろう。

そしてそれはあのアーシュラの視線を捉えて「突如として、この世界がこれまでと違った輝きを見せて、そこには強烈な光が宿り、それはまるで顕微鏡のなかの細胞核のようであった」と彼女に感嘆せしめた光学的な小宇宙、つまりは「限らない光の中で影のようにほんやりとたゆたう植虫類」と、ロレンスの反心理学は、その根源において通底しあっているかのようだ。近代的な啓蒙の光がそれを解明しつつも、それゆえにこそそこには解明できぬもの（影）がその内部の外部として宿るということ、私たちの議論は『虹』のあの細部をこのように文脈化する。

III

そのような視点からロレンスにおける「近代」ということを再考してみたい。それはある意味では過激極まりない近代主義である。近代的な言語をその極限にまで徹底することによってその内側にそれを否定する強度を洞察することが彼の逆説的かつ弁証法的な近代主義と言っても良い。近代の極限の中にこそ究極の反近代が露わになる。最も近代的な反近代。このような背理においてロレンスの世に言う原始主義、生命主義を再読すべきではないか、その

ためにはあの『虹』におけるアーシュラの体験は特権的なものとなる。

これは『政治的無意識』においてコンラッドを分析したフレドリック・ジェイムソンの読解を想起させる。彼はモダニズム言語の最重要な戦略として、認識対象たる外界をことごとく視覚的印象へと還元、溶解し去る表象的な欲望を指摘し、それを「モダニズムの印象主義的戦略」と呼んだことはよく知られている（近代的知の特権的な知覚は視覚である）。しかしさらに重要なのは、彼がその弁証法的否定性として理論化する「審美化」という言語的な力学である。これは過剰な視覚的印象を生産した美的テキストがその果てに自らのイデオロギー的なレジスターでは説明のつかぬ美的強度をその内部に生み出してしまう事態を指す。コンラッドは、たとえば、『ロード・ジム』や『ノストローモ』にあって徹底的に視覚的な映像として強烈な光学的映像たる海の表象を生産しながらも、ときにその審美性とイデオロギー性に包摂できぬ知覚的力をもその果てに漲らせてしまう。それは聴覚的映像であり、さらにその先には非聴覚性（沈黙）が過剰なる空隙としてテキストの言語に穿たれる。

IV

この議論をさらに一般的な歴史的文脈に置いてみよう。ここで私たちはフロイトの言う「不気味なもの（das Unheimliche）」なる概念を得る。この概念をめぐる良書の一つであるニコラス・ロイルの『不気味なもの（*The Uncanny*）』を参照してみたい。彼はフロイトが1919年に提出したこの概念を、近代の言説史に再文脈化する。彼の所論のポイントは、啓蒙以前の神学的な世界観にあっては、単に神の創造物とされ（その最たる例は「生命」に相違ない）、その定義上人知の及ばぬと見なされたものが、近代の啓蒙の「光」に晒せるや、そこには従来は見てはならぬ、あるいは見えるはずのないものが、未曾有のあり方で露出することになる、かかる歴史的な外傷体験にある。彼の言ではこういう事態となる——「19世紀の前半にあっては、キリスト教的な神秘の理解を含めて、その範囲内に包摂されていたはずの、秘められて秘匿され続けるべきものが奇異なるものとして出現し始める」（21頁）。本来はそこにあってはいけないもの、あるはずがないものが、そこになに憚ることなく露出すること、あるいは抑圧されているべきものが、露わなまでに回帰

すること、つまりは、見たことがない (unheimlich) ものと見たことがある (heimlich) ものの決定不能性を定義とするフロイトの「不気味なもの」が問題となる。つまり、この歴史的かつ精神分析的な事態にあって、啓蒙理性の光が、それ以前には不可知かつ不可視のものを不気味に（さらに依然として不可知なものとして）露出するという外傷的な体験がここで含意されている。これは、啓蒙的な知（光）が露出しながらも、その知が知り得ぬもの（影）を露呈することを意味する。それは、たとえば、近代科学が光学的に眼差す「生命」の不気味な存在（経験）論の場でもある。

これをロレンスが介入する近代心理学の脈絡に置いてみれば、彼のいう「無意識」の情動的な「生命」とそれが等価であることが合点される。ここで、私たちは、近代、不気味、情動、という歴史的かつ精神分析的な視点を得る。

V

ここで冒頭のアーシュラが幻惑される顕微鏡のなかの小宇宙を想起しよう。ここで近代光学と生物学の知（啓蒙的光）によって現出した生命（食虫類の細胞核）は、前近代的な知覚と知にあっては不可知で不可視のものであったが、ここではそれはこれ以上ない露わな姿を剥き出しにしながら、「限らない光の中で影のようにぼんやりとたゆたう」不可知なものとな化している。本来は不可視のものが眩いまでに可視化されることで不気味なまでに再不可知化されること。この不気味な経験論が惹起する心理学的な様態を表象する語彙は、もし私たちがあくまでロレンスの反心理学に忠実であるなら、それは「情動」ということにしかない。

引用文献

Lawrence, D. H. *The Rainbow*. Ed. John Worthen. Penguin, 1981.

Royle, Nicholas. *The Uncanny*. Manchester UP, 2003.

書 評

Takeo Iida, *D. H. Lawrence as Anti-rationalist:
Mysticism, Animism and Cosmic Life in His Works*
(Melrose Books, 2014)

本書を構成する 12 章はすでに発表された諸論考が基になっており、それらがもともと掲載されたのは *The D. H. Lawrence Review* や *Études Lawrenciennes* 等海外の雑誌・本がほとんどである。1980 年代に発表された論文も含まれているので、飯田武郎氏の存在は以前から、国内外のロレンス研究者の間で広く知られていたと言えるだろう。実際マイケル・ベルがいち早く *The Journal of D. H. Lawrence Studies* 3.2 (2013) で書評したほか（ベル氏が対象としたのはイギリスに先駆けて日本の青山ライフ出版から刊行された 2012 年版）、*The Year's Work in English Studies* 95.1 (2016) の D. H. ロレンスの項目冒頭で氏は “Two lifelong D. H. Lawrence scholars, Judith Ruderman and Takeo Iida, published collections of essays in 2014” と紹介され、本書がルーダーマンの *Race and Identity in D. H. Lawrence: Indians, Gypsies, and Jews* とともに取り上げられている。最近ではキース・クッシュマンによる書評が *The D. H. Lawrence Review* 41.1 (2016) に掲載された。

本書の目的は、タイトルに明示されているように、ロレンス作品における神秘主義、アニミズム、そして宇宙の生命感の要素に注目することにより、反合理主義者ないし反理性主義者としてのロレンス像を打ち立てることである。ロレンスの擁護する神秘的・アニミズム的経験やセクシュアリティは、現代において支配的な物質主義や合理主義の対極にあり、こうした現代の傾向を批判するという意味で、ロレンスは “anti-rationalist” であるとされるが、タイトルから安易に想像されるほど論述は単純な二項対立に基づいていない。本書によれば、ロレンスは不合理に原始主義やアニマリズムに訴えようとしたわけではなく、あくまで理性と直感の均衡をこそ求めたからである。

以下、この点を踏まえ、本書の構成・各章の内容を概観する。最初の三つの章は、神秘主義的詩人ロレンスを前面に出し、続く第4章から第10章は、アニミズムの作家ロレンスを提示している。第9章で導入された比較文化・文明的視座は、セクシュアリティや結婚の観点に加わった第10章でその比較対象が与謝野晶子に絞られ、第11章の伊藤整とロレンスの比較論考、浮世絵を扱った第12章の議論へと接続・展開されている。

第1章（“On a Topos Called the Sun Shining at Midnight in D. H. Lawrence’s Poetry”）は、“the sun shining at midnight”という洋の東西を問わない普遍的なトポスを軸とする論考である。まず、このトポスはロレンスの *The Plumed Serpent* (1926) で提示された“the dark sun”のようなイメージも包含し、その源泉はメキシコ神話のみならずヨーロッパの文化的伝統にも存することが指摘される。その上で、その系譜をロレンスとの関連により、*The Ladybird* (1923) が示唆するバラ十字団の思想からプロテスタントの賛美歌、カトリック神秘主義、古代ギリシャ哲学、17世紀イギリス形而上詩を経由して、近代ドイツ哲学（ニーチェ）まで辿っている。

第2章（“Lawrence’s ‘The Ship of Death’ and Other Poems in *The Last Poems Notebook*”）は主にロレンスの‘The Ship of Death’を扱い、以下のように論じる。この詩はロレンスの死の直前に書かれたこともあり、従来死後の世界についてであると解釈されてきた。しかし、同時に、この詩が扱っているのは「精神の死」であり、来世ではなく現世における肉体の復活である。‘The Ship of Death’で提示された神秘的な死と再生は、第1章でも言及したカトリック神秘主義の伝統に連なるものであり、具体的にロレンスとの類似性が認められるのは、14世紀イングランドのキリスト教神秘家・*The Cloud of Unknowing*の無名の作者や、16世紀スペインのキリスト教神秘家・十字架のヨハネである。

飯田氏によれば、ロレンスの神秘主義的な詩における無意識や暗闇のイメージ、また魂の死と再生といったテーマに影響を及ぼした著作として、これまでジョン・バーネットの *Early Greek Philosophy* (1892) がしばしば取り上げられてきた一方、W・R・イングの *Christian Mysticism* (1899) は注目さ

れてこなかった。第3章(“D. H. Lawrence: The Bible and the Mystics”)は、聖ポール寺院首席司祭であったイングのこの著作を参照しつつ、ロレンスの後期の詩、とりわけ‘The Heart of Man’や‘Terra Incognita’, ‘Death is not Evil, Evil is Mechanical’, ‘The Ship of Death’といった作品で表現されたロレンスの神秘的経験は、ギリシャ神秘主義のみならず、聖書、ならびにキリスト教神秘主義の伝統に根ざしたものであることを説く。

第4章(“Lawrence’s Pagan Gods and Christianity”)は六つの小説を取り上げ、それぞれの登場人物と異教の神々の関係を検討している。パン神や木の妖精、地霊は、キリスト教との関連で最初に *The White Peacock* (1911) で登場し、パン神がより一層重要な役割を主人公ルウに対して担うのが *St. Mawr* (1925) である。*Kangaroo* (1923) と *The Plumed Serpent* (1926) における非ヨーロッパの神々は、サマーズやケイトを不安にし続けたが、*Lady Chatterley’s Lover* (1928) と *The Escaped Cock* (1929) において、キリスト教と異教の和解が試みられた。このキリスト教と異教の均衡のヴィジョンは、*The White Peacock* のアナブルにおいて不完全な形で提示され、最終的な表現は *Lady Chatterley’s Lover* と *The Escaped Cock* において見られる。以上が論旨である。

第5章(“Nature Deities: Reawakening Blood Consciousness in the Europeans”)は、ヨーロッパの現代人による「知の意識」偏重を是正するために、「血の意識」を呼び起こすべくロレンスが招喚したのが自然神でありアニミズム的知覚であることを力説する。合わせて、自然神や「血の意識」が強調されたのは、*Fantasia of the Unconscious* (1922) や *Kangaroo* (1923), *Birds, Beasts and Flowers* (1923) 等 1920 年代前半諸ジャンルの作品であるが、その前後の時期の作品にも幅広く認められることが指摘される。

第6章(“The World of Animism in Contrast to Christianity in *St. Mawr*”)は、*St. Mawr* (1925) を詳しく取り上げる。このロレンスの中編小説において小説の題名の雄馬セント・モアが途中で退場してしまい、代わりにアメリカ合衆国南西部における自然に焦点が当てられることから、これまで前半と後半のあいだに有機的連関がないことを否定的に捉える論者も多かった。しかし、飯田氏は、パン神としてのセント・モアと「土地の霊」を宿す合衆国

南西部は、ともに異教の神々の世界観あるいはアニミズムの世界観を表わし、硬直したキリスト教的世界観に対置される形で作品の統一性を損なわず一貫して提示されている、と主張する。

第7章（“*St. Mawr, The Escaped Cock and Child of the Western Isles: The Revival of an Animistic World View in the Modern World*”）は、*St. Mawr* で企図された現代世界におけるアニミズム的世界観の復活というテーマが、*The Escaped Cock* (1929) からロザリー・K・フライの *Child of the Western Isles* (1957) へと受け継がれていることを説明する。

第8章（“*Lawrence's Pan Worship and Green Man Image*”）は、ロレンスの絵画 ‘Red Willow Trees’ (1927) に「グリーン・マン」(Green Man) のイメージが描き込まれていると指摘し、その特徴をロレンスの文学作品におけるパン崇拝ないし自然崇拝と関連づけることにより、明らかにしている。グリーン・マンとは、ヨーロッパの樹木崇拝の伝統から生まれた樹木や植物と人間の一体性を表わすイメージであり、ロレンスの作品であれば最初の長編小説 *The White Peacock* (1911) におけるパンのような森番アナブルにその萌芽を見出すことができる。その後、ジェイムズ・フレイザーの著作を通して太古の意識等への理解を深めたロレンスは、*Lady Chatterley's Lover* (1928) においてパンの力を具現する森番メラーズを典型的なグリーン・マンとして登場させるに至る。つまり、‘Red Willow Trees’ は、裸の男女がパンを示唆するヤギと踊る姿を描いた ‘Dance Sketch’ (1928) 同様、*Lady Chatterley's Lover* における楽園のような場面を絵により表現したものである、と結論づけられる。

第9章（“*The Universality of Lawrence's Animistic Vision*”）は、ロレンスのアニミズム的世界観を日本やアフリカ、古代ヨーロッパにおけるアニミズム的世界観と比べることにより、その普遍性を例証している。ロレンス作品の中から鹿や蛇、狐、樹木といった生物の表象がジャンルを超えて取り上げられ（*The Fox*, ‘A Doe at Evening’, ‘Snake’, *Fantasia of the Unconscious*, ‘Pan in America’），日本の伝説や神話、ブッシュマンのフォークロア、ヨーロッパの民話やバラッドと比較検討の上、共通性が示される。

第10章（“*D. H. Lawrence and Akiko Yosano: Contemporary Poets of Human Touch and Cosmic Life*”）は、面識や著作を通しての影響関係はない

ものの、同時代人である日本の作家・与謝野晶子（1878-1942）とロレンスについての論考である。ロレンス *Look! We Have Come Through* (1917) 等、与謝野晶子『みだれ髪』（1901）等が比較の対象となっている。著者によれば、ロレンスは小説家、与謝野晶子は歌人として見られることが多いというような違いはあるが、両者には次の三つの重要な共通点が存在する。（1）それぞれ 20 世紀初期のイギリスと日本においてセクシュアリティの重要さをその抑圧に抗しつつ主唱、（2）結婚と家族を擁護、（3）ともに太陽崇拝者、かつ樹木崇拝者であり、宇宙の生気存在を信じている。

第11章（“D. H. Lawrence and Sei Ito: Characteristics of the Sexual Scenes in Their Novels”）は、ロレンスの日本への導入に一役買った伊藤整の『汎濫』（1956-8）、『発掘』（1962-4）、『変容』（1967-8）をロレンスの *Lady Chatterley's Lover* と合わせて検討し、次のように主張する。柴田多賀治が『ジョイス・ロレンス・伊藤整』（1991）で初めて三人の小説家の比較検討を行ないその類似性を指摘したが、根本的な相違に焦点が当てられることはなかった。しかしながら、ロレンスと伊藤では、それぞれの結婚観と自然観において大きな違いが認められる。ロレンスが基本的にキリスト教的道徳に基づき一人の男性と一人の女性との精神的・肉体的にバランスのとれた結婚を重視するのに対し、伊藤は『源氏物語』の流れを汲む日本的美学に基づき夫婦間義務に拘束されない感情の流れを重視する。また、ロレンスの全小説において登場人物たちの内的変化・治癒の過程で自然が根源的な役割を果たすのに対し、伊藤の小説においては自然にそのように重要な意義が与えられていない。

第12章（“A Response to Keith Cushman's 'Lawrence's Dust-Jackets: Addenda and Corrigendum'”）は、歌川広重の錦絵「深川万年橋」（名所江戸百景）をそのまま使っていると考えられてきた *Tortoises*（ニューヨーク・セルツァー、1921 年）のブックカバーをめぐる詳細な検証である。このブックカバーに関してはロレンス自身が手紙で “I understood it was a complete print, yet the view is surely Hiroshige's” と言及し、キース・クッシュマンをはじめとする研究者もそのように信じてきた。しかしながら、飯田氏はブックカバーに使われた画と広重による画の違いを指摘し、前者は作者不明の模倣画であると結論する。加えて、これまで正確に理解されてこなかった絵の

構図や亀が置かれている状況等について歴史的背景を踏まえ解説を行なっている。

以上のように、長い年月の成果をまとめた本書は、ときに大胆な抽象化を敢行しつつ神秘や自然といった大きなテーマを論じ、主に海外の読者に向けて日本からのロレンス像を発信している。

ロレンスを照らし出すそのジャンル横断的かつ複眼的なアプローチが、本書の特徴の一つであろう。飯田氏には単著『D. H. ロレンスの詩——「闇」と光をめぐる』(1986年)や編著書『D. H. ロレンス——詩と自然』(2003)があるように、氏は詩の分野でロレンス研究を牽引されてきたという印象をお持ちの向きも多いだろう。しかし、本書はロレンスの詩のみならず小説や評論、さらには絵画までもジャンル横断的に扱っている。加えて、本書後半で採用された比較文学・文化のアプローチにより広く複眼的な視野の中でロレンスが照射される。たとえば、第10章でジェンダー横断的に比較されるロレンスと与謝野晶子との間に直接的な影響関係はない。それゆえにかえってその類似性の意義が際立つ。一方、第11章で取り上げられる伊藤整はロレンスからの影響が顕著である。それゆえにかえって読者はしぜんに、比較文学的考察から両者の差異の文化的意義をめぐる考察へと誘導される。このように本書は、文学的ジャンルのみならず、洋の東西、ジェンダーを問わない形で論述を展開している。

もう一つの特徴は、本書が二項対立の提示により生じがちな安易な階層性を極力排そうとしていることである。冒頭で言及したように、“anti-rationalist”というロレンス像は、彼による理性の軽視を意味しない。同様に、著者によれば、ロレンスはキリスト教を否定し異教を称揚したわけではなく、両者の均衡をこそ目指したことになる。この二項対立止揚の図式の大胆さが改めてわかるのは、本書による *The Escaped Cock* の解釈をめぐり、冒頭で触れた書評においてマイケル・ベルが “it is a surprising way of understanding the fable” と記し、キース・クッシュマンが次のように反応するときである。 “Iida’s argument that ‘... he [Lawrence] sometimes tries to revitalize Christianity, too’ is less persuasive, especially when applied to *The Escaped Cock*, a

novella in which Lawrence surely seems to be repudiating Christianity”. これは一例であり、飯田氏が世界に向けて投げかけた様々な解釈は、新たな議論に開かれている。ご本人であれば『21世紀のD・H・ロレンス』（2015年）所収の飯田論文「ロレンスとシンマクス——現代と古代の異教擁護者」を英訳されて発信し、新たな論点を提示しつつクッシュマン氏に反論するだろうか。

2011年に出版された飯田氏の単著『D・H・ロレンス文学にみる生命感——自然、生命、神秘』は、本書が扱っていない作家もロレンスの比較対象としている。第1章のジョゼフ・コンラッド、第2章のE. M. フォースター、ラファディオ・ハーン、遠藤周作、第4章のメアリー・ウェブである。これらの日本語による論考が英訳され本書に組み込まれていたなら、より多くの比較の軸が世界的に提示され今後の議論の基点になったのでは、という思いを禁じえない。

2017年3月には飯田氏による翻訳書『メアリー・シーコール自伝——もう一人のナイチンゲールの闘い』が出版された。「訳者あとがき」によれば、「ロレンスの描く自立した女性について考える際、イギリスの女性史にも注意を払っていたところ」、このジャマイカ出身のクレオール医師・看護師の存在を知り、「シーコールは人種差別という偏見と闘い、ロレンスは猥褻作家という烙印をはられた偏見と闘いながら、それぞれが異なった分野で優れた業績を残したという点でも心打たれた」とのことである。与謝野晶子やメアリー・ウェブ同様、メアリー・シーコールに対する氏の注目に多くの読者が意表を突かれたのではないだろうか。今後もロレンスを軸としながら転回＝展開されるであろう飯田氏の比較文学・文化研究の営為から目が離せない。

（新井 英永）

John Beer, *D. H. Lawrence: Nature, Narrative, Art, Identity*
(Palgrave Macmillan, 2014)

本書の著者ジョン・ビア（1926 - ）は、ケンブリッジ大学名誉教授で、既出版物 18 本のうち、その 6 分の 5 以上が、ロマン主義の詩人や作品に関するものが多いので、彼をロマン主義研究者として思い出す読者も少なくないかもしれない。

本書は、ロレンスの人生の出来事をほぼ年代順にたどりながら、大学在学中に有機体である細胞の命の「二重の性質」に関心を持った作者が、それを人間存在の二重性に関連付けながら、それらをいかに作品のナラティブの中に反映させていったかを考察するものである。著者によれば、命の「二重の性質」とは、静かでゆっくりと育つ植物的成長（エネルギー）と活発に動き回る動物的活動（エネルギー）のことであり（「序論」から）、人間存在の二重性とは理性的意識（または霊性）と肉体・血の意識（または動物的本能）だろうと推察する。

本書は、序論の後、全 16 章及び付録から構成されているが、以下、各章で取り上げられる作品にも言及しつつ、本書の概略を辿ってみたい。

第 1～2 章：世紀の変わり目に成立した教育法により、科学的新思考の影響を受けた若者たちは、伝統的宗教に異議を唱え始めると同時に、それまであいまいだった自然理解のあり方についても議論が沸き起こる。ロレンスもこれらの影響を受け、伝統的キリスト教に矛盾を感じて新たな宗教を探す一方、自然を新たな芸術創造のための恰好の探求領域とみなし、有機体である命の二重の性質をナラティブの中にどう反映させていくかを考える。

第 3～5 章：母の死を経験したロレンスは、大学実験室で不死であるように見えた細胞を観察して、命は死で終わりではなく、安定的な植物的成長と活発に動き回るエネルギーとの相互交流の中で生き続けていくのだと認識する。以後、作品を書き続けていくなら、人間を死に飲み込む意識に抗して細胞の不死の可能性を信じようと考え、彼の新たな信念として「知性よりも賢い血・肉体への信仰」が表明される。ヨハネ福音書の冒頭を「はじめに肉体があった」と

書き直した彼にとって、世界は言葉からではなく有機体の諸要素の交錯から始まるのであり、「肉体」はそれ自体が神からの流出物であり、万物の中で最も神秘的な源となる。『息子と恋人』最後の場面で、ポールが死へ引かれる思いを振り切り、街の光へ向かって歩き出すのはこの信念ゆえである。

前作『侵入者』における有機的命のイメージラリーも、動物性及び植物性のそれである。シーグマンドは激しい肉体的動物性でヘレナを抱擁したが、彼女はそれを嫌い、彼との関係を霊的な関係に留め、彼の「獣性」を飼いならそうとする「夢見る女性」である。結果、「獣性」は発露を妨げられ、二人の関係は彼の死で破局を迎えるが、彼女の内には命を生み出す緑の芽が存在することが指摘されることで、再生の可能性が暗示される。

同世代の複数の女友達と交際しながら、性的欲求と芸術的探求の間で分裂していたロレンスの前に現われたフリーダは、すでに独・英の両国で複数の情事を経験済みの既婚女性である。ロレンスは、一時的であれ、彼女によって自己の分裂（人間存在の二重性）を克服できただけでなく、彼女を通じて（ハーディの地方性に似た）彼のイギリスの地方性を超え、ヨーロッパ小説の主流の伝統に自分の小説を位置付けることができるようになる。

第6～7章：フリーダとの生活を始めたロレンスは、命の二重の性質を十分に反映する象徴的表現を探す。『虹』の終わり近くに登場する馬は、彼女の恋人に向けられた、アーシュラの破壊的衝動を半ば投影し、彼女のこれまでの人生から彼女を解放する象徴である。彼女の肉体には（ポールのように）未来に向かう積極的前進を保障する血が循環しており、それが、「虹」という「血の意識」を含む美しく適切な象徴によって示されている。

次に、二組のカップルを軸により複雑な人間関係が描かれる『恋する女たち』では、「虹」は不十分な象徴と考えられ、有機体の命に関する事実（成長と腐敗との均衡）を反映するような、「生と腐敗は一つ」を示す象徴へと発展させられる。一方、アーシュラの中に花の美しさと内から輝き出す光を垣間見たバーキンは、人間は死で終りではなく、宇宙と人間との関係は不死であると実感し、以後、愛には、男根的なものを含む完全に肉体的な愛と、それとは異なる霊的な愛という、二種類の愛があると信じるようになる。細胞の観察や母の死の体験を通じて、人間性に関する狭い見方から解放された彼は、二

種類の愛の矛盾を抱え、以後、どちらにも絶対的忠誠を誓うことなく、両者の間で微妙な均衡を保たねばならなくなる。

第8～12章：ヨーロッパに希望を見いだせないロレンスは、自然と人間の内なる命とのかかわりを扱う、アメリカ古典文学の超絶主義に目を向け、ホイットマンの中に彼のテーマ（男女の真の関係と男性同士の関係）が継承されているのを発見するが、テーマの追求方法が機械的であると感じて失望し、行き詰まる。

大戦後、大戦前のように肯定的メッセージを持つ小説は書き難いと感じたロレンスは、次作『アーロンの杖』を出版するが、批評家から欠陥を指摘され否定的評価を受ける。しかし、肯定的メッセージを持つフィクション創造に全精力を傾けていた作者は、作者の分身リリィを通じて、（血の信仰を示唆する）「内奥の統合されたユニークな自己を……卵から鶏へと、鶏から唯一の不死鳥へと育てよ」というメッセージを打ち出す。ここに込められた意味は「誰しも聖なる個人であり、決して汚されてはならない」ということである。

より広いスケールで世界情勢の複雑さを把握しようとしたロレンスは、1920年代初期、ヨーロッパから、セイロンへ、次にオーストラリア大陸へ向かったが、そこには、彼が期待した西洋文明以前の原始状態はなく、再び失望する。一方、大陸の巨大な宇宙的自然の中で、個人がいかに卑小な存在かを思い知らされる。

南半球を後にしたロレンスは、南半球の自然、男と女の関係、有機的人間と宇宙全体の関係などをどう描くべきか考えながら、アジア、合衆国でも活路が見いだせず、原始民族が残っていると思われたニューメキシコに移り住む（1923年）。そこで彼は、「宇宙は科学によって征服されるべき物質的世界」と観る西洋の世界観とは全く異質の、「生・死を含んですべてのものを有機的に」観るアニミスティックな世界観を発見する。そして、キリスト教に代わる新たな宗教は、自然全体への深い理解に加え、「血の信仰」が基礎に据えられるべきだと考える。『ケツアルコアトル』の中でラモンがインディアンについて語る次の言葉は、そのことを物語る。「彼らの根っこは深いところにあり、……それは血であり、血が命の木を生み出す。人間の精神は、木の上に咲いては散る花に過ぎない」。

『羽麟の蛇』は、『ケツァルコアトル』と異なり、ケイトがシプリアーノの男性的要求を受け入れて結婚するかに見えるが、それは、彼女の理性を多少犠牲にしても「血の信仰」への意識が深められるべき、と作者が考えた可能性もある。しかし、実際は、彼女の心は揺れていて、そこには、作者自身の心の分裂の反映がある。すなわち、彼にとって、芸術的自己は、ケイト同様、絶えず人間と宇宙の関係を思い巡らす孤独を求めながら、現実的自己は、妻との結婚生活を持続させる必要も感じていて、作者の心の矛盾がケイトの心の揺れに関係している。読者は、彼女が今後どう行動するかについて、自分の解釈を迫られる。

第13章～14章：「血の意識」がたえず念頭にあったロレンスは、もし新たな宗教が、ますます複雑さを増す宇宙で機能不全となったキリスト教にとって代わるなら、それは、有機的生命の素晴らしさ（不死性）を基礎に据えたものであるべきと考えた。こうして、社会の束縛から解放された若い女性を主人公とし、読者に進むべき道を示す、優しさを中心とする小説が構想された。そこから、コニーを中心とする小説の三つの版が生まれる。

コニーは、植生の美しさに引き寄せられ、森番との交わりを通じて、今まで意識できなかった春の感覚が体内に蘇るのを感じる。コニーの覚醒には、森番の優しく力強い動物的エネルギーが不可欠であった。彼女が森番のエネルギーを受容して喜びを見出す点は、『羽麟の蛇』のケイトに比べ、注目に値する。なぜなら、ここではコニーが、他の状況では“いじめ”として拒絶したかもしれない官能を受け入れたからである。そして、コニーは、大衆はまだ花開くかもしれない成長の可能性を持っている、と希望を持つに至る。

新たな宗教を晩年になるまで模索したロレンスは、『死んだ男』において彼独自のキリスト教を創り出す。この物語では、唯一の究極的望みは、肉体において生きている喜び（性愛の喜びを含む）を発見するイエスが描かれる。これは、『アポカリプス』で言及されているように、子供時代に絶えず読み聞かせられたことで生じた、聖書に対する個人的反感もあって、今まで聖書は一貫して誤解されてきたという、ロレンスの考え方に基づいている。

第15章～16章：ロレンスの詩の特徴に関しては、自然に対する神話的解釈が自然理解の鍵だと考えた彼は、命がたえず死から生じる神秘に魅せられ、

ペルセポネ神話と春の花々の再生とを関連付け、生と死を季節の循環に伴う新たな結婚相手として語ることで、両者の関係についてのディレンマを解消した。結果、「ババリアのリンドウ」、「死の船」など、死を受け入れる人間と再生する宇宙的衝動についての詩的ナラティブが生み出された。

ロレンスの捉え難いアイデンティティは、自身で自覚していたが、陽気さと預言者的苦悩との間で引裂かれた二重性格にあり、内に籠る集中（収縮）と外に向かう暖かさ（拡張）との間の、完全な交錯の中に彼の全存在を見ることができる。更に、彼への理解を深めるためには、彼の「……絶対的な善や正義などない。すべてのものは変化し、変化さえ絶対ではない」の発言に見られる、「移ろいやすさ」に対する彼の認識も見落とせない。

付録：ロレンスのセクシュアリティに関しては、肛門性交らしい描写が複数作品にみられるが、同性愛的傾向に関しては、彼の敵対的発言もあるし、断定できない。一方、ファシズムに関しても、彼がドイツ人女性フリーダと結婚したという事実から疑念を生んだが、彼女は「ロレンスの血の信仰は、ナチのアーリア人理論と違い、彼に人を愛させ、憎ませないための生きた経験である」と主張して、ファシズム性を強く否定した。

以上、本書の概略を辿ってきて分かるように、大学の実験室で有機体である細胞の命の二重性に目覚めることから始まったロレンスの文学的人生は、母の死の体験を通じて、それを人間存在の二重性に関連付けつつ、人間を含む有機体の命は死によって終わるものではないとの認識から出発した。以後、彼の人生は、人間と自然・宇宙との関係を絶えず問い続けながら、若き日に自覚した分裂した自己を克服しようと、「肉体・血の意識」を基礎に、伝統的キリスト教に代わる新たな宗教を探すアイデンティティ模索の旅だった。

本書は、評者には難解な表現も多く、また、句読点やつづり字のミス、同一のパラグラフが複数回登場するなど、概して読み易い本ではなかったが、著者ピアの本書執筆の意図「本書は、ロレンス（の生）を駆り立てていた主な衝動は、いかに不安定であれ、彼自身の自立を維持しようとする強い思いだったことを示すことである」は、通読してみて、十分達成されていると感じた。

（青木 晴男）

Andrew Harrison, *The Life of D. H. Lawrence*
(Wiley Blackwell, 2016)

職業作家 (a professional writer) は執筆活動で生計を維持する。原稿は出版業者の媒介によって文学市場に流通する著作となり、その結果（あるいはそうなる契約で）執筆活動という作家の労働はお金になる。わたしたち文学研究者は、この単純な事実を忘れてしまいがちである。もしかしたら、「作品からテキストへ」というある時期以降の標語も、そうした忘却を正当化してくれていたのかもしれない。「作品」の「起源」としての「作者」の死を宣告し、「読者」の誕生とその「読者」によって編み上げられる「テキスト」を言祝ぐ。読むことは、もはや受け身の消費的な行為ではなく、積極的に生産的な行為となる。だが、そのような認識の転回は、物質的存在として著作＝「作品 (the work)」が生産され文学市場を流通する過程に注ぎ込まれた「労働 (work)」, しかも「作者」のものだけでない多種多様な「労働」を、不可視のものとしてしまったのではないだろうか。文学市場へと「作品」を送り出す職業作家という観点からは、いわゆるテキスト論以前の「作品」の「作者」とは異なった「作者」像が立ち現れてくるのではないか。ノッティンガム大学に研究拠点を構えるロレンス研究者 Andrew Harrison による評伝 *The Life of D. H. Lawrence* は、ロレンスが職業作家として自己を形成していった過程を丹念に追っていく。その意味で本書は、2009 年に出版された Howard Booth 編集の論集 *New D. H. Lawrence* (Manchester UP) の巻頭を飾った著者ハリソンの論文 “Dust-jackets, Blurbs and Forewords: The Marketing of *Sons and Lovers*” における議論の延長線上に位置づけられる。「作者」ロレンスの形成を、文学市場という文脈において考察する批評行為である。

・・・などと研究誌の書評という体裁にふさわしいであろう堅めの書き出しによって本書 *The Life of D. H. Lawrence* の「評伝 (critical biography)」としての批評的位置づけをしてみたが、これまでさほど熱心なロレンスの伝記や評伝の読者ではなかったわたしにとって、本書読後の素直な感想は、ロレンスってやけに社交的で交流を好み、まわりの人たちを巻き込み、その人た

ちの反応を楽しんで、面白い人生を送った人だったんだな、というものである。わたしはこれまでロレンスの著作をできるだけ世俗的地上的に読もうとしてきたつもりだが、ロレンス本人はまさに世俗の人だった。外の世界への好奇心に従って移動を続け、恋愛感情と友情による協力の境界線をうまいこと曖昧にして女性たちを（Jessie Chambers の場合のように）情報提供者あるいは潜在的読者として（言葉は悪いが）利用していたようにも思われる。そうした生活における「実験」と著作活動における「実験」はかなりの部分、地続きだったのだろう。彼の書簡からのフレーズが本書において彼の実際の生活の文脈に戻されて引用されると、その軽やかな生きた言葉の感覚がなおのこと引き立つと同時に、そこから見えてくるあのイギリス人らしい（ときに意地の悪い）ユーモアをもう少し彼の著作からも読み取らないといけないのではないか、わたしたちは真面目に重いメッセージを読み取ろう（重いメッセージに読み替えよう）としすぎていたのではないか。このような感想は、おそらく本書の文体によるところも大きいのだろうけれど、『チャタレー夫人の恋人』の近年の翻訳者たちがそれぞれ訳者あとがきで「ロレンスってパンク」とか「ロレンスってワル」とか呟くのもこういうことでもあったのかな、という気がしてくる。

さて研究誌の書評モードに戻ると、本書は、すでに 20 冊ほど出版されている“Blackwell Critical Biographies”の一冊である。ほかに 20 世紀イギリス文学の作家では、本書出版時点で Evelyn Waugh の巻が出ている。シリーズの編者 Claude Rawson の言葉によれば、シリーズ全体で共有されている「目的」は、「書物は特定の時代と場所を生きた人びとによって書かれている、という認識を再－確立する（re-establish）」ことである。そしてその「再－確立」は、「十分な調査による伝記的文脈を踏まえた、知的な批評を提供する実践的で説得力をもった厚みある論述」によって可能になるのだという。アンドリュース・ハリソンは本書の「序」を、ロレンスが 1927 年ごろにスコットランド詩人の Robert Burns の伝記を書こうとしていたことから始めている。この執筆の試みはこれまでのロレンス研究であまり注目されてこなかったと思うが、著者はこうした伝記的逸話と Catherine Carswell への書簡等から作家評伝に対するロレンスの姿勢を導き出し、ロレンスの作家人生についての「厚みある論述」

の始まりとしている。

本書の構成は、このような「序」に続いて時代順に第一部から第七部までとなっている。フリーダと出会って一緒にイギリスを離れる1912年までを扱った第一部“Literary Formation”。第一次世界大戦前のヨーロッパ体験を中心とした1914年までの第二部“UnEnglished”。第一次世界大戦中と終戦直後の経験をめぐる第三部“The Bitterness of the War and Its Aftermath”。戦後のイタリア生活を中心とした1922年までの第四部“Europe Again”。オーストラリアを経由してアメリカ大陸に渡った1925年までの第五部“New Worlds and Old Worlds”。ヨーロッパに戻ってきて故郷との行き来をふくむ第六部“Returning”。そして最期の時期、第七部の“Unfailing Courage”である。

本書を特徴づけるのは、上述したように、職業作家としてのロレンスの軌跡を追っている点である。ロレンスは芸術性という観点から創造的とみなされるべき作家なのは当然だが、同時に、「読者層 (readership)」を意識して、自分になにを求められているかを念頭に置き、執筆活動を続けた「職業」作家でもあった。著者ハリソンは、ロレンスがどのように同業のプロの助言者、編集者、エージェント、印刷業者たちと交渉しながら、「職業作家としてのキャリアを維持しようと苦闘していたか」(xx)について、とくに焦点を当てる。それはロレンス研究にこれまで足りなかったアプローチであると、本稿冒頭で挙げた2009年の論文でハリソンは言っていた。その論文“Dust-jackets, Blurbs and Forewords: The Marketing of *Sons and Lovers*”は次のような指摘で始まっていた。近年のモダニズム研究では、市場における作家の役割や、作家が文学の商業活動という経済的および専門的な背景と対立しながら相互に作用しあって文学的形成を遂げるプロセスに、ますます関心が集まってきている。それによってT. S. EliotやEzra Poundといったハイ・モダニズムの作家たちによる作品の捉え方が大きく変化した。ロレンスに関してはそのような批評的再評価の枠外に置かれたままだ。その理由はおそらく、ひとつにはロレンスがモダニズムと問題含みの関係性にあるためと、もうひとつはロレンス研究者たちがロレンスを商業的文脈のなかの職業作家として考察することに馴染んでいないため、ではなかろうか。このように指摘するハリソンは、ロレンスにとってブレイクスルーの著作と言える『息子と恋人』を取

り上げ、商品文化との交渉、著作活動の助言者たちへの信頼、『息子と恋人』の市場価値を上げるための工夫、といった側面に光を当てている。作家ロレンスの創造性は、このような需要と供給の文学経済市場の外部に位置するものとしてではなく、それとの相互作用のなかで立ち上げられ形成されていったものとして捉えるべき、という論考の趣旨であった。

本書評伝の第一部は、*The White Peacock*, *The Trespasser*, *Sons and Lovers* がそれぞれ当初の原稿からどのような媒介を経て出版作品へと変貌していったのかを、2009年論文と同様の視点によって跡づけた「知的な批評を提供する実践的で説得力をもった厚みある論述」となっており、とても読み応えがある。それを踏まえてあらためて考えてみたくなるのは、ロレンスが *Lady Chatterley's Lover* をまずは私家版で出版すると決断したことと、稿を重ねて変化していった小説の内容との関係である。小説 *The Green Hat* で大儲けしていたアルメニア系作家 Michael Arlen (『チャタレー夫人の恋人』に登場する Michaelis のモデルとされる) との偶然の再会が私家版『チャタレー夫人の恋人』実現の重要な後押しとなったこと、さらにはその後の展開について、第七部でハリソンは詳細に記述している。通常の文学市場での流通とは異なる、私家版としての流通を前提とした経済的物質的条件下にあった『チャタレー夫人の恋人』。そのような「作品」を流通の文脈とともに読み直すことは、本書評伝読後のわたしたちの重要な課題となるであろう。

(木下 誠)

David Ellis, *Love and Sex in D. H. Lawrence*
(Clemson University Press, 2015)

著者はケンブリッジ大学出版局から刊行された3巻本のロレンス評伝の第3巻 *D. H. Lawrence: Dying Game 1922-1930* (1998) を担当している。この3巻本の評伝がロレンスの作家としての全体像を見せてくれているものであるとすれば、本書は愛とセックスという限定したテーマについてロレンスが諸

作品のなかでどのように向き合っているのかを人生及び執筆活動なかで辿っている。

愛とセックス、とくに後者についてアカデミックな場で喧々譁々と論じられてきたことはそれほど多くないのでこのテーマについては論じる余地が残っているとし、ウィトゲンシュタインを引き合いに出して「ある現象に困惑したり難題に直面したりしたときには、新しい知識を求めるのではなく、既知のことを順序良く並べるべきである」と序文で慎ましく述べながらも、従来確かに大っぴらに指摘され、精査され、分析されて解釈されてくることのなかったテーマ——セックスやホモセクシュアリティや肛門性交——を考察している。著作のなかのこのような芸術的素材を読み込みながらそれらと関連する実体験を作家の実人生のなかに搜索し、その関連性または近接性がある場合、「このように考えることができるといいませんか？」と控えめな態度で問題提起してくれる。このような意味で、ケンブリッジ版の3巻本の評伝の縮約版といえる本書の「弾丸ツアー」を試みることで紹介となれば幸いである。

CHAPTER ONE: LIFE BEFORE FRIEDA

著者はロレンスがショーペンハウアーの「愛の形而上学」を読んでいたことを指摘しつつ、1906年のジェシーの21歳の誕生日に書き送った手紙の結末部に言及して「ロレンスは愛とセックスを明確に区別している」と述べている。だが厄介なのは、ロレンスにとっての愛の中身が明瞭ではないことだ。Perfect loveを感じた経験はジェシーの兄アラン・チェインバースとの間でのことだったと1920年7月にコンプトン・マッケンジーに語ったロレンスの言葉を引用しながら、アランが‘the original of my George’だと書いていること、そして『白孔雀』のなかで池で泳いだあとにシリルが裸のジョージの身体をタオルで拭く場面を持ち出して（このエピソードの下地になったと考えられる、ロレンスの旧友のジョージ・ネヴィルが自分の裸体をロレンスの前で曝したエピソードも加えて）、ロレンスとアランとネヴィル、そしてシリルとジョージとの関連性を示唆しながら、ここに本質的且つ潜在的なホモセクシュアリティが看破できる可能性を認めている。

だが著者は、ロレンスがホモセクシュアル志向を意識的に抑制していたという見解には異を唱えている。女性に性的な関心を抱いていたもののそれが満たされないで鬱屈としていたことが『トマス・ハーディ研究』のなかでジュードのスーへの肉欲を分析・解釈している箇所、そして24歳のときに書いた「童貞」という詩から窺い知れるという。手淫は「倦怠し、満たされない」と記しているし、また「ボルノグラフィーと猥褻」のなかでマスターベーションはセックスとは違って「相互性」がないし「丸損だし……真の客体がなく主体だけしか存在しない」行為だと述べていることから、このような性欲の処理方法をロレンスは是としていなかったとする。

セックスの相手もない、自慰行為も受け入れられないロレンスはその結果袋小路に迷い込むように唯我論ともいえる自己閉鎖的なナルシズムをもつようになったと説明している（1908年7月30日付のブランチ・ジェニングズ宛の書簡）。手淫を退けて、性交によってのみ自我から解放される他者との相対性のなかで自己のアイデンティティを認識することができると考えていたロレンスはセックスに多大な期待を寄せていたといえる。

焦燥に駆られたロレンスはしたがって売春婦に目を向けるが、その態度は『虹』のトムのエピソード（R 20）に表象されているとしている。結婚を前提としない性的関係を求める不誠実な態度を道徳的に非難することは簡単だが、ロレンスの状況を慮る必要もあるだろう。そしてアグネス・ホルトやヘレン・コークと首尾よくいかなかったロレンスはジェシーに接近した。『息子と恋人』のなかの「ミリアムの試練」には、因襲的のみならず厳格な道徳規範の持ち主であるヒロインとポールが肉体関係を持つエピソードが描かれているが、付帯損害に対するポール（そしてロレンス）の無頓着さは看過できないと述べたうえで、ロレンスの入り組んだ心情——責任感、後悔、恥辱、落胆——が「ミリアムへの最後の言葉」という詩に滲んでいるという。

ジョージ・ネヴィルの回想録にある、ルイ・バロウズがロレンスの上着を庭で払ったらポケットからいくつものコンドームがこぼれ落ちたというエピソードを紹介してロレンスの性的欲望のありさまを伝える。自慰行為もダメ、売春婦もダメ、ガールフレンドとの満足 of いくセックスもダメと八方塞がりのロレンスの解決策はアリス・ダックスだった。この女性とクララ・ドーズ

との共通点を指摘する一方で、クララのエロティシズムが強調されている小説の後半が描かれたのはロレンスがフリーダと出会ったあとのことであること、そしてクララの描写は写真で見るアリス・ダックスよりもフリーダに近いことなどに言及して、ポールのクララとの関係は実際のロレンスとフリーダのそれが下地になっている可能性を強調する。しかしながら、成就に至ったかに見える創作物の男女関係の描写に著者は不協和音を聞き取っている。確かにポールは‘the impersonality of passion’を経験するが、その一方でクララはそのために利用、搾取されていると感じることになるのではないか、ということである。つまり、「相互的な関係」が成立してはいないのではないかとロレンスは懷疑していると解釈している。そして、ロレンスが抱え始めていたらしいもうひとつの問題——ふたりが同時にエクスタシーに達したからといって、それが二回三回と続くとは限らない。自分が快楽を得るときに相手も一緒に快楽を得るとは限らない——の萌芽を見出している。

CHAPTER TWO: LOVE'S PROGRESS

ロレンスとフリーダの関係に焦点が当てられ、そのなかで書かれた『息子と恋人』、『虹』、『恋する女たち』が中心に論じられている。アリス・ダックスとの関係にも関わらずにフリーダに一目惚れ coup de foudre したロレンス自身の姿が、『虹』でトムとリディアが出会うシーンに鮮明に反映されていると述べている。ロミオとジュリエットの出会いほど劇的ではないが、一目惚れは本能のひとつの表象であり、ロレンスの場合はその本能が真正なものである限りは信用に足るものなのだが、真正か否かはいくつもの物語のなかで登場人物たちが闘いながら確認していくことになる。

フリーダの影響のために『息子と恋人』がフロイト的になったことを指摘しつつも、物語のエディプスコンプレックスに繋がる箇所すべてがそのためではなく、『ハムレット』との共通点にも言及している。そして、『息子と恋人』がフロイトの理論を小説に焼き直したものであるという評価を受けることにロレンスは苛立ちを覚えるようになって反フロイト的態度で精神分析と無意識についての本を書き、とくに2冊目の『無意識の幻想』においてその態度が顕著だとする。

本能というものがどれほど信頼に足るものであるのか、魅かれ合った人間は永続的に友好的に暮らすことができるのか、について個人的経験を踏まえて答えを出すことがロレンスにとっての関心事となったとし、そのような態度が「新しいエバと古いアダム」に描出されていることを検証している。そして、『見よ！ 僕らは切り抜けた！』所収の詩とこの短篇のテーマとの近接性を明らかにしている。

『虹』のアナとウィルの感情の進展の描出は、フリーダなしでは到底成し得なかっただろうと評している。蜜月の官能的な時期を過ぎると、アナとウィルは互いの関係のなかで生きていながら闘争するようになるが、これは『見よ！ 僕らは切り抜けた！』でうたわれていることの焼き直しのようなもので、ふたりのこのような拮抗は隠喩的にベッドシーンに描出される（R 151）。アナの妊娠によってウィルは精神的な辺境へ放逐され、このことでウィルは陰鬱になり憤懣を抱くようになる。互いに身勝手に自己満足を求めるようになり、己が充足するために相手の肉体を利用するという姿勢が肛門性交へと至るが、これを著者は sex without love or tenderness と評価する。ロレンスはこの夫婦のその後を追究して描くことなく、彼らの娘のアーシュラに焦点を合わせるようになる。『恋する女たち』でアーシュラと妹のグドゥルンが実家を訪ねるが空っぽになっていて、両親の寝室で姉妹は父母の結婚に思いを馳せる場面（WL 373）に肛門性交するに至った男女の成れの果てが暗示されているとする。

異性間の肛門性交は抑圧されたホモセクシュアリティを裏付けるものだという解釈がなされる場合があるという話から同性愛的要素の強い「プロシア士官」を挙げて、『白孔雀』で萌芽を見せていたホモセクシュアリティへの控えめな関心が真剣に向き合わなければならない主題として扱われるようになったとも併せて述べている。1913年12月2日付のヘンリー・サヴェッジ宛、そして1915年2月12日付のバートランド・ラッセル宛の書簡を引用して、この時点でのロレンスがあくまでも知的レベルでの関心をホモセクシュアリティに抱いていたと論じる。1915年3月のケンブリッジ訪問でロレンスが襲われた生理的な嫌悪感を、フロイト的のいうところの「反動形成」だといえるかもしれないと判断している。

『白孔雀』の水泳の場面と『恋する女たち』のレスリングの場面から読み取ることのできるロレンスのホモセクシュアリティ的志向の相違点は、作者にどれだけの自覚があったのかという差だと分析している。その根拠として、『王冠』のなかの「平安の実相」で ‘a serpent of secret and shameful desire’ という表現で自身の深奥に潜在している特殊な感情の萌芽にロレンス自身が言及していることを挙げている。

さらに性的な場面では往々にして男女間にパワーゲームが生じていると、『虹』と『恋する女たち』を挙げて論じる。食うか食われるかのせめぎ合いのなかで相手を破壊しよう（そしてそれに抗おう）とする展開がグドゥルンとジェラルド、そしてアーシュラとバーキンの間には描かれているとする——暴れる馬を御する、兎の首根っこを押さえつけておとなしくさせる、「月夜」で水面の月影にくり返し石を投げつけるなど、ロレンスのメタファーを駆使した描出法が際立っている。弱者が強者に飲み込まれるという危険性を孕み、己の個性性を失うことに繋がるアーシュラ的な愛に対抗するために、バーキンは ‘stellar polarity’ という概念を持ち出す。「常に勝者と敗者が生じる愛」とは異なる種類の愛を欲するバーキンとアーシュラは「遠出」でひとつの結末に至るが、この言語化はまさにロレンス的で、チャクラなどの東洋思想に興味をもっていたことから人間の身体が重要な働きを担える可能性を試しているようだと言っている。

CHAPTER THREE: THE ROAD TO DISILLUSION

ここでは1919年から1922年頃までの主にホモセクシュアリティをめぐるロレンスの態度が論じられている。1919年版の『アメリカ古典文学研究』の原稿を読むとホイットマンについての評論が展開されているというよりも、そこには人間の身体へのロレンスの関心が鮮明に打ち出されていて、それは ‘stellar polarity’ に相当する男女間のセクシュアリティの表出へと繋がっている。だがホモセクシュアリティも難解な言い回しで触れられていて、晦渋なこのエッセイのなかで殊更に人間の身体の部位や機能について触れていることは「頭でっかちの現代人」の関心をそれらに向けるためだと述べている。このエッセイは男性に向ける気持ちのなかに性的な要因が含まれていること

を合理的に説明しようとするだけでなく、それは女性に対する性的感情に勝るものであることを自分自身で納得することを意図して書かれたもののよう
に思えると評している。

『アーロンの杖』でリリーがアーロンにマッサージを施す場面はシ ril とジョージ、バーキンとジェラルドを想起させるが、これは男性同士の一風変わった繋がり方、そして女性との関係によって生じる脅威に取って代わるものを象徴している。しかしリリーとアーロンは対等な関係にはなく、そこにはリリーのアーロンに対する優越感のようなものがあり、相手にそれを認めさせるという意識が見え隠れする。アーロンと侯爵夫人とのセックスシーンにも power という単語が登場している。同性間にせよ異性間にせよ、ここに描かれる人間関係は少なからずパワーゲームの様相を呈している。またこの小説には、性的不能をロレンスが心配しはじめていることを思わせる箇所があるとする。「杖」が指しているフルートは男性生殖器を表していて、アーロンがその楽器を失くすという出来事が彼から生殖能力が奪われることを示唆する。この小説にも男性による支配と権力の行使を示唆する異性間の肛門性交が仄めかされている箇所があるが、肛門性交に至ったのちのアナとウィルをロレンスは描かなかった一方で、アーロンが結果的に覚えているのは憤懣と嫌悪感である。救済、復活、自己完結の回避、未知なるパワーとの交感といったものを約束してくれるはずだった性的な関係に失望したらそれから先はどうしたらいいのだろうかという書き方をして、まるでロレンスの小説のように著者は次章へ橋を架けている。

CHAPTER FOUR: NEW WORLD BUT NOT SO NEW THOUGHTS

『カンガルー』のメインテーマはソマーズの鼻先にかざされる（バーキンがジェラルドとの間に求めたような）男女間のセックスに対する幻滅感を補うものとしての fellowship——『白孔雀』、『恋する女たち』、『アーロンの杖』といった一連の作品に貫流している要素、つまり女性を必要としない男性間の繋がり——である。婚姻内外で希求する人間関係を構築できないソマーズは、バーキンが裸で草の上を転がるように、満月が天空に輝く下を散歩するといった auto-eroticism とも受け止められるような自然へ回帰する素振りを見せる。

性的充足を他者に否定されると、当事者は自然界との繋がりのなかでそれを得ようとするようである。

『アーロンの杖』と『カンガルー』では男女間の愛とセックスは副次的なテーマになっていて、『羽鱗の蛇』ではそれに代わるものとしての同性の関係が描かれている。だからといって男女間の結びつきが探求されないことはない。ケイトはシプリアーノの 'phallic powers' に魅かれるが、そんなふたりの性行為ではウィルとアナが経験したような相互的な歓喜は影を潜めてしまっていて、在るのは the ravishing と the ravished のようだと解釈している。この背景には、コンプトン・マッケンジーに、フリーダとのセックスで同時に性的絶頂に達したことがほとんどないと告白したロレンスの姿が垣間見られる。そして、ラモンとシプリアーノが築こうとしている新しい世界では、政治の領域だけでなく、寝室のベッドの上でも、男性が主導権を握る支配者であり主人であろうとしている姿が描かれていると評している。この流れのなかで筆者は、「馬で去った女」、「まっぴら御免!」、「プリンセス」を槍玉に挙げたケイト・ミレットの単純すぎる読解・解釈の修正を丁寧を試みている。

『ヤマアラシの死をめぐる随想』所収の「愛はかつて可愛い少年だった」に書かれているスーザンというカイオワ牧場で飼育していた雌牛についてのくだりに注目して、ここには自然と人間との繋がりが人間同士のそれと同様に必要なものであると説かれているとし、これはロレンスが、カイオワ牧場は俗世間とは無縁と思えるほどの美しく素晴らしい場所、人間社会の外側に存在する究極の場所だと捉えていたからだと読む。このような感慨が『セント・マウア』ではルーの自然との交感として描出されていて、彼女の感応力はパーキンやソマーズの自体愛に共通すると解釈している。書簡や「アメリカのパン神」のなかで言及されている松の木がこの中編では 'a passionless, non-phallic column, rising in the shadows of the pre-sexual world, before the hot-blooded ithyphallic column ever erected itself' (*St.M* 144) と描写されているのだが、この 'the pre-sexual world' は 1925 年というこの時期の結核の影響のひとつとしての性交能力の喪失に繋がるという解釈は秀逸だ。そして、この表現の言霊が短篇「境界線」に宿っていると指摘する。シプリアーノは 'phallic powers' を使ってケイトを 'prone submission' に追いやるのだが、黄泉の国

のアランは、それ以上と言わないまでも同等の力の ‘non-phallic forces’ を駆使用する—— ‘non-phallic’ (だから ‘pre-sexual world’) な他の力でキャサリンを繋ぎとめておきたいのだ。

CHAPTER FIVE: A CHANGE OF HEART

晩年の諸作品を考察している。『処女とジプシー』では嫌悪して止まない(母親のなかに見出していた)支配的な女家長の扱い方を試みていて、物語の結末部の怒濤の洪水は完璧な浄化装置として不健全な階級的感情が蔓延していた牧師館を洗い清め、その玉座に鎮座していた祖母すらも流してしまう。この物語にはロレンスが作家活動を始めた初期の頃にすでに諸作品の骨格となっていたものが反映されている——中産階級または上流階級の女性が労働者階級に属する男性との間に階級の壁を越える関係を構築しようとするというものである。

『チャタレー夫人の恋人』の第1稿から第2稿への「発展的な」書き直しに関して、ボルトン夫人に着目する。彼女はコニーとの会話のなかで事故死した夫との繋がりを回想するが(第3稿にも描かれている)、これは男女間の充足的な性的関係が不断に続くものであるとロレンスは考えていなかったことの証左だと判断している。しかしこの小説の改稿についてもっとも重要なことは、コニーと森番の融和性を高めたことだと指摘する——第1稿は階級間のギャップを越え難い過酷なものとして扱っているの、ふたりの生活を現実的なものとする事ができていない。しかしこれを実現しようとした結果、第3稿では森番の資質についての大幅な修正が加えられてパーキンはメラーズへと変容した。

また、コニーのオルガスムスの描出が隠喩的であること、そして感情の言語化に重きを置くようになってきていることも著者は指摘している。コニーがメラーズの小屋に泊まった翌朝の場面を引用して分析を試みて(152-53)、この場面の言語化に関してロレンスがどれほど truthful and realistic かを解説している。だが残念なことに、この引用のなかには ‘phallos’, ‘phallus’, ‘penis’ という3種類の単語が登場しているのだが、これについて言及も考察もしてはいない(しかも、引用文中の ‘phallus’ は間違いで本文では ‘phallos’ である)。

‘phallus’（もしくは ‘phallos’）という単語をどのように解釈すれば ‘realistic’ に繋がるのか精査してもっと論じてもらいたかった（やはり、この3つの単語を同じものだと捉えてしまうのだろうか）。本書のそこそこでロレンスの書簡を有効に援用している著者ならばこそ、ここでもロレンス自身が使っていた ‘phallic consciousness’ という言葉を引っ張ってきて、この難解な「哲学」の解説をしてもらいたかった。

ここで著者はかつて「ロレンスはバイセクシュアルなのだ」という結論を出したことを想い出している——メラーズの軍隊での経験、メラーズと馬との繋がり（馬が抑圧された性衝動を象徴することが多い）、メラーズは ‘mouth kisses’ が大嫌い、コニー（とメラーズ）の臀部を描写している箇所、メラーズがコニーの臀部を愛でる箇所などを考慮すると、ここには抑圧されたホモセクシュアリティが提示されていると理解できないこともない——が、その可能性は疑わしいとしている。そして『チャタレー夫人の恋人』のなかに描かれているコニーとメラーズの性行為のひとつ——‘a night of sensual passion’——の肛門性交の可能性を指摘して、メラーズがコニーの臀部を愛でながら ‘two secret openings to her body’ に触れる箇所を利用しつつ、『ミスター・ヌーン』（MN 191-92）や「ポルノグラフィーと猥褻」（LEA 242）にも言及しながらこの行為の解釈を試みている。それは、（排泄機能を含む）人間の肉体の働きのすべてを白日の下に曝すことで恥辱という感覚を根絶することにあるのではないかというものである。

森番のパーキンが第3稿ではメラーズに「変身」したことで、前者の恥毛をめぐるバーサとパーキンのエピソードは後者からは削除されている。その代わりに、メラーズは長々と自分の（ロレンス自身のものとも思える）過去の女性経験についてコニーに語っている。ここで強調されていることは性行為において弱肉強食——パワーゲーム——を実践するバーサ（そしてドイツに留学していた頃の、ミカエリスと不倫していた頃のコニー）のダークサイドである。つまり、作者によって容認されることのない sexually inadequate な男女間のセックスの在り方を提示していると解釈する。

CHAPTER SIX: A PROPOS

著者は愛とセックスの繋がりにロレンスが取り組んできた痕跡を時系列に沿って観察、考察、解釈してきたのだが、この結末部において「『チャタレー夫人の恋人』について」を援用して自分の思考を整理しようとしている。その引用の大半は、ロレンスが結婚について、あるいは男女の繋がりについて述べている箇所である。そして、その引用に含まれている ‘mystic’ という単語に注目しながら、愛やセックスについてロレンスの哲学は未完の状態だったことを示唆している。『エトルリアの故地』や『逃げた雄鶏』などにも言及してその時々々のロレンスの態度を見せてくれるのだが、これもまたロレンスの人生と芸術は紆余曲折を経ているということを示す。1926年に、どうしてジェシーと結婚しなかったのかとウィリー・ホブキンに訊ねられたときの答えも引用している——‘I should have had too easy a life, nearly everything my own way.’ ロレンスはこの時点でも、まだ答えを見つけ出そうとする途中にいたのだ。本書はロレンスのそんな姿を包括的に再現してくれることで、愛とセックスに対する私たちの関心を喚起すると共に考える機会を改めて与えてくれる。

(中林 正身)

遠藤不比人

『情動とモダニティ——英米文学／精神分析／批評理論』

(彩流社, 2017年)

この本を手にとった読者は、いきなり著者からの挑発に突き当たっている。表紙を飾る印象的な濃紺のフィールドに置かれたポール・セザンヌ作《青い花瓶》(1889-1890)のことである。読者は、これまでに培った西洋美術史に関する教養を発揮して、この絵画がポスト印象派を代表する画家の作品であることを正しく理解し、それを美的に鑑賞すればいいのだろうか。それともロジャー・フライが企画し、一九一〇年冬にロンドンで開かれたポスト印象派

展を訪れた観衆たちがしたように、古典的な均斉から逸脱したこの絵画のデッサンの歪みを前にして「激発と笑いの発作に襲われ」、セザンヌを「無政府主義」あるいは「児戯に類する遊び」としてヒステリー的に弾劾すべきなのだろうか。もし後者のような反応を教養の欠如としてあざ笑う美術愛好家がいるとしたら、そのような人物はセザンヌという画家、さらにはモダニティの諸条件に応答するモダニズムの文学／美術を崇拝する身振りで、じつは根本的に裏切っているのかもしれない。というのも、当時の観衆たちの「外傷的な反応」、その主体性の「根源のなにかを攪乱」するものとしての「情動」に注目し、それを深い意味で反復し、さらに私たち読者にも向けて触発するところに、この本の最大の企みが込められているからである（30-31）。

『情動とモダニティ』は英米文学研究においては九〇年代後半からゆるやかに台頭した「情動論的転回（the affective turn）」を受けつつ、モダニズム文学・美術、精神分析、冷戦期以降の現代文学を大胆に再解釈する試みとしてとりあえず要約できる。¹ただし、このような紹介にはいくつもの重要な留保が必要だろう。まず「情動」については、しばしば実験心理学や生物学、あるいはドゥルーズやスピノザといった難解な哲学の用語を装飾的に用いて急速に抽象化したその理論に対する苛立ちを、遠藤は隠そうとしない。この動向を退行的な生物学主義として厳しく拒絶する彼は、情動を「言語論的転回」の徹底（その破綻に至までの厳密化）の果てにのみ垣間見ることができる」なにかとして位置づける（261）。ここでいう「情動」とは、心理学などの科学言説によって人間の内面に回収される安定した実体（遠藤はそれを「感情」と呼ぶ）ではあり得ず、むしろそのような包摂の試みを内側から凶暴に食い破る間主観的・集团的・政治的現象——「内部の外部」として、抑圧のただ中に不気味に回帰するものである。²

序章において遠藤は、フレドリック・ジェイムソンのリアリズム論、柄谷行人の日本近代文学論、ポール・ド・マンのロマン主義論を参照することで、近代の条件としての「存在」と「意味」との分裂こそが「情動」の台頭を促した消息をたどる。特に柄谷とド・マンを参照しつつ彼は、前近代から近代への移行期に、中世的な形象秩序あるいは「既存のキリスト教的象徴体系」の破綻による「剥き出しになった非意味（もの）」の露呈を見出す（22）。そ

のような「非意味」をふたたび安定した意味秩序に回収する試みが近代文学における「内面＝心理」と「外界＝風景」との鏡像関係であり、イデオロギーとしての個人主義的心理学であったとするならば、その限界にある「抑圧し切れぬ過剰な残余」こそが、実存的不安としての情動を喚起する（25）。この構図の詰めの一手法は、モダニティの「起源」において露呈した「非意味」の近代文学・心理学による隠蔽に対する根源的な批判、「起源の抑圧という起源の暴露」としてモダニズムを位置づける論点である。この解釈は、「残滓的」なものへの遡行が「勃興的」なものに接続されるレイモンド・ウィリアムズの逆説的な時間性にモダニズムを位置づけると同時に、その批評的解釈をあくまでも「歴史的かつ物質（もの）的なテキスト性のレヴェル」で遂行する遠藤の姿勢に直結する（28）。言い換えれば、抽象論に陥りがちなよくある情動理論を退け、むしろ一方では近代の諸条件をめぐる（根源的な意味での）歴史主義、他方では「非意味」と「意味の過剰」をめぐるテキストの精読とを両立させるアクロバティックな批評戦略のために「情動」を活用する可能性が、この枠組みによって開かれているのである。

その枠組みによってモダニズム以降の文学・思想テキストに対するいかなる批評が可能になっているのか、残念ながら紙幅の都合上、その全てを満遍なく紹介することはできない。³だが、フライ、セザンヌ、ヴァージニア・ウルフを手始めに、D・H・ロレンス、ジークムント・フロイト、ジョウン・リヴィエール、レイモンド・ウィリアムズ、ロラン・バルト、ド・マン、エドワード・オールビー、三島由紀夫、カズオ・イシグロ、ジェイムソン、ショシャナ・フェルマンといった各章の題目に掲げられた人名を列挙するだけでも、狭義のモダニズム研究や英米文学研究の範囲には収まらない、この本の射程の広さが確認できるだろう。また近代における「非意味＝意味の過剰」の隠蔽と抑圧を徹底的に告発するこの本の基本的スタンスからも予想されるように、遠藤の批評はその対象を「見知った」ものとして扱う私たちの自動化した読解習慣を効果的に異化し、攪乱するものとなっている（この書評の冒頭に挙げたセザンヌはその象徴的な事例である）。この本でも繰り返し参照されるフロイトの語彙を用いれば、「見慣れたもの（heimlich）」のなかに「見たこともないもの（unheimlich）」、つまり「不気味なもの（the uncanny）」としての情動

を見出すこと——この点でこの本は、これほど多様な題材を扱ったものとしては驚くほどの一貫性を保持している。⁴と同時に、これは文学や思想のテキストを「見慣れた」ものとし、その真の情動的衝撃との遭遇を回避しがちな制度化された人文学教育・研究に対する根源的な批判ともなっている（その良例は第一章でフロイト中心主義に抗って著者が強調する、フロイトのテキストそれ自体の破綻と逸脱性だろう）。

すでに言及したことだが、こうした著者の批評が、あくまでもテキストの言語の丁寧かつ挑発的な精読に基づいて遂行されていることは、あらためて強調するに値する。例えば、一般的には「美しい日本語」を擁護したと見なされている三島由紀夫のテキストに頻出する奇妙なカタカナ英語に注目する第七章、あるいは日本語と英語間の「翻訳」の問題にからめて論じられるカズオ・イシグロ作品における固有名（日本語ではカタカナとして、英語ではローマ字表記としてしか表現できないその音声的異質性）を糸口にした第八章など、著者の議論は「言語論的転回の徹底」としての情動批評というそのプログラムに愚直なまでに忠実である。難解な理論に耽溺した批評的研究の死角に入りがちな言語の「物質性」にあらためて注意を喚起する点で、この本の姿勢は模範的である。このような精読の姿勢は、対象テキストの複雑性を回避せず、それを粘り強く読み抜くことであらたな洞察を導く手法としてもあらわれている。例えば第一章で扱われる D・H・ロレンスの「反心理学」のテキストに見られる「すぐれて晦渋かつ矛盾し混濁をした論理」に関する考察(59)、あるいは、リヴィエールの論文に見られる「臨床的かつ理論的混乱」(68)をたんなる思想的欠陥や論理的破綻として性急に退けるのではなく、むしろ根源的に否定的な情動の痕跡を刻印されたテキストとして、遠藤は大胆に再評価している。さらに言えば、ロレンスを「プロト＝ファシズム」や「男根中心主義」といった紋切り型のイデオロギー批評の観点から非難するような研究に対して、この本の著者はじつに手厳しい(103)。その対象の「可能性の中心」を射抜くことで救済するこの本の姿勢は、人文学の批評として本来あるべき姿と言えるだろう。

ただし、この本に関してこのような内容要約だけで紹介の任務を果たしたと満足することは、評者にはできない。というのも、『情動とモダニティ』と

いう本の真価、あるいはそれを読むことの「不快の快」(132)は、このテキスト自体の言語的・情動的強度にあるように思われるからである。それは例えば、「瞠目」「刮目」「晦渋」「晦冥」などといった「遠藤語」(としか形容のしようのないもの)の頻用のような語彙レベルのみならず、読点やカッコを利用した過剰なまでの並列構造(例えば「……こそが、バルト、フロイト、ド・マン、マルクスを幻惑、魅了、憤怒、落胆、嘔吐させていた」という一文[156])、矛盾・逆説(「……を恍惚と嘔吐させる」[153])、反復(「……を回避すること」[178])などの文体的な特徴こそが、議論自体と切り離せないかたちで、その「エクリチュール」としての強度を形成している、ということである。もし「情動」が「歴史の事実確認性を攪乱する言語行為的な力」であるという遠藤の論旨を受け入れるのであれば(158)、その力に直面したバルト、ド・マン、そして(ジェフリー・メールマンを経由した)マルクスのテキストのみならず、遠藤のテキスト自体がその情動に貫かれているとしても、不思議ではないだろう。「情動は、批評の対象であるのみならず、批評もまた情動的な実践である」という情動論的転回の基本的な論点を、この本は見事に遂行している(秦65)。あるいは、ジャックリン・ロウズの一文が「痺れるほどに晦渋ながらも本質をつくこの陳述」として引用される時(75)、モダニズムに関するウィリアムズの議論が「心揺さぶるところがある」と評される時(100)、私たち読者はそこにあらわれた遠藤自身の「情動」に「触発(affect)」され、(百年前のロンドンでセザンヌを目にした観衆のように)その対象を新鮮な眼で見直し、そこからほとんど「外傷的」な衝撃を受けるようにと、促されているのである。

ただ書評の作法としては、このような賛辞のみで議論を締めくくるのは、かえって礼を失することになるのかもしれない。上で例示した遠藤の特異な文体が(ジェイムソンの評するコンラッドの文体のごとく)「冷めた読者には受け入れ難い」ものである可能性にも注意しておこう(34)。また、もう少し真剣な異論としては、著者が繰り返す「制度化」に対する批判を挙げておきたい(例えば23, 49, 55, 83, 232などを参照)。それが私たちの知覚を鈍化し、近代が露呈した情動的強度との遭遇を阻害するものである限りで、「制度化」はたしかに批判されねばならない。だが、だからといってセザンヌの作品に

ついて、あるいはロレンスやフロイトのテキストに関する基本的知識を養う上での人文学という制度そのものの役割がまったく無意味（有害）であるということにはならない。もちろん遠藤はそんな議論をしている訳ではないし、そのような誤読の余地もほとんど存在しない。しかしながら、あろうことか行政機関が通俗的な人文学不要論を助長するメッセージを発する現代において、個人のライフスパンを越えて存続しうる「制度」が生み出す集団性について、否定にとどまらない、より積極的な議論が求められてはいないだろうか。⁵ただしこれは、遠藤の批評を制度の「内部の外部」として、それをいかに積極的に継承してゆけるか、一人一人の読者が課題とすべきことかもしれない。そのような意味で「情動とモダニティ」という本書のテーマは、「冷めた読者」として距離を取ることはできない、まさに「情動的」な衝撃を私たち自身に投げかけているのである。

注

- 1 九〇年代半ばにおける当初の「情動論的転回」の問題意識について論じた秦の論考を参照。これは、遠藤の本書と高村峰生の『触れることのモダニティ』（2017年）をめぐってヴァージニア・ウルフ協会で2017年7月29日に開催されたシンポジウム「徹底討論：「情動・触覚・モダニティ」をめぐって」を『ヴァージニア・ウルフ研究』にて特集として採録するにあたって、序文として書かれたものである。
- 2 遠藤の仕事に一貫してあらわれる「内部の外部」という修辞については、高村の論考を参照。この論文は理論的に特に難易度の高い第三章、第五章についての優れた批評ともなっている。
- 3 『情動とモダニティ』の簡潔にして要を得た要約は鈴木の手評を参照。
- 4 「不気味なもの」をめぐる議論の補足としては、遠藤「アウラと情動」を参照。
- 5 このような「制度」が生み出す集団性と政治性に関しては、遠藤自身が言及する、ミケル・ボルク＝ヤコブセンの研究が対象としたフロイトを「原父」とする精神分析という「制度」がひとつのモデル（反面教師？）となるかもしれない（97）。

引用文献

遠藤不比人「アウラと情動,あるいは残滓的なものの唯物論をめぐる断章」『ヴァージニア・ウルフ研究』第34号(2017年):86-95.

——『情動とモダニティ——英米文学／精神分析／批評理論』彩流社,2017年.

秦邦生「《序》批評の情動,読みの手触り」『ヴァージニア・ウルフ研究』第34号(2017年):63-72.

鈴木孫和「遠藤不比人『情動とモダニティ——英米文学／精神分析／批評理論』」『ヴァージニア・ウルフ研究』第34号(2017年):120-23.

高村峰生「『内部の外部』——遠藤不比人著『情動とモダニティ』をめぐる」『ヴァージニア・ウルフ研究』第34号(2017年):73-85.

(秦 邦生)

ロレンス研究文献

(2016 年 9 月～ 2017 年 8 月)

(日本在住の研究者あるいは国内出版の英語文献)

Iwai, Gaku, (論文) “Did Lawrence Like or Hate the Germans?: Wartime Discourse on War and Peace in *Movements in European History*”. *Études Lawrenciennes* 47, 2016.

Kuramochi, Saburo, (論文) “D. H. Lawrence’s View of Anarchists in *Twilight in Italy*”, *Otsuka Forum* 34, December 2016.

Oyama, Miyo, (論文) “The Description of the Indians’ Longing for Identity in D. H. Lawrence’s *The Plumed Serpent* and His Other Mexican Fiction”. 『中国四国英文学研究』(日本英文学会中国四国支部) 第 13 号, 2017 年 1 月.

——, (論文) “Epiphany, Transformation, and Communication in D. H. Lawrence’s Short Stories: With Particular Reference to ‘The Horse-Dealer’s Daughter’”. 『表現技術研究』(広島大学表現技術プロジェクト研究センター) 第 12 号, 2017 年 3 月.

Yamada, Akiko, (論文) “A Study of *The Fox*: D. H. Lawrence’s Idea of Duality”. *Language and Institution: Bulletin of Institute for Language Education* (Institute for Language Education: Aichi University) 36, January 2017.

——, “A Study of *The Escaped Cock*: D. H. Lawrence’s Quest for Pagan Harmony”. *Language and Institution: Bulletin of Institute for Language Education* (Institute for Language Education: Aichi University) 37, July 2017.

(日本語文献)

有川智子, (共訳) 『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917～1918)』, 吉村宏一他編訳 (松柏社), 2016 年 12 月.

浅井雅志, (著書)『持続するエピファニー——文学に表象されたエロティシズムと霊性』, (松柏社), 2016年3月.

石原浩澄, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』, 吉村宏一他編訳 (松柏社), 2016年12月.

井出達郎, (書評)「近藤康裕『読むことの系譜学——ロレンス, ウィリアムズ, レッシング, ファウルズ』, 『D. H. ロレンス研究』第27号 (日本ロレンス協会), 2017年3月.

井上径子, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』, 吉村宏一他編訳 (松柏社), 2016年12月.

岩井学, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』, 吉村宏一他編訳 (松柏社), 2016年12月.

有為楠泉, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』, 吉村宏一他編訳 (松柏社), 2016年12月.

遠藤不比人, (著書)『情動とモダニティ——英米文学 / 精神分析 / 批評理論』(彩流社), 2017年4月.

小川享子, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』, 吉村宏一他編訳 (松柏社), 2016年12月.

加藤彩雪, (書評)「David Game, *D. H. Lawrence's Australia: Anxiety at the Edge of Empire*」『D. H. ロレンス研究』第27号 (日本ロレンス協会), 2017年3月.

鎌田明子, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』, 吉村宏一他編訳 (松柏社), 2016年12月.

川端康雄, (論文)「ポール・モレルの「レッサール・アーツ」——ウィリアム・モリスからD・H・ロレンスへ」, 『D. H. ロレンス研究』第27号 (日本ロレンス協会), 2017年3月.

北崎契縁, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』, 吉村宏一他編訳 (松柏社), 2016年12月.

倉持三郎, (翻訳)『キツネ』(アマゾン電子図書), 2017年3月, (光陽社出版), 2017年5月.

近藤真理, (論文)「ロレンスと母権社会」, 『大学院紀要』第53号 (東洋大学大

学院), 2017 年 5 月.

志水(西田)智子, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917～1918)』, 吉村宏一他編訳(松柏社), 2016 年 12 月.

霜鳥慶邦, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917～1918)』, 吉村宏一他編訳(松柏社), 2016 年 12 月.

杉山潤, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917～1918)』, 吉村宏一他編訳(松柏社), 2016 年 12 月.

杉山泰, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917～1918)』, 吉村宏一他編訳(松柏社), 2016 年 12 月.

鈴木俊次, (論文)「D. H. ロレンスにおける「触覚」——「見えない世界」への探求」, 『愛知学院大学文学部紀要』第 46 号(愛知学院大学文学会), 2017 年 3 月.

高村峰生, (著書)『触れることのモダニティ——ロレンス, スティーグリッツ, ベンヤミン, メルロ＝ポンティ』(以文社), 2017 年 3 月.

田部井世志子, (論文)「『セント・モア』の結末に見られる希望の光——機械文明からの自由解放, そして大自然への回帰へ——」, 『北九州市立大学文学部紀要』(北九州市立大学創立 70 周年記念号)第 86 号(北九州市立大学), 2016 年 9 月.

田部井世志子, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917～1918)』, 吉村宏一他編訳(松柏社), 2016 年 12 月.

出水純子, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917～1918)』, 吉村宏一他編訳(松柏社), 2016 年 12 月.

照屋佳男, (翻訳) D. H. ロレンス『無意識の幻想』(中央公論新社), 2017 年 2 月.

中山本文, (論文)「ロレンスの「個」を超えた世界」, 『宮崎公立大学人文学部紀要』第 24 巻 1 号(宮崎公立大学人文学部), 2017 年 3 月.

原口治, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917～1918)』, 吉村宏一他編訳(松柏社), 2016 年 12 月.

福田圭三, (共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917～1918)』, 吉村宏一他編訳(松柏社), 2016 年 12 月.

福西由実子,「ゴードン・コムストックの金銭感覚——ジョージ・オーウェル『葉蘭をそよがせよ』における拝金主義批判」,『D. H. ロレンス研究』第27号(日本ロレンス協会),2017年3月.

藤原知予,(共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』,吉村宏一他編訳(松柏社),2016年12月.

増口充,(書評)「D. H. ロレンス著,小野寺健・武藤浩史訳『息子と恋人』」,『D. H. ロレンス研究』第27号(日本ロレンス協会),2017年3月.

武藤浩史,(書評)「日本ロレンス協会編『21世紀のD・H・ロレンス』」,『D. H. ロレンス研究』第27号(日本ロレンス協会),2017年3月.

安尾正秋,(共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』,吉村宏一他編訳(松柏社),2016年12月.

山田晶子,(書評)“Richard Owen, *Lady Chatterley's Villa: D H Lawrence on the Italian Riviera*, 2014”.『D. H. ロレンス研究』第27号(日本ロレンス協会),2017年3月.

山本智弘,(共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』,吉村宏一他編訳(松柏社),2016年12月.

横山三鶴,(共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』,吉村宏一他編訳(松柏社),2016年12月.

横山三鶴,(研究ノート)「ロレンスの「眠り姫」物語——「馬仲買の娘」と「ヘイドリアン」の場合」,『D. H. ロレンス研究』第27号(日本ロレンス協会),2017年3月.

吉田祐子,(共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』,吉村宏一他編訳(松柏社),2016年12月.

吉村宏一,(共訳)『D. H. ロレンス書簡集 VIII (1917~1918)』,吉村宏一他編訳(松柏社),2016年12月.

日本ロレンス協会第 48 回大会報告

第 1 日 7 月 22 日 (土)

【研究発表】

Mr. Noon にみるセクシュアリティの問題と男性の連帯が示すもの

川田 伸道 (同志社大学嘱託講師)

Mr. Noon の主人公 Gilbert の女性に対する態度の差異に矛盾や疑問を見出す先行研究に提示されているように, Gilbert は女性に向ける眼差しが一部と二部では大きく異なっている. 第一部では「いちやつき」の「名人」とされる彼は, 性に奔放な Emmie を遊び相手とする一方で, 第二部では Johnna の性的快楽主義に対して理解を示す. しかし, 本小説のセクシュアリティの問題を考察するにあたり, 主人公と女性との関係に焦点をあてるだけでは不十分であるように思われる. Gilbert は, Johnna との「完璧」なる性の結びつきを称えながらも, 男性の連帯に対する憧れを示していたり, 女性との関係からの解放を願ったり, Johnna の不貞の相手である Stanley に対する好意をも表明したりしているからである. このような点を考えると, 単なる「遊戯」としての恋愛から, 深い性の融合へと進化を遂げたように思われる Gilbert には, 本人が隠蔽する性の部分が潜んでいるのではないだろうか. そのような観点から本発表では, *Mr. Noon* におけるセクシュアリティの問題に新たな解釈を試みた.

ロレンス / メルロ = ポンティのセザンヌ論の切り開く地平

——モダニズム (美術) 批評と「視触覚」

神徳 敦子 (慶應義塾大学非常勤講師)

本発表ではまず, ロレンスの “The Introduction to These Paintings” と “Art and Morality” におけるセザンヌ論を取り上げ, R. Fry の formalism のセザンヌ論との比較相違, 象徴主義的な Meyer Schapiro との相違, メルロ = ポンティの視触覚 (視覚と触覚の協働) に焦点を当てたセザンヌ論との類似と差異を, 具体的に絵画を例示して指摘し, 各セザンヌ論を美術史の流れ・美術批評の

中に位置づけ整理した。ロレンスとメルロ＝ポンティのセザンヌ論はまた、モダニズムにおける反視覚優位主義の流れ、知覚の組み換えへの関心も共有している。

続いてメルロ＝ポンティの共感覚への関心にも触れ、*Women in Love* の moon-stoning scene を具体的に読み込んだ。この場面は従来、神話的な文脈や自己の崩壊と再生等の *Women in Love* 全体のテーマと関連付けられてきたが、視触覚・共感覚的な表現に焦点を当てることにより、メルロ＝ポンティのセザンヌ観に通じる、自己と世界の新しい表象表現として解釈できる可能性を示唆した。

最後にロレンス自身の絵画の様式・表現上の特徴にも触れる予定だったが、時間が尽きた。

D. H. ロレンスの押韻詩 “The Piano” の改稿をめぐる

倉持 三郎（東京学芸大学名誉教授）

“Piano”（決定稿）は I. A. Richards が合評の作品として選んだこともあって、かなり有名である。それにたいして初稿 “The Piano” はかならずしも有名ではない。本発表では、初稿が決定稿にどう変わったかを明らかにするものである。

ハイネマン版全詩集の編者 Vivian de Sola Pinto はその序文のなかで初稿は決定稿に比べるとより nostalgic であると述べている。はたしてそうであるかを検討した。結論として、より nostalgicなのは決定稿である。なぜならば、初稿には「私」の母に対抗するような奔放な「女性」が登場するが、決定稿では、その「女性」が削除されたり、否定されたりしている。その結果、母がそばにいた幸福な子供時代の追憶一色にそまっているからである。

さらに、この作品の基になったと思われるロレンス家のピアノは、“silk”の描写から判断すると upright piano ではなくて、その前身の square piano であろうと述べた。

【ワークショップ】 D・H・ロレンスと労働（者階級）

The Rainbow における歴史と労働（者階級）

——テキストはどのように〈矛盾〉を扱っているか

司会・講師 近藤 康裕（慶應義塾大学准教授）

ロレンスは労働者階級の家庭に生れたが、教育とキャリアを通して階級的なモビリティを経験し、生涯にわたって地理的にも移動を続けた。ロレンスの文学を考えると、こうした社会的、地理的モビリティがどのように作品に描かれているか、どのように作品を規定しているかを検討する必要がある。*The Rainbow* はミッドランズに根差したブラングウィン家の変遷をたどる物語だが、それは歴史ではなく神話にすぎないとの批判がかねてよりなされていた。批判は、この小説が労働者階級を中心的に描いていないことに向けられるのだが、ロレンスがブルジョア的なものを描いたのは、自身のモビリティとモダニティの歴史性を小説化しようというリアリズムゆえのことであり、歴史と現実をめぐる作家の方法をテキストの〈矛盾〉の扱いに読み込んで検討した。単純な階級上昇や「虹」の形象による問題解決といった直線的な物語構成をとらなかったところに、小説というかたちでのロレンスの歴史叙述の意義を見出しうると指摘した。

労働争議と小説

——D・H・ロレンスとエレン・ウィルキンソンの

「ゼネラル・ストライキ」文学

講師 井上 麻未（聖路加国際大学教授）

ロレンスとエレン・ウィルキンソンは20世紀英国で最大の労働争議に直面し、ゼネラル・ストライキで揺れる英国社会を舞台に階級が異なる男女3人をめぐる愛の物語を執筆した。本発表では、2015年に発表された Charles Ferrall と Dougal McNeill の「ゼネラル・ストライキ文学」研究を踏まえ、異なる読者を対象に、異なる目的・立場から書かれたロレンスの *Lady Chatterley's Lover* とウィルキンソンの *Clash* を読み直すことで、両者が共にラブロマンスという形式をとりつつ、従来の中流階級を中心とする小説のゼ

ネラル・ストライキ理解とは一線を画す、ゼネラル・ストライキの本質を描き出した作品であることを明らかにした。さらに、労働者階級出身者として同時代を生きたロレンスとウィルキンソンが、小説を通して、それぞれ独自のかたちでいかに労働者階級の文化形成に寄与したかを論じた。

Kangaroo における社会主義批判

講師 加藤 彩雪（日本女子大学大学院）

ロレンスは *Kangaroo* の中で、社会主義を痛烈に批判している。何故ロレンスは社会主義を批判したのか、その理由を明らかにする手掛かりとなるのが、ウォルト・ホイットマンへの言及である。ロレンスはエッセイ *Studies in Classic American Literature* の中で、“post-mortem” という単語を多用しながら、ホイットマン批判を展開している。この post-mortem という言葉は、生き生きとした生命力と対立し、ロレンスの社会主義批判の核心となる。ホイットマンは post-mortem を讃える一方で、トマス・ホップズの著書に登場するリヴァイアサンを否定している、というのがロレンスの見解である。ロレンスにとって、生命力溢れるリヴァイアサンを否定することは、世俗的な政治共同体の背後に、見えない神の存在を認めることを意味していた。社会主義によって提唱された労働の平等も神の王国の法の産物であるため、ロレンスが尊重する人間の生き生きとした生命や個性が発揮されないのである。このように本発表では、世俗的な共同体の神の王国への依存が、*Kangaroo* の中で描かれる社会主義批判の理由であることを論証した。

第2日 7月23日（日）

【シンポジウム】 情動・共感・D. H. Lawrence とその周辺

D・H・ロレンスの情動と共感

司会・講師 武藤 浩史（慶應義塾大学教授）

本学会大会における「情動」をテーマにしたシンポジウムは、2010年以来2回目となるが、その間に、Frederic Jameson, *The Antinomies of Realism* (2013) と遠藤不比人『情動とモダニティ』（2017）をはじめとする重要な情

動研究が発表された。後者において、遠藤氏は、その情動論の中に Raymond Williams のロレンス論を組み入れるという離れ業を見せている。武藤は司会進行役を務めると共に、遠藤氏の議論の枠組みを借りつつ、そこに、「それでは Raymond Williams が高く評価したロレンスの初期作品の傑作たるゆえんは具体的にどこにあるのか、それを分析するとどのような結果になるのか」という素朴な問いを挿入して、初期の短編 ‘Second Best’ の冒頭を選んで、その特徴を考察した。

D・H・ロレンスの反心理学、あるいはその情動論的可能性の再読

遠藤 不比人（成蹊大学教授）

ロレンス研究において「情動理論」がいかなる意味を持つのか？この問いに関し、拙著『情動とモダニティ』を参照しいくつかの問題提起をした。特に強調したことは「情動」の「モダニティ」における歴史性である。ニコラス・ロイルの「不気味なもの」をめぐる議論に準拠し、前近代において heimlich なものが近代的な啓蒙思想（典型は科学）の対象となることで不可知のもの、unheimlich なものとして出来するという事態に注目した。心理学の歴史でいえば、神学的な「魂」が近代心理学の対象たる「心」と化すときに同一の現象が起きる。情動とは近代心理学の不可能性に宿る、その内部の外部とでもいうべき不気味な存在である。例えば『虹』でアーシュラが顕微鏡の中に見る「神秘」とは、近代科学の視線の中に宿る科学を逸脱したものとして、上記の情動性を帯びる。この視点は、ロレンスにおける「前近代」を近代の内部の外部たる「残滓的なもの」（R・ウィリアムズ）として脱構築＝歴史化することを可能にする。

文学的経験と「多元的吞気主義」

講師 井川 ちとせ（一橋大学大学院教授）

本報告では、『古典アメリカ文学研究』で用いられた造語 “polyanalytics”（「多元的吞気主義」は岩崎宗治氏の名訳）に着想を得て、多元主義的社会における他者どうしの共生の可能性を探った。ロレンス作品のなかでは、おもに前掲書と『無意識の幻想』を参照しながら、過去 20 年ほどのあいだに、批評の

情動的転回と言える動きを作ったものと報告者が考える批評家（Mary Poovey, Janice A. Radway, Rita Felski, Sharon Marcus ら）の議論，さらにこれらを整理したうえで新たに“eudaimonic turn”（幸福主義的転回）という語で近年の well-being, human flourishing, human thriving への関心の高まりを表現した D. J. Moores の議論を紹介した．報告者の目下の課題研究のフィールドワークで得た考察を踏まえつつ，文学作品が共感にもとづく相互理解を育むことを自明視する，近年の“New Ethics”とも呼ばれる潮流を批判的に検討し，いわば「共感という素養ある読者」を想定したアプローチを唯一特権化する危険を指摘した．

投稿論文講評

今回は2本の投稿論文があり、編集委員による審査の結果、1本が掲載となった。

掲載に至った倉持論文は、ロレンスの詩“Piano”の初稿(“The Piano”)と決定稿との異同を足がかりにしながら、その改稿の意味やそれぞれの版の解釈を巡る論考である。初稿を軸に据え展開される本論は、ロレンス自身の原稿を徹底的に調べ上げるという、氏の『D. H. ロレンスの大学ノート』などの労作から生まれた論文といえる。また注で論じられた、詩で歌われているピアノがスクエアピアノであるという氏の発見により、これまで様々に試みられてきた解釈の軌道修正が今後なされていくであろう。

倉持氏は、『白孔雀』から『チャタレー夫人の恋人』へと至るロレンスのテキストを視野に入れ、様々な角度から“Piano”に迫る。しかしともすれば印象批評的な読解に陥りかねない点も見受けられたので、編集委員会から解釈の論拠を明確にするよう修正をお願いした。また論文の前半は、『全詩集』の編者 V. de S. Pinto の、“Piano”の初稿が追憶過多である」という読解への反論を軸に論が展開されていくが、「決定稿の方が追憶の思いが強い抒情詩である」という氏の結論は、むしろこの詩の一般的な受け取られ方と一致する。“Piano”の抒情詩としての一般的な評価と、倉持氏がこの詩に見出した抒情性との相違が明確になれば、より説得力を持ったかもしれない。

文学テキストの読解といえども書齋に引きこもらず、作品内の事物や作者の自筆原稿を求めて国内外を問わず貪欲に追いつける氏の姿勢、知的探究心にも敬意を評したい。

もう1本の投稿論文は、残念ながら掲載には至らなかった。日本語の精度や論理に難があり、また参考文献や引用の仕方など、形式の点でも粗さが目立った。ただ興味深い論点が提示されており、論文としてぜひ読んでみたいと思う。納得できるまで掘り下げ、ぜひ再投稿していただきたいと考えている。

(編集委員会)

編集後記

先日、熊本では珍しく雪がうっすら積もるなか、徒歩で勤務先まで向かいました。歩いて大学まで行く道のりは、車がすれ違うことすらままならないような細道を、小山を越えて行かねばなりません。かなりの急勾配の上り坂を傘をさしながら登っていきました。家を出たときには細雪でしたが、いつの間にかしんしんと大粒の雪が舞い始めていました。そんな折にふと道の脇に目をやると、高さ1メートル弱でしょうか、人の腰ほどの高さの小さな鳥居が立っていました。この鳥居は以前からあったに違いありませんが、この時に初めてその存在に気がつきました。雪を冠った白に鮮やかな朱色が映え、白々とした朧げな空と緑黒の山道のなか、超然とした厳かな神秘を湛えていました。一体誰が、何の目的でここに鳥居を奉安したのでしょう。不思議の感に打たれると同時に、地の霊が宿っているかのようなキリスト像にチロルで遭遇したロレンスに思いを馳せました。

* * *

今号は、ベテラン研究者による投稿論文、全国大会でのシンポジウムおよびワークショップでの発表をもとにした中堅研究者による研究成果、そして協会内外の研究者によるロレンス関連文献の書評を掲載することができました。今後も、若手、中堅、ベテランを問わず、意欲的な研究成果発表の場にできればと思います。また書評すべき文献や新たな企画など、ぜひアイデアやご意見をお寄せください。

(編集委員長 岩井 学)

追記

本誌校正中に、石牟礼道子氏が他界された。時代も場所も、そしてその文体も違えど、ローカルへの眼差しを突き詰めることでグローバルな作品へと昇華させたロレンスと石牟礼は、通底する問題意識を持っていたように思う。二人は、近代の宿痾に取り憑かれた人間たちを描いた。すなわち近代の魅惑に絡みとられ、自然とともにあった豊かな^{タラフ}生を自ら手放す人間たち。しかしそれを進歩、豊かさを取り違え、その破壊をさらに加速させていく我々人間たちを。同時に自然の持つ豊穡さ、力強さ、そして厳しさを謳いあげた。

櫃^{ヒツ}はびっしりとした実を落とし／咲きはじめた冬の椿も
花を落としつくし／すっからかんになって
枝という枝を／天にさしあげて
うたっているから／いいもんだ

石牟礼道子「風」より

D. H. ロレンス研究 第28号

2018年3月20日印刷 2018年3月25日発行

発行者 日本ロレンス協会 学会番号 (10988)

代表者 浅井 雅志

編集代表者 岩井 学

印刷所 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町
677-2

Tel. 075(343)0006 Fax. 075(341)4476

発行所 日本ロレンス協会

〒802-8577 福岡県北九州市小倉南区北方4丁目2番1号

北九州市立大学文学部比較文化学科 田部井研究室内

日本ロレンス協会事務局

Tel. 093(964)4205

Fax. 093(964)4133

e-mail : tabei@kitakyu-u.ac.jp

ゆうちょ銀行振替口座番号 01300-5-44587

(口座名：日本ロレンス協会)

<http://dhlsj.jp>

Japan D. H. Lawrence Studies

No. 28 2018

Article

The Revision of D. H. Lawrence's Poem, "The Piano"

..... Saburo KURAMOCHI

Special Topic 1: D. H. Lawrence, Labour, and the Working

Classes and History in *The Rainbow*: Mobility and the Aesthetics of Generation

..... Yasuhiro KONDO

The 1926 General Strike and Associated Literature: Working-class Fiction

by D. H. Lawrence and Ellen Wilkinson Mami INOUE

Special Topic 2: Affect and Sympathy around Lawrence

Affect, Modernity, and the Uncanny: Anti-Psychology in D. H. Lawrence

..... Fuhito ENDO

Book Reviews

Takeo Iida, *D. H. Lawrence as Anti-rationalist: Mysticism, Animism and Cosmic Life in His Works* Hidenaga ARAI

John Beer, *D. H. Lawrence: Nature, Narrative, Art, Identity*

..... Haruo AOKI

Andrew Harrison, *The Life of D. H. Lawrence*

..... Makoto KINOSHITA

David Ellis, *Love and Sex in D. H. Lawrence*

..... Masami NAKABAYASHI

Fuhito Endo, *Affect and Modernity: Literature / Psychoanalysis / Theory*

..... Kunio SHIN